

原因・理由・目的表現の相関性についての研究： 「タメニ」「ノデ」「カラ」「ヨウニ」を中心に

著者	于 日平
内容記述	筑波大学博士（言語学）学位論文・平成10年2月28日授与（甲第1765号）
発行年	1998
学位授与大学	筑波大学
学位授与年度	1997
報告番号	甲第1765号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143457

DA
1765 (H6)
1997

原因・理由・目的表現の相関性
についての研究

ー [タメニ] [ノデ] [カラ] [ヨウニ] を中心にー

于日平

筑波大学大学院博士課程

文芸・言語研究科 (言語学)

寄	贈
于	平成
日	年
平	月
氏	日

99006114

目次

序 章 研究の目的と論文の構成	1
1 本研究の構成と内容	1
2 具体的な考察に入るまえに	3
第一章 原因表現と動作目的表現の連続と相違—〔タメニ〕文を中心に—	11
第一節 〔用言+タメニ〕について	12
1. 原因と目的の区別—奥津1986について—	12
2. 出来事発生の継起性について	14
3. 動作の意志性と意志的な動作の目的性の有無について	21
3.1. 意志性の有無と意志動詞について	22
3.2. 意志性の有無と動作主の一致について	24
4. 継起性と意志的な動作による目的性及び従属節と主節の出来事の性格づけについて	27
5. 継起性、性格の異なる従属節／主節の組み合わせ方及び原因か動作目的かの意味決定のについて	30
6. 結論	33
第二節 〔名詞の+タメニ〕について	35
1. 〔名詞の+タメニ〕文の特徴について	35
2. 継起性に基づく〔名詞の+タメニ〕の名詞の意味分類及び表現との関係について	36
3. 〔名詞の+タメニ〕の働きに視点を置いた解釈	40
4. 述語成分の性格と表現の関係について	41
5. 〔名詞の+タメニ〕が表す原因（不利益）と利益目的／動作目的表現の連続性と相違点について	44
6. 結論	45
第三節 〔タメニ〕と〔タメ〕の相違について	46
1. 先行研究について	46
2. 〔タメニ〕と〔タメ〕が示す構文的相違について	49
2.1. 格的関係の明示によって〔タメニ〕が選択される場合について	49
2.1.1. 〔タメニ〕部分と述語の相対的位置について	51
2.2. 対置関係の明示によって〔タメ〕が選択される場合について	52
3. 〔タメニ〕と〔タメ〕が示す表現選択的相違の場合について	53
4. 結論	54

第二章 原因表現と理由表現の共通点と相違点―〔タメニ、ノデ、カラ〕を中心に― 56

第一節 原因表現と理由表現に現れる時間関係と表現の性格について―〔タメニ〕と

- 〔ノデ、カラ〕の対立関係を中心に― 60
- 1. 先行研究について 60
- 2. 〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違について 65
 - 2.1. 時間関係に見られる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違について 66
 - 2.1.1. 従属節のテンスによる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の違いについて 66
 - 2.1.2. 主節のテンスによる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の違いについて 71
 - 2.2. モダリティ形式の用いられ方に見られる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違について 73
 - 2.2.1. 従属節の述語におけるモダリティ形式について 74
 - 2.2.2. 主節の述語におけるモダリティ形式について 76
- 3. 包摂関係に認められる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違 79
 - 3.1. 客体的表現の〔タメニ〕と主体的表現の〔ノデ、カラ〕の包摂関係について 80
 - 3.2. 仮定の条件文を包む原因節の〔タメニ〕と理由節の〔ノデ、カラ〕の相違について 84
- 4. まとめ 84

第二節 因果性表現に現れる根拠の客観性と主観性

- ―〔ノデ〕と〔カラ〕の相違について― 86
- 1. 先行研究 87
- 2. 〔ノデ〕と〔カラ〕の相違について 90
 - 2.1. 理由提起の仕方、理由付けの仕方と主節のモダリティ形式について 91
 - 2.1.1. 理由提起の仕方について 91
 - 2.1.2. 理由付けの仕方と主節のモダリティ形式との関わりについて 94
 - 2.2. 理由を表さない〔カラ〕の用法について 97
 - 2.3. 表現の焦点の当て方について 99
- 3. まとめ 104

第三節 因果性表現の明示的表出と非明示的表出の相違について

- ―〔テ〕と〔タメニ〕を中心に― 106
- 1. 〔テ〕の文法的機能について 106
- 2. 因果性表現に現れる〔テ〕と〔タメニ〕の相違について 107
 - 2.1. 原因になる従属節が状態・動作の結果状態を表す場合について 107

2. 2. 継起性重視と因果性重視の相違について	111
3. まとめ	113
第四節 客体的因果関係（原因）と主体的因果関係（理由）についての補足	
— [名詞の＋タメニ] と [名詞＋なノデ／だカラ] を中心に—	114
1. [名詞の＋タメニ] と [名詞＋なノデ／だカラ] の相違について	115
2. [タメダ] と [カラダ] の相違について	118
3. 結論	120
第三章 動作目的表現と結果目的表現の共通性と相違点	
— [タメニ] と [ヨウニ] を中心に—	121
1. 主節が意志的な動作を表すことについて	123
2. 主節の意志的な動作が従属節の出来事発生に先行する必要について	123
3. 主節の意志的な動作による目的性について	126
3. 1. 先行研究	126
3. 2. 動作目的の [タメニ] と結果目的の [ヨウニ]	127
3. 3. 継起性に基づく動作連続の [タメニ]	128
3. 4. 結果状態の生起を目的とする [ヨウニ]	130
3. 5. 動作目的表現と結果目的表現の関連について	133
4. まとめ	135
終 章	136
参考文献	139
用例出典一覧表	142

序章 研究の目的と論文の構成

1 本研究の構成と内容

本研究は、主に原因と目的の両方を表す〔タメニ〕、理由を表す〔ノデ〕と〔カラ〕、目的を表す〔ヨウニ〕を中心に、複文^{*1}における原因表現、理由表現、目的表現の連続性と相違点を考察することを目的とする。具体的には、〔タメニ〕が表す原因表現と動作目的表現の連続性と相違点、原因を表す〔テ、タメニ〕と理由を表す〔ノデ、カラ〕の間に見られる表現の客体性と主体性の相違点、動作の遂行を目的とする〔タメニ〕と結果状態の実現を目的とする

〔ヨウニ〕の相違点について、分析を行う。以下は、〔タメニ〕、〔ノデ〕、〔カラ〕、〔ヨウニ〕が接続して構成される従属節を、略して〔タメニ〕節、〔ノデ〕節、〔カラ〕節、〔ヨウニ〕節と呼ぶことにし、〔タメニ〕、〔ノデ〕、〔カラ〕、〔ヨウニ〕を用いる複文を、それぞれ〔タメニ〕文、〔ノデ〕文、〔カラ〕文、〔ヨウニ〕文と呼ぶことにする。

〔タメニ〕文の特徴については、いままで二つの角度からの言及が多かった。〔タメニ〕節が原因と動作目的^{*2}の両方を表すことができることについては、奥津1975、1986では、〔タメニ〕文が示す従属節と主節の相対的テンス関係、述語に用いられる動詞の意志性の有無、従属節と主節の動作主の一致などを中心に説明を行っており、また、前田1996（未刊）では、リアリティーとの関係を中心にして、状態性の強い述語は「事実」であるから、原因・理由を表し、「動作性動詞のル形は、リアリティーに関しては『未実現』であるから、原因・理由を表す場合は、前件が事実であるという論理文の原則に反してしまうため、原因・理由を表すことがで

^{*1} 複文については、次のような定義は一般的であるように思う。

『複文』とは、『従属節』を含み、主語・述語の関係が二回以上成立していることを認定できる文であり、
・・・。

『日本文法事典』(p. 254)

文は比較的単純な構成を示すものもあるが、また、いくつかの節を含む複雑なものもある。前者を単文 (simple sentence) といい、後者には重文 (compound sentence) と複文 (complex sentence) の別がある。重文とは、二つの節を並立させる場合で、英語でいうと、andのような並立接続詞でつなぐ文である。これに対して、種々の従属節 (subordinate clause) を主節 (principal clause) に接続させて構成する文を複文という。

『日本語大辞典』第6巻・術語篇

<複文>とは、構成要素として節を二つ以上含む文である。複文には、必ず一つの中核的・支配的な節と、それに依存・従属していく節とが含まれている。

『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』(p. 383)

^{*2} 奥津1975、1986では、動作目的ではなく、ただ目的と言っている。

きない。」(p. 22)といった分析をしている*¹。

一方、[タメニ]文が表す原因表現と動作目的表現の特徴については、主にモダリティ形式との共起に現れる[ノデ、カラ]との相違(今尾1991)や、結果状態を表す[ヨウニ]との相違(石川1986、前田1992など)など、といった面に注目して、その特徴を明らかにしようとする試みがなされている。

確かに、[タメニ]文が表す原因表現と動作目的表現の区別には、相対テンスや意志動詞か非意志動詞かの問題、従属節と主節の動作主の一致など、様々な文法的条件が関わっている。また、モダリティ形式との共起においても、今尾1991で指摘されているように、従属節も主節も「主観的要素にも客観的要素にも使用可能な接続形式」の[カラ]文、従属節に「客観的要素が含まれていれば、使用可能な疑似客観的接続形式」の[ノデ]文と違って、[タメニ]文は「主観的要素が含まれると、使用不可能な客観的接続形式」であると、その相違が存在している。しかし、これらの説明はすべて、結果に現れる現象の分析にすぎない。従って、なぜ、[タメニ]節が原因と動作目的の両方を表すことが可能なのか、[±animate]性や動詞の意志性の有無、従属節と主節の動作主の一致などが原因と動作目的の区別にどのように関わっているのか、なぜ、[タメニ]文に、話者の心的態度を表すモダリティ形式との共起制限が見られ、[タメニ]文と[ノデ]文、[カラ]文の間に現れるモダリティ形式との共起の相違は何によってもたらされているのか、という問いに対して、[タメニ]文を特徴づける基本的文法的条件をおさえていないため、一貫した解答が得られているとは言えない。

本研究は、[タメニ]節が原因と動作目的の両方を表す機能変化の動的な側面と、[タメニ]文の[ノデ、カラ]文や[ヨウニ]文との相違点という静的な側面を総合的にとらえて、統一した説明を与えることをめざすものである。

本研究は、三章からなっている。第一章では、[タメニ]文を中心に、出来事発生の前後関係を表す継起性*²及び動作性、意志性の有無という角度から、原因表現と動作目的表現の連続性と相違点を取り上げて考察を加える。この中で、まず具体的な用例を検討し、原因と動作目的を表す文法的諸条件を明らかにする。そして、文法的条件の変化に伴って、表す意味が変わる[タメニ]節の機能の移行(機能変化の動的性格)を明確にし、意味表出が可能な範囲(意味表出の幅)と文法的条件の関係をダイナミックにとらえる。その結果、[タメニ]文を特徴づける様々な文法的条件の中で、出来事発生の前後を示す継起性が、より基本的な文法的条件で

*¹しかし、前件が事実ではないので「原因・理由を表すことができない」とはいつても、それで目的を表すことになるという説明にはならない。目的を表すためには、未実現の動作である必要があると言わなければならないであろう。

*²継起性について、次のような定義がある。

継起性とは、「二つの異なった動作作用が時間的順序をもって発生すること」を意味する。

あることを明確にする*¹。

続く第二章では、〔テ、タメニ、ノデ、カラ〕文を取り上げ、二つの出来事に対する継起発生的な把握と非継起発生的な把握について論じる。この中で、原因表現は、継起性に基づく時間依存型（前因・後果型）の客体的把握に基づく表現であり、理由表現は、非継起性を特徴とする時間に依存しない（非前因・後果型）主体的把握に基づく表現であることを明らかにし、因果的表現に表れる表現の客体性と主体性の相違は、出来事発生の時間の前後関係に規定されていることを主張する。

第三章では、目的表現の〔タメニ〕文と〔ヨウニ〕文を対象に、動作の遂行を目的とする表現と、結果状態の招来を目的とする表現の連続性と相違点について検討する。この中で、動作の連続と、動作の働きかけを媒介にして招来される結果状態は、主節が従属節に時間的に先行するという共通性を持つ一方、〔タメニ〕文では、動作の連続を継起発生的なものとして把握し、表現しているのに対して、〔ヨウニ〕文は、動作と結果状態を非継起発生的なものとして把握し、表現しているという違いがあることを明らかにする。

次に、本論に入る前に、本研究が前提とする基本的な認識と考えを簡単に述べておく。

2 具体的な考察に入るまえに

接続助詞的に働く*²〔タメニ、ノデ、カラ、ヨウニ〕が、それぞれ意味表出の幅*³を持ちながら、文法的条件によって多機能的に働き、様々な意味を表すことができるということは、多くの研究を通して、様々な角度から述べられている。しかし、従来の研究は、これらを用法別に分類するスタティックな記述的分析や類似表現の比較を主とするものが多く、表現の流動性（機能移行の可能性）を生み出す文法的条件をダイナミックに追究し、形態の機能をスタティックな側面とダイナミックな側面の両方から総合的に分析する研究はほとんど行われなかった。

*¹ 基本的な文法的条件は、基本義と異なる。一形態が表す意味表出の幅の中で、その機能の移行を可能にする文法的条件を、基本的な文法的条件と呼ぶ。

*² 従属文と主文を結び付けるために用いられるという意味で、〔タメニ〕〔ヨウニ〕も〔ノデ、カラ〕と同じく接続助詞的に働いていると考える。

*³ 一つの形態が意味表出において、機能しうる限界というものがあるように思う。その限界に囲まれる範囲を意味表出の範囲と呼ぶことにする。

接続助詞は、常に文法的条件によって機能が移行し、表す意味が変化するものである^{*1}。形態と意味表出の関係を考えれば、文法的に従属節と主節を結び付けるために使われる接続助詞の意味というのは常に、文法的条件による規定を受けて、具体的な意味表出が特定されるスティックな側面と、文法的条件の変化に伴って、形態が受け持つ意味表出の幅の範囲内で移行するというダイナミックな側面との二つを持っている。静的に記述された具体的な用法は、表現の流動性を捨象し、形態が表す意味表出の幅の中の一側面を特定したものに過ぎない。具体的な用法と用法は、文法的条件次第で相互移行が可能な状態にある連続体を形成し、特徴づける文法的条件が中和されることによって、中間的な用法も多数存在するようになるのである。

南1993では、『いろいろな構成要素間の共起関係』に基づいてA類、B類、C類に分類された従属節（本文でいう従属節のことを、南1993では「従属句」と呼んでいるが、意味するところは同じである。なお、南1974では、すでに同じ見解を示している。－筆者－）と、A：描叙段階、B：判断段階、C：提出段階、D：表出段階、という四つの段階に分けられた文（主節も含む。－筆者－）との関係については、従属節がそれぞれ、主節のどの段階に呼応するかによって、表す意味が異なると主張し、因果関係を表す〔テ、ノデ、カラ〕をあげて、次のように説明している。（〔タメニ〕には、触れていない。－筆者－）

～テの方は、理由・原因となるものをあげる（描叙段階寄りの性格があるといえるかもしれない）。～ノデは、ことがらの成立の認定－常識的な意味での判断－を示す。……。～カラは、描叙段階、判断段階の処理を経た内容を主張する根拠を積極的に示すのが一般的な

^{*1}このような機能の移行について、野田1995では、取り立て詞の一部を取り上げて、文末に現れる階層〔語幹－ボイス－アスペクト－肯定／否定－テンス－事態にたいするムード－聞き手にたいするムード〕の中で、どの階層と呼応するかによって、形態の機能が移行し、表す意味が変わることを分析している。機能の移行と意味表出の幅を持つことについては、接続助詞も、取り立て詞と同様である。しかし、接続助詞は、従属節と主節を結び付けるもので、取り立てしが接続する文の成分が主節（文末？）のどの階層と呼応するかによって機能が変わるのとは違って、節と節の関係の仕方によって機能の移行を生じ、表す意味を決めると見る方が妥当であろう。従って、接続助詞の機能の移行と意味表出の幅を説明するためには、節の性格、節と節の結合関係を明らかにしなければならない。

また、格成分も、文末の意味によって表す意味が変わることがある（階層とは言いにくい）。例えば、〔デ〕格は、事実の述べ立てか話者の意志表出かという文末の意味によって、原因と手段に解釈が分かれる。

〇風邪で会社を休んだ。 －原因－

〇風邪で会社を休もう。 －手段－

性格のように思われる。(p. 236)*¹

しかし、南1993でも認めているように、[テ]の機能は、「テ₁、テ₂、テ₃、テ₄」があって、A類からC類にわたっており、[タメニ]も、原因(B類)と動作目的(?C類)を表すことができる。また、B類になる[ノデ]が、判断だけでなく、聞き手に対する要請も表すことができることはよく指摘されており、C類の[カラ]は、『描叙段階、判断段階を経た』提出段階のものといっても、平叙文の場合で、描叙の[テ]や判断の[?タメニ][ノデ]とどう違うのか、説明にはなりにくい。意味表出の幅を持つ接続助詞の機能を類別にして、呼応する主節の階層を固定化するのではなく、構成要素間の共起関係と、文のどの階層に呼応して働いているかによって、機能が変わる動的なものとしてとらえ、ダイナミックな側面と、スタティックな側面を総合的に分析しなければならないのである。

また、接続助詞のこのような機能の連続性と個別性について、意味的に中心的用法と周辺の用法(派生的用法とも言われる)という解釈の仕方がある。中心的用法と周辺の用法に対する定義は、必ずしも明確ではないが、一般的に、名詞としての語彙の意味を最も強く受け継ぎ、文法的条件に依存する度合いが最も低いのが中心的用法で、名詞としての語彙の意味が最も薄く、文法的条件に最も強く依存し、文法的な機能(文法的意味?)が最も顕著なのが周辺の用法と規定されているように思われる*²。しかし、形態の機能が連続性を持ち、文法的条件次第で移行するという立場に立てば、用法が中心から周辺へと派生していくと見るより、受け持つ

*¹ 南1993では、さらに[テ、ノデ、カラ]従属節がそれぞれ、呼応する主節の階層が異なることについて、次のように裏付けている。

カラ：従属節と主節が基本的に交替することができる。

○キョウハ道路ガ混ンデイナイカラ、バスガ定時ニチャントキタ。

○バスガ定時ニチャントキタカラ、道路ハ混ンデイナインダ。

ノデ：判断を示す認識動詞を補うと、従属節と主節は交替が可能になる。

○道路ガ混ンデイナインデ、バスガ定時にチャントキタ。

?バスガ定時ニチャントキタノデ、道路ハ混ンデイナインダ。

○バスガ定時ニチャントキタノデ、道路ハ混ンデイナイト思ワレル。

テ：従属節と主節は基本的に交替することができない。

○道路ハ混ンデイナクテ、バスガ定時ニチャントキタ。

*バスガ定時ニチャントキテ、道路ハ混ンデイナインダ。

?バスガ定時ニチャントキテ、道路ハ混ンデイナイト思ワレル。

*² 例えば、森田良行の1981では、[タメ]を、「その働き(行為や作用)が対象にとって利益をもたらず場合、その利益が『ため』であるが、それが対象にとっての利益関係へと移り、利益をもたらず目的へと転じて、さらに、行為や作用の原因へと変わっていった」ものと説明している。

意味表出の幅の範囲内で、移動するものと見た方が妥当であろう。形態の機能発揮にとって、中心的用法は文法的条件を受けず、周辺の用法は文法的条件を受けるというのではなく、中心的用法も周辺の用法も、文法的条件によって特定される具体的な用法で、いずれも形態の機能の一側面を表しているものである。例えば、文法的条件は、原因か動作目的かを表す〔タメニ〕節の機能発揮にとって、+に働くか-に働くかの存在であり、中間的用法も、変化する文法的条件によって生じる表現の連続性を表すものであると理解される*¹。

さらに、外国人に対する日本語教育のための語法研究をはじめとして、類似表現についての使い分けの研究も盛んに行われている。例えば、本研究で取り上げる因果的表現には、〔テ、タメニ、ノデ、カラ〕のいずれもが用いられ得るが、その使い分けがどのような規則に基づいているのかは、大きな問題になる。

- 1) 風邪をひいて、会社を休んだ。
- 2) 風邪をひいたために、会社を休んだ。
- 3) 風邪をひいたので、会社を休んだ。
- 4) 風邪をひいたから、会社を休んだ。

これは、因果関係には、決して一つの形態だけでは表し尽くせない多種多様な意味関係のタイプが存在し、各形態によって相補的に形成される因果的表出の表現システムによって始めて、それを表しうるからである。しかし、類似表現の使い分けの研究では、各形態の機能を静的に固定して、その間の相違を明確にする文法的条件の抽出を行う方法がよく取られている。例えば、今尾1991では、モダリティ形式との共起から、〔タメニ〕〔ノデ〕〔カラ〕の三者の相違を分析している*²。しかし、機能に変化する動的状態と、具体的な意味が実現される静的状態という接続助詞の機能の両側面を切り離したこのような分析では、基本的な文法的条件と副次的な文法的条件を厳格に区別できず、根本的な相違を抑えていないため、明確に現れる接続の相違を解釈することができても、置き換えのできる〔テ、タメニ、ノデ、カラ〕の用法はどう違うのかという問題は、解決することができない。

本研究では、形態機能をダイナミックにとらえて、形態機能に変化する動的側面と、類似表現に現れる静的側面を、二つの出来事発生の前後関係を示すテンスの相違という基本的な文法

*¹ 中間的用法に対する定義は、二通りある。一つは、Aでもなく、Bでもない、Cであるという、中間的用法を独立した表現と見るものであり、もう一つは、AでもBでもある、A Bであるという連続線上に位置づけるものである。ここでは、原因と目的が意味表出の連続体をなすものと考えるので、中間的用法をA Bと見なす。

*² 今尾1991では、モダリティ形式との共起の相違から「カラ：主観的要素にも客観的要素にも使用可能な接続形式、ノデ：客観的要素が含まれていれば、使用可能な疑似客観的接続形式、タメ：主観的要素が含まれていると、使用不可能な客観的接続形式」と分類している。

的条件で、統一した解釈を試みる。二つの出来事発生の前後関係を示すテンスの相違とは、先行・後続という継起的に発生するものとしてとらえて表現するものと、先行・後続の発生順にとらわれない非継起的なものとしてとらえて表現するもの、ということの意味する。つまり、従属節の出来事と主節の出来事の発生の前後関係を抛り所に、〔タメニ〕文の「原因→結果」用法と「動作目的←意志的な動作」用法は、どのように連続しながら区別されていくのかを検討する。その上で、〔タメニ〕文の「原因→結果」と、〔ノデ、カラ〕文の「理由→結論」、「理由→心的態度の主張」とは、何によって作り出され、どのように異なるのか、〔タメニ〕文の「動作目的←意志的な動作」と、〔ヨウニ〕文の「結果目的←意志的な動作」とは、どのように連続しながら、区別されていくのか、といった問題を明らかにするのである。

従属節のテンスを論ずるとき、一般的に相対テンスと絶対テンスの区別で説明することが多い。しかし、発話時を基準時とするか、主節時を基準時とするかに従えば、原因を表す〔タメニ〕従属節を発話基準時と、動作目的を表す〔タメニ〕従属節を主節基準時と、別々のテンス基準で説明することになる。

5) 風邪をひいたために、会社を休んだ。

6) 友達に会うために、東京に行った。

原因の例5)では、「風邪をひいたト」は、「会社を休んだト」より先行することについては、過去を表す形態「タ」が何も保証していないので、発話基準時としか解釈のしようがない。それに対して、動作目的の6)は、発話時に友達に会ったかどうかは問題にされず、「東京に行った」時点においては、まだ合っていないというので、主節基準時と言えよう。原因＝発話基準時、動作目的＝主節基準時、というような説明の仕方では、従属節と主節の関係を基本とする複文の分析において、〔タメニ〕従属節の機能移行を連続体として動的にとらえることができない。

〔ノデ、カラ〕には発話基準時の用法と主節基準時の用法の両方があるということは、すでに多くの研究によって指摘されている（田窪1987など）。

7) 彼女が行ったので／から、僕も行った。

8) 彼女が行くので／から、僕も行った。

7)は、絶対テンスの用法である。8)は、発話時に「彼女がすでに行った」とも、「彼女がまだ行っていない」とも、解釈することができるため、相対テンスの用法であろう。しかし、このような分析では、発話時に出来事がすでに起きているか、まだ起きていないかというテンスの使い方と事実の関連を説明しているものであって、〔ノデ〕文、〔カラ〕文に見られる主節に対しての従属節のテンスの用いられ方を説明しているわけではない。つまり、〔ノデ、カラ〕文では、主節にとって、従属節が発生した事実であろうと、未発生の事柄であろうと、理

由づけの機能は同じなのである。複文のテンス関係を分析するならば、なぜ発生した事実でも、未発生の事柄でも、「ノデ、カラ」がそれに接続でき、理由を表すことができるかを明らかにしなければならないであろう。

原因表現、理由表現、目的表現は、互いに近い存在であり、文法的条件が変化すれば簡単に移行できるということは、日本語だけでなく、中国語においても同様に見られる。しかし、形態的に継起的な把握と非継起的な把握との区別を表す文法的手段を持たない中国語では、原因表現と目的表現の連続、原因表現と理由表現の区別、動作目的表現と結果目的表現の区別といった使い分けはすべて、二つの出来事の意味関係（論理性）に頼るしかなく、形態による区別が行われない（区別する必要がないということもできる）。そういうこともあって、中国の伝統的な文法書では、目的関係文を因果関係表出の一つとして、因果関係文の中に入れるのが一般的である。黎錦熙1957では、次のように述べている。

因果関係を表す複文は、表現の重点が原因にあっても、結果にあっても、すべて結果を主節とし、原因を従属節としている。また、表現の重点が行為にあっても、目的にあっても、すべて行為の表出を主節とし、目的を従属節としている。このような従属節を、すべて原因従属節と呼んでおく—というのは、行為の目的も動機であり、動的な原因であるからである。（p. 288）（訳は筆者。以下も同様）

その後、黎錦熙と劉世儒の共著1985では、正式に目的関係文の概念を打ち出し、因果関係文と対立させてはいるが、その区別についての議論は見られない。

『因為』『由于』などは、因果関係表出の介詞用法の拡張であり、『為了』『為着』などは、目的関係表出の介詞用法の拡張である。前者を、因果関係文とし、後者を、目的関係文と呼ぶ。（p. 63）

その両者の連続性と相違性について、

このような連詞（日本語の接続助詞に相当する）は、昔はお互いに通用していたが、・・・最近になって、それぞれが発展し、だんだん分かれていったのである。（p. 64）

呂叔湘1952では、「目的の概念と因果の概念は密接な関係にある」（p. 403）と述べている。両者の区別について、「外界のものによるのは原因であり、（話者の—筆者—）胸の中に存するのは目的である」（p. 404）と、従属節の出来事が外界にあるか話者の胸の中にあるかによって、目的の概念と因果の概念が区別されていると分析し、「従って、目的の表出はよく、原因の仕方で表される」（p. 403）と指摘している。

呂叔湘1952で言う「目的」とは、次の引用を見て分かるように、主観的な因果性表出に属する理由と同様なものを指している。つまり、客観的な原因と区別して、理由と目的は同じく主観的に因果関係を表しているということである。

原因と理由について、呂叔湘1952では、「広義の因果関係には、客観的、即ち事実に基づく因果と主観的、即ち行いの理由、目的（アンダラインは筆者による）、という二つが含まれている」（p. 427）と、その違いを認め、事実的原因、行為の理由、推論の理由（p. 387～388）の三種を挙げている。

事実的原因：9) 因為天冷、桶里的水都結了冰。

（天氣が寒いので、桶の中の水は全部凍っています。）

行為の理由：10) 因為天冷、我才把毛衣穿上了。

（天氣が寒いので、私はセーターを着たのです。）

推論の理由：11) 天一定非常冷、因為桶里的水都結了冰。

（天氣はきっと非常に寒いです。桶の中の水は全部凍っているからです。）

しかし、例文に同じく「因為」を用いていることから分かるように、これらの分類は形態的な区別による裏付けがないため、基本的に意味関係に頼っており、従って、結論は「根本的には同じ関係を表している」（p. 427）ということになっている*¹。

一方、日本語においては、原因と理由について、両者を、原因・理由文として一緒に扱うが多いが（永野1952、今尾1991、岩崎1995、前田1995など）、区別する論文もある（言語学研究会・構文論グループ1986、仁田1995など）。言語学研究会・構文論グループ1986では、「するので」と「するから」を「対象の論理」と「私の論理」に分けて、次のように区別している。

「するので」のかたちをとる場合では、意識のそとに客観的に進行する原因・結果の関係をさしだしているのであるが、それが「するから」のかたちをとる場合では、これを確認していくはなし手の論理的な過程をさしだしている。こうして、原因的なつきそい・あわせ文は、「するので」のかたちをとるときには、原因を表現しているし、「するから」のかたちをとるときには、理由を表現していると、一般的に規定することができる。（p. 27）

また、仁田1995では、＜起因的継起＞を表すシテ節の分類を行い、主節が意志的な動作か非意志的な動作かで、原因表現と理由表現を分けている。

無意志動詞で形成されているものを《原因》と仮称し、意志動詞からなっているものを

*¹ テンス関係を取り上げて、原因と目的を区別して分析する論文は見られない。

《理由》と仮に呼んでおく。(p. 113)

上記の引用を見て分かるように、原因と理由を区別してはいるが、二つの出来事発生の前後関係を表すテンス性は問題にされていない。しかし、[テ、タメニ、ノデ、カラ]の区別を総合的に分析し、因果的表現の客体性と主体性を考えるならば、継起性と非継起性の対立に基づいて発生時間の前後関係から原因と理由を区別する方が妥当であるように考える。例えば、次の例12)13)が示すように、従属節が相対的に「以後」を表す[ノデ]と[カラ]の用法は、前因・後果を表す継起性にとらわれないため、同じく話者が二つの出来事を因果的に関係づけているという主体的表現、即ち理由になっていると見ることができる。

12)彼女が行くので／から、私も行った。

13)明日、大学の入学試験を受けるので／から、今夜徹夜で勉強する。

相対的に、または絶対的に未来に起こる出来事は、理由にすることはできるが、原因にすることはできない。動作性、意志性、ムード性、働きかけ性などはすべて、テンスの未来性（相対的以後と絶対的未來）に規定され、未来テンスの使用は未確定を前提とするモダリティ形式との共起に繋がっていくのである*¹。従って、ここでは、客体的表現とは、話者が継起性を手がかりにして、二つの出来事を前因・後果的に捉えて表現するものであり、主体的表現とは、継起性にとらわれず、話者が二つの出来事を因果的に結び付けて表現するものであると考え、前者を原因とし、後者を理由として区別することにする。その上で、客観と主観の区別は、同じく主体的表現の中で、理由提起の仕方と理由づけ方の相違に求める。このようにすれば、従属節の接続に見られる[ノデ]と[カラ]の違いに対しても、[テ、タメニ]と[ノデ、カラ]の相違に合わせて、整合性のある説明が与えられると考える。

注：例文の文頭にある記号は、次のような意味を表している。

? = やや不自然である。 ?? = 不自然である。 * = 非文である。

*¹ 単文については、テンス・アスペクト・ムードという総合的な働きから、テンスを分析する研究が多く見られる。しかし、複文については、テンス使用の特徴と、モダリティ形式との共起関係の関わりについての言及はほとんど見られないように思われる。

第一章 原因表現と動作目的表現の連続と区別

－「タメニ」文を中心に－

この章では、「タメニ」文を中心に、原因表現と動作目的表現の連続性と独自性について検討する。「タメニ」文には、従属節が「用言＋タメニ」であるもの^{*1}の他に、従属句「名詞の＋タメニ」を有するものがある。「用言＋タメニ」は、用言を中心にして二つの出来事が形成され、従属節の表す出来事と主節が表す出来事とで対置関係を作っているのに対して、「名詞の＋タメニ」は、従属句が状況成分を構成し、この状況成分と、主節の述語成分を中心にして形成される内容部分とが対置関係をなしていると見なすことができる^{*2}。また、「用言＋タメニ」は、用言がテンス・アスペクト・ヴォイスを持ち、ムードを表し、モダリティ形式の有無が問題になるのに対して、「名詞の＋タメニ」は、基本的にそれらを含み得ない。このような点から、本章では、「用言＋タメニ」と「名詞の＋タメニ」を別々に取り上げて、第一節で「用言＋タメニ」を、第二節で「名詞の＋タメニ」について検討することにする。

また、「タメニ」と「タメ」には、互いに置き換えができる用法が多いが、置き換えることができない使い方も見られる。第三節では、「ニ」の付加によって生じる相違について考えることにする。

^{*1} 「名詞である＋タメニ」は、「用言＋タメニ」の中に入れる。「名詞の＋タメニ」は、「名詞である＋タメニ」と同じく原因を表すときもあるが、動作目的など違った意味を表すときもある。詳しくは、第二節の6「補足的な説明」を参照されたい。

^{*2} 小矢野1995では、あわせ文（複文）の対置関係について、次のように述べている。

「つきそい文がいいおわり文との間に従属－統一の関係を結ぶ」「連用的なつきそい・あわせ文は、つきそい文といいおわり文とにとって二つの出来事を表現していて、両者が広い意味での条件づけと条件づけられの関係で対置されている。そして、つきそい文に表現されている一定の条件づけのもとで、いいおわり文に表現される出来事が成り立つことを表現している。つきそい文をはぶけば、いいおわり文は条件づけのない出来事を表現するひとえ文として成り立つ。」（p. 56）

複文において、対置関係の定義は、小矢野1995に従う。さらに、単文とされる「名詞の＋タメニ」も、対置関係にあると考える。「名詞の＋タメニ」の機能は、時や場所などの状況成分と違って、対置関係にあるもう一方の述語成分との組み合わせによって原因／動作目的、または不利益／利益目的というふうに変わるからである。詳しくは、この章の第二節で述べる。

第一節 「用言＋タメニ」について

1. 原因と目的の区別－奥津1986について－

「用言＋タメニ」従属節は、原因にも動作目的にもなる。はたして、両者は全く別個のものなのだろうか、それとも連続したものなのだろうか、もし後者なら、一体、どのようにして、原因表現と動作目的表現が連続性を持ちながら、使い分けられていくのであろうか。奥津1986では、「タメ」が表す意味表出の連続性を文法的条件^{*1}という立場から詳しく論じている。それによると、目的構文になる「タメ」には、四つの文法的条件があり、それに対して、原因構文^{*2}の「タメ」は、これらの文法制限を一切受けないということになる。

奥津氏が挙げた四つの文法的条件とは、次の通りである。

- 一、従属節の主語と主節の主語とは、同じでなければならない。
- 二、従属節・主節いずれの主語も有生[+animate]のものでなければならない。
- 三、従属節及び主節の動詞は、有生の主語による意志的動作を表すもの[+volitional]という素性を持つものでなければならない。
- 四、従属節のテンスは、未完了形でなければならない。(p. 81)

文法的条件によって、「用言＋タメニ」の従属節が、原因を表したり、目的を表したりするという奥津の指摘は、形態の機能と意味の表出を、文法的条件によって変化するものととらえている点で、非常に優れている。しかし、次のような点について、疑問が残る。

△：従属節と主節の主語が同じでなければならないということについて

「タメニ」文の動作目的表現は、従属節と主節の主語が一致するが多いが、一致しない用例も存在する。(例1)2)は、奥津1986に挙げられた鈴木重幸、高橋太郎の例文により、例3)

^{*1} 奥津1986では、従属節を補文、主節を主文と呼び、文法的条件を文法制限と呼んでいる。立場によって用語の使用に細かい区別があるかもしれないが、ここでは、用語の統一のため、従属節、主節と文法的条件と呼ぶことにする。

^{*2} 奥津1975, 1986では、ここで言う原因構文を理由構文と呼んでいる。本論では、「タメニ」文が表す因果表現を原因表現として、「ノデ、カラ」文が表す因果表現を理由表現として、両者を区別する。詳しくは、原因と理由の違いを扱う第二章の第一節に譲る。

は、塩入1995による。)

- 1) 赤組が間違いなく勝つために、我々が力いっぱい努力しよう。
- 2) 子供がよく育つために、母親が育児を勉強しなければならない。
- 3) 娘が夕食を作るために、母親は買い物に行った。

また、従属節や主節の述語に受身形が用いられたりする場合は、主語が一致しないのが普通である。

- 4) 第二の行為が順調に行われるために、私達は第一の行為を直ちに行う。
- 5) 迷惑の気持ちを表すために、受身形が使われている。

さらに、主題文では、異なった動作主でも、自然な文になる。

- 6) そのケーキは、娘が食べるために、順子が作った。(塩入1995による。)

B : 主語が有生 [+animate] のものでなければならないということについて

奥津1986では、[タメニ]文が表す目的表現の動作主は有生 [+animate] の性格をもつ必要があると述べているが、従属節と主節に使われる主語に、どのように有生 [+animate] の性格を認めるかという大きな問題があろう。それは論理的に、従属節と主節の主語が有生 [+animate] の性格を持てはじめて、目的表現になることができるということを言っているのか、日本語表現について言っているのか、明確ではない。例えば、次の例では、従属節または主節の主語に、有生 [+animate] の性格を認めてよいのであろうか。(例7)は、カトリーヌ・ガルニエ1994のp.67による。)

- 7) 市民の健康を守るために、市にはどんな仕組みがあるのだろうか。
- 8) 法律は、善良な市民の権利を守るために、作られている。

C : 従属節と主節の動詞が有生の主語による意志的な動作 [+volitional] という素性を持たなければならないということについて

[+volitional] は、意志動詞に繋がる場合が多い。しかし、次のような動作目的表現では、本来の意志動詞として認められ難いものが使われている。

9)美しくあるために、いつも入念に化粧している。

10)何もしなければ分裂してしまうので、それを防ぐために、政権は強権的にならざるを得ない。(日経)

11)普段から書くための問題や感想、意見や材料を蓄えておくために、何か良い方法はない
だろうか。

これらに対しては、文法的条件をスティックに羅列して説明するだけでは不十分である。ここでは、[タメニ]文が文法的条件の変化によって原因から動作目的へと表す意味が変わるという事実をとらえ、まず、表現の連続体を作り出す文法的条件の抽出を試み、それを、より基本的なものと副次的なものに分けて、それぞれの働きについて検討を加える。今、簡単にその働きを述べるならば、A) 従属節と主節が表す二つの出来事発生の前後関係(継起性)が、[タメニ]文に原因から動作目的までの意味表出の可能性をもたらす基本的な文法的条件であり、B) 動作の意志性(+volitional)の有無、主語の有生(+animate)や主語の一致などは、副次的な文法的条件として、従属節と主節を、動作的か状態的かと性格づけるために総合的に働き、原因か動作目的かの意味表出に加わっていくと考えられる。

以下、主に従属節と主節の出来事発生の時間の前後関係(発生の先行と後続に基づく継起性)と、動作の意志性の有無の現れ方(意志的な動作か、それとも動作の持続・結果状態、意志性を持たない動きか、純粋な状態か)という二つの角度から、奥津1986に触れながら、[タメニ]文が表す原因表現と動作目的表現の連続性と相違点に関わる文法的条件を検討し、表現移行のプロセスを明らかにしていく。

2. 出来事発生の継起性について

従属節と主節のテンス関係から見れば、原因表現は、従属節の出来事が主節の出来事を原因づけるので、従属節の出来事は、主節の出来事の発生より以前か同時に発生しなければならない、動作目的表現は、従属節の出来事が主節の意志的な動作によって実現されるので、その発生が主節のそれより以後でなければならない。[用言+タメニ]文が表す原因表現^{*1}と動作目的表現を成立させる最も基本的な文法的条件は、従属節と主節に描き出される二つの出来事が継起

^{*1} [タメニ]文が表す因果関係を原因表現と名付けたのは、継起性に基づく客体的な因果関係を表すのを原因表現と称して、非継起性による主体的な因果関係を表す理由表現と区別するためである。因果関係の表出における継起性と非継起性、客体性と主体性の違いについて、第二章で詳しく検討する。

的に発生するという継起的な前後関係であるといえる。例12)は、従属節が先行発生、主節が後続発生になるので、原因表現になり、例13)は、従属節が後続発生、主節が先行発生を表すので、動作目的表現になっている。

12) 風邪をひいたために／ひいているために、会社を休んだ。

13) 風邪をひくために、わざと薄着をした。

出来事の先行・後続という継起的な発生に基づく「用言＋タメニ」文は、原因表現では、原因が先行、結果が後続という客体的な前因・後果の関係^{*1}を表し、動作目的表現では、目的が後続、目的を実現させる意志的な動作が先行という動作の遂行を引き起こす動作目的を表す。このように、「用言＋タメニ」文が表す原因表現と動作目的表現は、まず出来事発生の継起性によって特徴づけられることになる。

このような出来事の継起的な発生という時間の示し方は、従属節の述語が動詞であるか形容詞（形容動詞もその中に含む）であるか、状態動詞であるか動作動詞であるかによって大きく異なってくる。

1) 従属節の述語が形容詞である場合：

述語が形容詞である従属節は、相対テンスとして主節より以前か、主節と同時かししか表すことができないため、例14)15)のように、過去や現在のことを表す原因表現とはなり得ても、例16)のように、主節の出来事より以後を表す動作目的表現になることはできない^{*2}。

14) お金がなかったために、欲しいものが買えなかった。

15) 生活の根が浅いために、内容的には非常に薄ぺらだった。 (現代語)

16) *十年後の子供が賢いために、両親は教育に力を注いでいる。

^{*1} 中国の文法概念を引用する。しかし、中国の文法解釈では、前因・後果を論理的な関係として使用しているのに対して、ここでは、出来事発生の時間の継起性に基づく因果関係の把握として使用し、話者の主体的な操作を介入しない客体的な「原因－結果」を表すものとして用いることにする。

^{*2} 形容詞は、副詞の力を借りて主節より相対的に以後を表すことができるが、動作性と意志性を持たないため、未来の状態の存在を目的にして行為を行うという用法は成立しにくい。詳しくは第三章の2「主節の意志的な動作が従属節の出来事の発生に先行する必要について」で述べることにする。

また、例14)15)が示すように、原因になる形容詞従属節は、述語がイ形である場合と、タ形である場合とがあるが、イ形であっても、主節の出来事と同時に発生することを意味しているわけではない。つまり、従属節の形容詞イ形は、タ形と同様に主節の出来事より以前にその状態が存在することを意味しているが、両者の違いは、イ形が主節の出来事の間にずっと継続しているという「継起性＋同時性」を持つものであると考えられる。このように、形容詞のイ形もタ形も、原因になる従属節が結果になる主節より先行して存在するという出来事発生の継起性は依然として維持されている。形容詞従属節がタ形を使って先行的に発生する状態を表すか、イ形を使って「継起性＋同時性」としての状態を表すか、原因を表す従属節の機能において、両者の間にそれほど違いは見られないのは、このためである^{*1}。

17)あまり余裕がなかったため、その場で断った。

18)あまり余裕がないため、その場で断った。

II) 従属節の述語が状態動詞である場合：

動詞従属節には、相対テンスとして以前・以後^{*2}の対立を持つ動作動詞と、以前・同時の対立を持つ状態動詞とがあるが、以後を表すことができない状態動詞従属節は基本的に、原因づけになる。状態動詞の中に、「ある」のようなアスペクト形を持たない動詞と、「共通する」のようなアスペクトの「テイル」形と「タ」形が同じ意味を表す動詞という二種があるが、相対的に未来に行われる動作を表すことができないので、例19)20)のように、基本的に同じ振る舞いをしていると考えてよかろう。

^{*1} 「タメニ」文の主節が過去のことを表すときは、形容詞の従属節にル形もタ形も使われ、しかも意味がほとんど変わらないが、主節が未来のことを表すときは、従属節にタ形よりル形を用いる方が、許容度が上がることもあるように思う。採集した例文にはがないが、次のような作例では、ル形の使用がタ形より許容度が上がるのではないかと思う。

○お金がないため、こんな高価な買い物はできないだろう。

??お金がなったため、こんな高価な買い物はできないだろう。

未来の出来事の発生であるので、発話時において、原因になる状態は継続的に存在する必要があるだろう。

^{*2} ここでは、従属節と主節の前後関係を論ずるので、相対テンスを表す「以前・同時・以後」の用語を用いる。

以前：従属節の出来事が主節に先行して発生すること。

同時：従属節の出来事が主節と同時に発生すること。

以後：従属節の出来事が主節に後続して発生すること。

19) 日本語では、モダリティ形式によって話者の主観的態度が表明されることで、文が完結する傾向があるため、結果的に陳述とモダリティの概念とが重なっているにすぎない。

20) 仮定的な用法は、テモのみにあるが、事実的な用法はケレドモ、ノニ、テモの三者に共通しているため、特に事実的なテモとノニ、ケレドモとの違いが問題となるが、…。

それとまったく同じ理由で、従属節が動作動詞でも、テンス的に反復性による超時的な意味（動作の繰り返し、習慣、物事や事柄に対する性質などを表す場合）を表すようになると、以前・以後の区別がなくなるので、原因にしかなくなる。

21) 話し手の独断で、相手が前件の事態を知っているはずだと見なしたことになるため、横柄な発話となっている。 － 性質 －

22) これは、〔対象〕のヲ格名詞句が直接目的語という統語的機能を担うために、〔対象〕のヲ格名詞句が二つ共起することは許されないからである。 － 習慣 －

23) エミーが溺れまいと必死にもがくため、二人は水中へと沈みかけた。 （明日 p. 227）
－ 繰り返し －

Ⅲ) 従属節の述語が動作動詞である場合：

相対テンスとして以前と以後を表すことができる動作動詞従属節は、継起性に基づく出来事発生の先行・後続によって、原因と動作目的に分かれてくる。つまり、時間の前後関係に限って言えば、動作動詞従属節、特に、その中で動作目的表現が必要とする意志性^{*1}を持つ意志動詞従属節は、出来事発生 of 前後関係として、タ／テイタ形が主節の出来事より以前に生じたことを表し、テイル形が主節より以前に起き、その状態が主節の出来事進行の間に持続していることを表すため、原因になる（例24)25)）。一方、ル形が主節の出来事より以後に発生することを意味するので、動作目的になる（例26)）のである。

24) 若者アトークは族長の女ラナに恋をしたために追放された。 （TV）

25) 雨が降っているため、運動会が中止になった。

26) 病気を治すために、毎日きちんと薬を飲んでいる。

^{*1} 目的表現では、動作の意志性を必要とする〔タメニ〕と、それを必要としない〔ヨウニ〕の区別がある。詳しくは、第三章で取り上げることにする。

例24)25)26)のように、継起性の特徴は、以前と未来の対立を持つ動作動詞従属節においてはじめて、典型的に原因表現と動作目的表現の区別に働く。従属節に使われる意志動詞は、タ／テイタ形が動作の発生した後の結果状態を、テイル形が動作の発生した後の持続状態を、それぞれ表しているのので、動作の意志性が無くなり、主節に対しては、もう原因としてしか働かなくなる^{*1}。それに対して、相対的に未来を表すル形の動作動詞従属節は、主節より以後に行われるので、動作目的を表すことができ、動作の意志性が生きていると考えられる。

上に述べたことをまとめれば、継起性を特徴とする〔用言＋タメニ〕文において、相対テンスとして以前・同時を表す形容詞や状態動詞従属節、超時を示す動作動詞従属節が原因づけになり、相対テンスとして以前と以後の区別を持つ動作動詞（特に意志動詞）従属節が、以前なら原因に、以後なら動作目的にと、異なった働きをしているということになる。このように、出来事発生の先行・後続という継起性は、〔用言＋タメニ〕文が表す原因表現と動作目的表現の連続性と相違点を時間的に特徴づける基本的な文法的条件であると考えることができる。

ところが、奥津1986では、相対テンスとして主節より以後になる意志動詞の〔タメニ〕従属節でも、主語が人間を表す名詞か無生名詞か、従属節と主節の動作主が一致するか否かによって、原因と目的に分かれることになるとし、次のような例を挙げて説明している。

a) 人間の名詞＋意志動詞：

27) 山田君は明日ニューヨークへ出張するために、今日は早退した。

この文は、補文（従属節と同じ意味。以下も同様。－筆者－）・主節いずれの主語も『山田君』という人間の名詞であり、動詞も『出張する』『早退する』という意志動詞であり、テンスは、補文が未完成で、主節が完了である。つまり、目的構文とも解釈できるが、『出張』

^{*1} テイル形でも、次のように動作目的を表すことが可能である。

○このポストに坐っているために、様々な工作をしている。

○生きているために、ご飯を食べる。

しかし、この場合の「イル」は、動作の持続状態を意図的に維持するという意味に解釈されるので、意志動詞としての「イル」の用法を表すものと考えられる。詳しくは、この節の3「動作の意志性と意志的な動作の意図性の有無について」を参照されたい。

また、工藤真由美1995では、〔タ〕による完成性と〔テイル〕による継続性について、パーフェクトという観点から、〔タ〕形は結果残存性を持つと指摘している。

を命ぜられるので、準備のために『早退した』と解釈すれば、理由構文になる。(p. 94)

しかし、このような原因にも目的にも解釈できるのは、動作主が一致する場合であって、次の例が示すように、

補文・主節の主語は人間ではあるが、同一ではないから理由構文としか解釈できない。

(p. 96)

28) 山田君が明日大阪へ出張するために、秘書が切符を買いに行った。

b) 無生名詞＋非意志動詞：

29) 津波が来るために、ジョンはヨットを陸に揚げた。

その主語は『津波』という無生名詞であるし、補文・主節（の主語－筆者－）も一致していないから、目的構文ではなく、理由構文である。(p. 95)

奥津の説明では、[意志動詞＋タメニ]従属節が表す原因表現と動作目的表現の区別は、相対的に出来事発生の先行・後続という継起性に関係なく、主語の異同(28)29))、または解釈の問題(27))だとしている*¹。ここでは、意志動詞の場合でも、なぜ例27)28)29)のような一見して継起性に反する用法が成り立つのかについて、検討してみる。

簡単に言えば、これらの用法には、共通して、従属節を原因として解釈するためには、従属節の事柄がいずれも、すでに決定済みの既定事実*²でなければならないという条件が必要であ

*¹ 動作主の異同が原因と目的の区別を決めるという主張については、1.2の「動詞の意志性と意志的な動作による意図性の有無について」において、詳しく検討する。また、相対テンスとして主節より以後に発生する意志動詞の[タメニ]従属節が、原因を表すとき、[ノデ]や[カラ]と比べて不自然に感じるということについては、「第2章 理由・原因表現の共通性と相違性－[タメニ、ノデ、カラ]を中心に－」において、具体的に分析することにする。

*² ここで言う既定事実というのは、主節の出来事の前に、すでに事実として存在しているということである。複文における既定事実とは、あくまでも主節に対するもので、単文のときと同じか否かは、今の私には断言できない。前田1996(未刊)では、「動作性動詞でも、個人の習慣や性質、属性を表している場合には、事実を表すことになり、従って、原因・理由を表す複文を構成する。」(p. 22)という指摘がある。

る。この場合、動作動詞従属節が主節より以後に行われる具体的な動作というより、一つの出来事を表していると考えられる。つまり、27)28)にある「山田君が明日出張するコト」、29)の「津波が来るコト」などは、主節にとって、発生が相対的に以後になってはいるが、「山田君が明日出張することになっている」や「天気予報によると、津波が来る」に置き換えても同じ意味になるということからも分かるように、予定として、すでに存在する既定事実になっているのである。言い換えれば、これらの用法においては、主節が原因として受け取っているのは、相対的に以後に発生する「出張する」や「来る」という未来の動作や動きではなく、「山田君が明日大阪へ出張する」や「津波が来る」という従属節全体が表す決定済みの出来事であると解釈される。従って、これらの用法では、従属節の内容を既定事実化することが継起性の特徴を支えていると考えられる。次の例のように、従属節の内容が偶発的で、出来事として既定事実化しにくい場合は、非文になる。

30) *車がパンクするために、会社に遅れた。

31) *東武線は、池袋と東武練馬の間で車との接触事故が発生するため、電車のダイヤが乱れています。お客様にご迷惑をお掛けいたします。

このように、従属節が既定事実になれば、未来に行われる意志的な動作としてではなく、決定済みの出来事としての状態や結果になるので、時間の前後という継起性が守られたことになると考えられる。

また、このような継起性の特徴は、発話時において従属節が確定的な出来事を表すことを要求し、未定を特徴とする話者の判定を表すモダリティ形式の接続を制限することによって、一層明確に現れてくる。つまり、継起性に基づく「タメニ」文の原因表現は、二つの出来事を発生順に並べて、客体的に従属節と主節を因果的にとらえているものである。従属節と主節の間に、話者の判定や推量、願望などを表す心的態度の表出を入れると、継起性と客体的な因果性が破壊されることになり、「タメニ」文が表す原因表現の規則に反することになるのである。

32) *山田君は明日ニューヨークへ出張するかもしれないため、今日は早退した。

33) *津波が来そうなため、ジョンはヨットを陸に揚げた。

従属節の内容を出来事として既定事実化する用法を含めて、原因表現に現れる継起性の特徴は、「用言+タメニ」文が継起性に基づく客体的な因果関係を表すことを意味している。ここでは、客体性と客体的な因果関係について、次のように定義したい。客体性とは、発生時間の

前後関係に従い、二つの出来事を時間順に並べることを意味し、客体的な因果関係とは、話者が出来事の発生を継起的に並べて、その関係を前因・後果的に表現することである。このような特徴を持つ「タメニ」文は、継起性にとられない、主体的な因果関係を表す「ノデ、カラ」文と著しく異なっているのである^{*1}。

3. 動作の意志性と意志的な動作の目的性の有無について

目的は、人間をはじめとする「+volitional」性を持つものが意志的な動作をすることによって達成させようとする結果を予め予測し、それを目標に立てて行為を行うことを意味する。

34) 日本語を勉強するために、私は筑波大学に入学した。

35) 鼠を捕るために、猫は一生懸命に追っかけている。

「用言＋タメニ」文が表す動作目的表現は、前節で述べた、目的になる従属節の出来事が主節のそれより以後に発生しなければならないという文法的条件の他に、さらに従属節も主節も、同じく有生の主語による意志的な動作でなければならないという条件が必要であるという指摘がある（奥津1986）。ここでは、まず、意志的な動作とは何かを検討し、次いで、動作の意志性と動作目的表出の関わり、従属節と主節の動作主の異同、主節が表す意志的な動作の働きかけによる目的性の役割などについて、順次分析して行く^{*2}。

主節が意志的な動作でなければ、目的を持つことができないというのは、「volitional」性を持つものだけが目的を立てて行動を行うことができるという言語表現の常識によるものと言えよう。そのため、主節が「volitional」性の認め難い主語の事柄を表す場合には、目的表現が成立しにくい。

36) * 稲をよく育てるために、雨が降っている。

37) * 生活が便利になるために、車が走っている。

^{*1} 客体的な因果関係と主体的な因果関係の相違は、時間の前後関係を基にして、話者が観察の立場に立って二つの出来事を因果的にとらえているのは客体的な因果関係で、話者が主体的に二つの出来事を「理由→結果／理由→行為」ように関係づけているのは主体的な因果関係であると考えられる。詳しくは、第二章・第一節で述べる。

^{*2} 動作の意志性と働きかけ性については、時間の関係と人称の使用の角度から文末に使われる「～ませんか」の働きを中心に、于日平1984で、その関連性を論じたことがある。

また、〔用言＋タメニ〕文の動作目的表現は、従属節も意志的な動作が要求される。次の例が示すように、従属節が意志的な動作を表さないと、表現は不自然になる。

38)??明日雨が降るために、今日神社へ行って雨乞いをした。

39)??明日晴れるために、照る照る坊主を作った。

38)39)に対して、佐治1984、石川1988、前田1995などでは、従属節が人間のコントロールできない動作であるからだと説明されている。しかし、コントロールできる動作か否かということは、意志動詞かどうか、動作主が一致するか否かということと重なるとする議論が多い。そこで、動作の意志性の有無は、カテゴリーとしての意志動詞分類と動作主の一致にどのように関わっているかを検討する必要があるが出てくる。

3.1. 意志性の有無と意志動詞について

一般的に、意志的な動作は意志動詞が表す。これは、主節述語にその動詞が用いられた時の振る舞いから分類した語彙的な意味カテゴリーである。しかし、次に挙げる例が示すように、従属節〔用言＋タメニ〕が動作目的を表すために要求される動作の意志性は、必ずしも意志動詞のカテゴリー分類と一致しない*¹。

40)美しくあるために、いつも入念に化粧している。

41)彼は、元気になるために、養命酒を飲んでいる。

42)自転車に乗れるようになるために、毎日練習している。

43)真紀子は、二人で一緒にいる時間を少しでも長くしたいために、脅迫電話があったと嘘をついているのではないか。 (情事p. 57)

44)そういわれると、私は母親のようにあくせくと働かないために稼ぎのいい夫を見つけたのだから、と規子はいつも反発したい気分になったものだ。 (家p. 141)

例40)～44)において、これら意志動詞とは認めがたい従属節〔タメニ〕が動作目的を表すことができるのは、主節の意志動作が行われるときより、相対的に以後に発生する未達成の出来

*¹ 鈴木重幸1972では、意志動詞の特徴として「命令と勧誘の用法を持つ」ことを挙げている。しかし、複文の従属節が動作の意志性を持つか否かは、命令と勧誘の用法があるか否かという意志動詞の分類基準には直接に対応しない。

事で、しかも動作の意志性が潜在する出来事であるからであろう。即ち、主節の強い働きかけ（意志的な動作によって従属節の出来事を実現させる目的性）を受けて、〔タメニ〕従属節は、状態の維持（40）、変化（41）42）、相対的に以後に実現する願望（43）44）を表し、意志動詞の場合と同様の振る舞いをしていると言える。

同様のことが主節にも見られる。

45) 東京都では、住民の老後の心配を取り除くために、いろんな措置が取られています。

46) 迷惑の意味を表すために、受け身が使われる。

47) 市民の健康を守るために、市にはどんな仕組みがあるでしょうか？

48) 普段から書くための問題や感想、意見や材料を蓄えておくために、何か良い方法はないだろうか？

意志動詞の受身が使われている例45)46)や*¹、主節が明らかに存在を表す動詞で、意志動詞とは認め難い例47)48)でも、目的性が明確にあるのだから、目的性のある動的事象の存在を表していると認めざるを得ない*²。〔用言＋タメニ〕文の動作目的表現に現れる意志性は、意志動詞だけによるのではない。複文を構成しているのは、従属節と主節の両方である。従って、従属節の働きと主節の働きを別々に考えるのではなく、従属節に対する主節の影響と主節に対する従属節の影響という相互影響を考慮に入れなければならない。従属節と主節の相互影響とは、主節は何かを実現させる目的を以て従属節の出来事を積極的に目的に仕立てること、従属節は主節より以後に行われる意志的な動作を示すことで、積極的に動作目的として機能し、それによって逆に主節に動作性や目的性を持たせることである。このように、従属節と主節の相互影響によって、潜在している動作性／意志性が顕在化するか、動作性／意志性を持たせられるかと理解するのである。

このように考えれば、単語の語彙的な意味や複合形式の意味、テンス・アスペクト・ヴォイスなどの文法的条件を羅列的に検討するのではなく、それらが総合的に働いて、従属節と主節を意志的な動作か状態かと性格づけるものと認識し直さなければならない。そして、その複合的な産物として性格づけられた従属節と主節は、相互に影響しあって、出来事発生の継起性に

*¹ 意志性の有無は、必ずしも特定の動作主を必要としないと考える。意志的な動作の実行であれば、意志性を持つことがあるのである。

*² 「動的事象の存在」と名付けたのは、動作を含みとし、動作の主が想定できる存在を表していると考えられるからである。

助けられて動作目的表現になる。〔アル〕や〔ナル〕のようなタイプの動詞、〔意志動詞＋タイ〕や〔意志動詞＋ナイ〕の形、〔～ヨウニナル〕の複合形式や意志動詞の受身などは、いずれも意志性を持つ動作と、意志性を持たない状態を形成する両方の側面を持っており、継起性に支えられて動作的な側面が前面に引き出され、動作目的表現を表すようになると説明することができる^{*1}。

3.2. 意志性の有無と動作主の一致について

動作の意志性の現れ方は、また動作主の問題にも密接に関係している。例27)28)の所で述べたように、従属節の述語が意志動詞で、かつ相対テンスが未完了を表す場合について、奥津1986では、動作主が一致するか否かによって原因と目的が区別されるとしているが、ここでは、動作主の不一致がどのように原因表現と動作目的表現の区別に関わっているかを分析してみたい。

確かに主節と動作主が一致するかどうかは、従属節を意志性を持つ意志的な動作にしたり、意志性を持たない出来事（イベント）にしたりするのに大きく関わっている。動作主が一致すれば、動作の継起性が明確になるので、動作目的表現に解釈されやすい。しかし、49)50)のように、動作主が一致しなくても動作目的表現になる例がある。

49) 赤組が間違いなく勝つために、我々が力いっぱい努力しよう。

50) 日本が石油を確保するために、三木はアラブ諸国を歴訪した。 (奥津1986)

51) 娘が夕食を作るために、母親は買い物に行った。 (塩入1995)

49)50)51)において、「赤組が間違いなく勝つコト」、「日本が石油を確保するコト」、「娘が夕食を作るコト」は、「我々が力いっぱい努力する」や「三木はアラブ諸国を歴訪する」、「母親は買い物に行く」という行為の目的になっている。動作目的を表す従属節が意志性を必要とするからといって、直ちに動作主の一致と直結することにはならない。つまり、従属節の動作主が異なっても、主節の意志的な動作による働きかけを強く受け、その動作の目的性の影響下

^{*1} 〔意志動詞＋タイ〕に現れる意志性は、気持ちの発生が主節の意志的な動作の後に生じるという従属節後続・主節先行の解釈によって保証されなければならない。従って、もし今の気持ちの表出なら、目的というより原因の解釈が普通である。

○彼は校長の番犬じゃないか。一日も早く教頭試験に受かりたいために、校長に尻尾を降り続けている一人にすぎない。 (女教師p. 129)

にあると解釈されることで、動作目的の関係が成立するのである。これを逆に言えば、主節の意志的な動作によって示される目的性と、従属節の動作との間に、影響の関連性が見いだせるかどうか、動作目的表現として解釈できるかどうかの鍵となるもので、その間に、自然な表現から不自然な表現までの許容の連続性が見られるということになる。

52)??赤組が間違いなく勝つために、我々がアイスクリームを食べよう。

53)??娘が夕食を作るために、母親は映画を見に行った。

52)53)が動作目的表現として許容度が低いのは、一般的に「赤組が勝つコト」や「娘が夕食を作るコト」と、「我々がアイスクリームを食べるコト」や「母親が映画を見に行くコト」の間に、動作目的のような関連性が見だしにくいからであろう。もし、「我々がアイスクリームを食べるコト」や「母親が映画を見に行くコト」と、「赤組が勝つコト」や「娘が夕食を作るコト」との間に、例えば、アイスクリームを食べれば、赤組が勝つことになるとか、母親がいると娘が夕食を作らないため、映画を見に行けば、娘が作らざるを得なくなるとか、という関連があることが分かれば、動作目的表現に解釈することができる。

主節の意志的な動作による働きかけ性が強ければ強いほど、従属節を目的に仕立てる力が強くなり、従属節の動作を主節の意志動作の影響下に置く目的性が明確になる。そして、出来事発生 of 継起性に助けられて、状態・結果になるぎりぎりまで、従属節の動作を動作目的づけにすることができる^{*1}。これらの用法には、[タメニ]を使用することによって、話者が従属節の内容を出来事の状態・結果としてではなく、動作としてとらえて、それを主節の目的性の影響下に置くという表現の意図が強く感じられる。

54)子供が健康に育つために、(私達は)力を合わせて町の環境をよくしよう。

55)友達が留学に来られるために、(私は)関係部門を走り回っている。

このような例は、従属節に対する主節の働きかけが強い場合であるが、主節に対する従属節の働きかけがないというわけではない。特に、主節に意志的な動作による目的性が弱い場合は、動作目的を表す文法的条件（意志的な動作と主節より以後に発生すること）が整った従属節が、

^{*1} 動作目的表現の[タメニ]文と ~~状態~~ 結果目的表現の[ヨウニ]文との接点がまさに、動作の遂行を目的とするか、状態・結果の招来を目的とするかの分かれ目となると考えられる。目的表現における使い分けについては、第三章で詳しく分析する。

主節に対して動作目的としての積極的な働きかけをしていると考えられる。前に挙げた例45)～48)はまさに、従属節の働きかけを積極的に示して、主節に動作の意志性を顕在化させたり、意志的動作性を持たせたりしているものと思われる。もし、従属節が積極的に意志的な動作を示さなくなると、例56)57)のように、表現はかなり許容度が下がってしまう。

56)??市民の健康が守られるために、市には、どんな仕組みがあるでしょうか。

57)??迷惑な気持ちが表されるために、受け身が使われる。

〔用言＋タメニ〕文の動作目的表現では、動作主が問題にならない受け身の使用や題述構文になると、動作主の異同と表現の関連が一層薄くなって、主節における意志的な動作による目的性だけが表現の中心になってくる。

58)第二の行為が行われるために、第一の行為を直ちに遂行した。

59)石油が定期的に供給されるために、日本政府はアラブ諸国に援助の拡大を約束した。

60)金は、人を幸せにするためにある。

61)交通規則は、人の命を守るために作られている。

受け身を使えば、主語^{*1}が異なるのは当然である。58)59)で、動作目的を表す従属節にとって重要なのは、発生の前後という継起性に助けられて、主節が目的性を持つ意志的な動作を表していることである。また、60)61)に、違った主語を見つけだして、動作主が一致するか否かを論じるのは、無意味であろう。60)61)の文で重要なのは、〔ある〕や〔作られている〕には、目的を持って行った動作（動的事象の存在も含めて）の目的性が認められていることである。これらの動作目的表現を支えているのは、主節の意志動作より以後に発生するという時間前後の位置づけと主節の意志的な動作による目的性の存在で、動作主を表す主語の異同は初めから問題にされていないと考えられる。

このように、出来事と出来事の対置関係をなす〔用言＋タメニ〕文の動作目的表現において、

^{*1} 例52)のように、形式的には主語が違っても、「私達」と「赤組」が同じであるので、同じ動作主であるという指摘があり、また、受け身の場合も、意味的に動作主が異なっていると言えるかどうかは曖昧になるときがある。しかし、例53)や54)55)58)59)においては、従属節の主語と主節の主語が形式的にも意味的にも異なっている。従って、ここでは、用語を統一するために、意味的に動作主が一致するか否かを含めて、主語の一致として、論を進めることにする。

主節が意志的な動作で、目的性を持つこと、従属節が意志的な動作で、主節より後続すること、という継起性と動作の意志性は、〔タメニ〕文の動作目的表現を根本から支えている基本的な文法的条件であると考えられる。つまり、「意志的動作＋相対テンス以後」という性格を持つ従属節がすでに、その時点で動作目的としての働きをすることができ、「意志的動作＋目的性」という性格を持つ主節も、従属節を積極的に動作目的に仕立てる働きをしているのである。言い換えれば、主節が意志的な動作で、従属節の出来事を動作目的に仕立てるように積極的に働きかけること、従属節が動作目的になる文法的条件を整えることで、逆に主節に対して積極的に働きかけること、という相互影響の要素を考慮に入れなければならないということになる。従属節の動作と主節の動作の関連性はまさに、従属節と主節の相互影響の元で考えられるのである。動作主の一致は、主節の意志的な動作の目的性を明確にする働きがあるので、動作目的表現の解釈に寄与してはいるが、意志的な動作か状態かは、総合的に働く様々な文法的条件によって決められていることを考えると、それは文法的条件の中の一つ（重要な一つであるが）にすぎないのである。従って、動作主の異同だけで原因表現と動作目的表現を区別するのは、根本を支えている継起性の働きや動作の意志性と意志的な動作によって表される目的性との違い、従属節と主節の相互影響などを無視することになると言わざるを得ない。

4. 継起性と意志的な動作による目的性及び従属節と主節の出来事の種類づけについて

2で、二つの出来事発生の継起性によって、〔用言＋タメニ〕従属節が原因と動作目的を表し分けていることを述べた。また、3で、〔用言＋タメニ〕文が表す動作目的表現は継起性を基にして、従属節が相対的に未来の意志的な動作を示すことで、積極的に動作目的を表す働きかけと、主節が意志的な動作を行うことで、従属節を積極的に動作目的に仕立てるという働きかけ（目的性）が相互に影響し合って、様々な用法を作り出すことについて検討した。上記の二つを総合的に考えれば、継起性と、動作の意志性、意志動作による目的性とは、対置関係をなす〔用言＋タメニ〕文を特徴づけていることになる。しかし、〔用言＋タメニ〕文にとって、継起性と動作の意志性を決定する他の文法的条件は、同じレベルで機能しているわけではない。すでに3.2で触れたように、単語の語彙的な意味や複合形式、テンス・アスペクト・ヴォイスなどが総合的に働いて、まず従属節と主節について、出来事の種類が動作的な出来事か状態的な出来事かを定める。そして、このように出来事の種類づけを受けた従属節と主節は、様々な組み合わせ方によって結合されて相互に影響しあい、継起性に助けられて具体的に原因か動作目的かを表し分けるのである。このように、出来事の種類づけに働く文法的条件と継起性とは、複文の意味決定において、異なったレベルで機能していると考えられる。ここでは、節が示す出来事の種類づけを「第一段階の意味決定」とし、様々な形で組み合わせられる従属節と主節が、継

起性に基づいて最終的に原因か動作目的かを決定することを「第二段階の意味決定」と呼びたい。このような複文における意味決定のプロセスを「二段階意味決定」と名付けることにする。

[用言＋タメニ] 文を中心に、この二段階意味決定のプロセスを具体的に分析してみる。

A : 第一段階の意味決定としての出来事の性格づけについて

出来事の性格は、基本的に従属節と主節が全体で、動作的な出来事を表すか、状態的な（結果を含めて）出来事を表すかに大きく分けられる。そして、その中間には、相互影響によって、動作としても、状態としても解釈することができるものが存在する。中間的な性格を持つ従属節と主節の場合は、もう一方の働きかけを受けることによって、動作性か状態性かが顕在化し、複文の意味決定がなされる。性格の強弱を無視すれば、次のように三つのタイプに分けることができる。

- a) 状態・結果的なものにしかないもの
- b) 動作的なものにしかないもの
- c) 状態・結果にも動作にもなる中間的なもの

単語の語彙的な意味、複合形式の意味、相対テンスやアスペクト、ヴォイスの働きなどによる総合作用と節の性格づけとの関係をまとめると、次の表1のようになる。陳述副詞が節の性格づけに影響することもあるが、状態副詞や程度副詞などは基本的に、テンス関係以前の段階で動作的なか状態・結果的なかという性格づけを明確にする（語用論的な機能をも含めて）働きをしているもので、意味決定には直接に加わっていないと考えられる*¹。

*¹ 状態副詞や程度副詞などは、動詞を修飾するものが多いが、陳述副詞は、その使用によって動詞の意志性を明確にしたり、キャンセルしたりすることがある。しかし、原因か目的かの表出は、動作の継起的な発生という相対テンス関係によってすでに決められているので、動詞の意志性に対するキャンセルは、[タメニ]文の意味を変えることができない。従って、次の例で見られるように、陳述副詞の意志性のキャンセルと動作目的表現の要求する意志性との間に矛盾が起きるので、文が不自然になる。

○うっかりと花瓶を壊したために、さんさん叱られた。 ー原因ー

??うっかりと花瓶を壊すために、さんさん叱られた。 ー?動作目的ー

原因と動作目的の意味表出は、継起性を示す相対テンスによってすでに決められており、「うっかり」の添加によって、原因表現に抵触しないが、動作目的表現が必要とする意志性と衝突するので、文がおかしくなったのであろう。

表 1. 従属節と主節の文の性格を決定する諸形式

形式 \ 節の性格	状態・結果的なもの	中間的なもの	動作的なもの
従属節	1) 形容詞・非意志動詞 2) 状態を表す複合形式 3) 意志動詞の（使役を含む）タ/テイル/テイタ形 4) 習慣や反復を表す意志動詞のル形 5) 予定として既定事実化できる継起的な出来事	1) 意志動詞の受身のル形 ^{*1} 2) [意志動詞の連用形＋たい] 3) [意志動詞の未然形＋ない] 4) 意志動詞の可能態	1) [形容詞＋ある] 2) [名詞＋に＋形容詞＋なる] [～ようになる] 3) 意志動詞のル形
主節	1) 形容詞・非意志動詞 2) 状態を表す複合形式 3) 意志動詞の可能態	1) 意志動詞（使役形と受身形を含む）のタ/テイル/テイタ形 2) 意志性を持つ複合形式のタ/テイル/テイタ形 3) 動的存在を意味する [ある／ない]	1) 意志動詞のル形 2) 意志性を持つ複合形式 3) [意志動詞＋未来指向のモダリティ形式] 4) [重要だ／役に立つ／使う] のような特殊な単語

上の表に対して、さらに三点を補足説明する。

I) 状態・結果的なものと動作的なものの両方を表す中間的なものについては、従属節も主節

^{*1} 意志動詞の受け身形が表す中間的な性格の文を、構文的にどのような構造になるかについて、今の私には、意味的にも埋め込み的になっていると理解すればよいのではないかと考えている。つまり、従属節の受身形は次のような構文構造を持つものと解釈する。

○第二の行為が行われるために、私達は第一の行為を直ちに遂行する。

[第二の行為が（第二の行為を行う）されるために] [私達は第一の行為を直ちに遂行する。]

ここでは、意志動詞の受け身形は、意志性を必要とする動作目的表現にも、状態・結果性を特徴とする変化結果目的表現にも働くという事実の指摘にとどめ、構文的な分析は、今後の課題に譲ることにする。

も中間的なものによる組み合わせは、原因表現になるが、動作目的表現にはなりにくい。それは、中間的なものに潜在する動作の意志性、目的性は、もう一方の強い働きかけによってはじめて、顕在化したり、持たせられたりすることになるからである。

II) 形容詞従属節と形容詞主節の組み合わせによって表される原因表現は、状態の前後があると考えて、形容詞従属節と動詞主節、動詞従属節と形容詞主節、動詞従属節と動詞主節などといった組み合わせと同様に、継起性が生きていると考える。これは、[ノデ、カラ]との違いによって裏付けることができる。(詳しくは、第二章の第二節で取り上げる。)

III) どんな組み合わせにおいても、原因表現には、従属節に話者の心的態度を表すモダリティ形式、主節に話者の意志を表す意志動詞のル形や、話者の心的態度、相手への働きかけを表すモダリティ形式が現れることはない。これは、「タメニ」文が原因表現において、継起性と客体的な因果性を表すという特徴によると言えよう。従って、主節のモダリティ形式がテンス・ムード的な性質を持つという意味で、原因と動作目的の区別に関わっていることになる。例えば、主節末に命令形が使われると、働きかけ性によって意志的な動作による目的性が強められ、そのために、「タメニ」従属節が原因を表す可能性は排除されてしまう。

62) ??風邪をひいたために、会社を休んでくれ。

5. 継起性、性格の異なる従属節／主節の組み合わせ方及び原因か動作目的かの意味決定について

4で、a) 状態・結果的なものにしかない、b) 動作的なものにしかない、c) 状態・結果にも動作にもなる中間的なもの、の使用によって、従属節と主節が性格づけられていることを述べた。このように、性格づけを受けた従属節と主節は、「タメニ」によって様々な組み合わせ方で結びつく。意味決定の第二の段階では、従属節と主節は、それぞれ固有の性格を持って影響しあいながら、継起性に基づいて原因か動作目的かを決めていくのである。

B : 第二段階の意味決定のプロセスについて

まず、従属節と主節の組み合わせ方に基づいた原因表現と動作目的表現の使い分けは、表2が示す通りになる。

表 2. 性格の異なる従属節／主節の組み合わせ方と原因表現／動作目的表現の関連について

原因表現：

主節 \ 従属節	意志性を持つ動作 的なもの	状態・結果的なもの
意志性を持つ動作的なもの	×	○ (A)
状態・結果的なもの	○ (B)	○ (C)

動作目的表現：

主節 \ 従属節	意志性を持つ動作 的なもの	状態・結果的なもの
意志性を持つ動作的なもの	○ (D)	×
状態・結果的なもの	×	×

上の表を見て分かるように、原因表現と動作目的表現の組み合わせ方は基本的に次の通りになる。

原因表現	A：状態・結果的なもの＋動作的なもの B：動作的なもの＋状態・結果的なもの C：状態・結果的なもの＋状態・結果的なもの
動作目的表現	D：動作的なもの＋動作的なもの

原因か動作目的かを定める基本的な文法的条件の継起性が加わると、継起性と従属節と主節の組み合わせ方の結合は、表 3 のようになる。

表 3. 継起性に基づく「用言＋タメニ」文の意味決定について

原因表現：

継起性 \ 性格の異なる従属節と主節の組み合わせ方	
従属節が先行	A：状態・結果的なもの＋動作的なもの B：動作的なもの＋状態・結果的なもの
主節が後続	C：状態・結果的なもの＋状態・結果的なもの

動作目的表現：

継起性	性格の異なる従属節と主節の組み合わせ方
従属節が後続 主節が先行	D：動作的なもの＋動作的なもの

原因表現は、意志性を要求しないため、従属節と主節の組み合わせ方が非常に幅広い。（なぜ原因表現が意志性を無くする傾向にあるのかについては、第二章で詳しく検討する。）それに対して、動作目的表現は、出来事の継起的な発生を基にして、動作性と意志的な動作による目的性を必要とするため、従属節と主節の組み合わせ方がかなり制限されている。特に、中間的な性格を持つ形式の中で、動作の意志性の顕在化がもう一方の強い働きかけによって実現される依存性の強いものでは、組み合わせのできる範囲がもっと狭くなる。次の二つの組み合わせ方は、相互依存の性格が強いため、意志性の強いもう一方の働きかけ（目的性）がなければ、動作性と意志性を顕在化させることができず、動作目的表現として成立しにくい。

I) 従属節にしか現れない依存性の強い中間的なもの、[形容詞＋ある] [名詞に／形容詞＋なる] [～ようになる]の形と、主節が受け身の形、動的な存在を表す[ある／ない]との組み合わせ：

63) *綺麗になるために、いつも入念に化粧がされている。

64) *自転車に乗れるようになるために、練習がある。

II) 従属節も主節も依存性の強い中間的なものの組み合わせ：

65) *事実を伝えたいために、率直な意見が述べられた。

66) *夫に気づかれないために、手紙が隠されている。

従属節が表す変化や状態の維持は、主節の強い働きかけを受けて始めて成立し、気持ちや動作への打ち消しも、主節の働きかけを基にして、目的に仕立てられるのである。従って、主節が意志的な動作による強い働きかけ（目的性）を表さないと、変化や状態の維持、気持ちや動作への打ち消しに潜んでいる動作の意志性を顕在化することができない。

このように、従属節に現れる[ある]や[なる／ようになる]、[意志動詞＋たい]や[意

志動詞＋ない〕、〔意志動詞の受身形〕などの形式は、継起性に支えられて、主節の意志的な動作による目的性の働きかけを受けて、潜在的にある動作主体の意図性が顕在化し、意志性が認められ、変化や気持ちの実現、状態の実現や保持、防止などの意味を表すようになる。また同様に、主節に現れる受け身形や動的な存在を表す〔ある／ない〕という形式も、継起性に支えられて、従属節が動作目的を表すという強い働きかけのために、動作的な性格が持たせられて、意志動詞と同じ振る舞いをするようになる。40)～44)のような意志動詞の分類や動作主の異同などに現れる不明な所や反例などは、このような、主節と従属節との、継起性を介した組み合わせによる相互影響関係から、説明することができよう。また、このような解釈ができるのは、複文の意味決定のプロセスが、語彙的なもの、相対テンスの関係、アスペクト形式、ヴォイス形式などが総合的に働いて、従属節と主節の節の性格を決める「意味決定の第一段階」と、状態・結果的か動作的かという性格づけを受けた従属節と主節が、継起性に基づいて、直接に〔用言＋タメニ〕文の意味表出を決めている「意味決定の第二段階」という形で行われている事実によって支えられているのである。

6. 結論

上に述べたことを次のようにまとめることができる。

- A：〔用言＋タメニ〕文に現れる原因表現と動作目的表現の連続性と相違点は、継起性と動作性、意志的な動作による目的性によって決定される。継起性は、出来事発生の前後関係から原因と動作目的の連続と相違を支える基本的な文法的条件である。継起性の現れ方は、用言の違いによって異なり、従属節と主節の組み合わせ方による相互影響によって様々な様相を呈する。
- B：単語の語彙的な意味、複合形式の意味、相対テンスの働き、アスペクトやヴォイス形式の働きなどは総合的に働いて、従属節と主節の性格を状態・結果的なものか、動作的なものかに決める。異なる性格づけを受けた従属節と主節は、様々な組み合わせ方を構成し、相互に影響しあって、複文の意味を決定していく。対置関係は、出来事と出来事の関係の仕方を意味するのである。
- C：このように、複文における意味表出の決定は、二段階に分けて行われていると考えられる。節としての出来事の性格づけは第一段階で、継起性は第二段階である。この意味で、原因から動作目的までの意味表出の移行を可能にする継起性は、〔用言＋タメニ〕文を特徴づける基本的な文法的条件であり、その他の文法的条件は、原因表現と動作目的表現の特定に機能していると言えよう。
- D：〔用言＋タメニ〕文を特徴づける文法的諸条件は、それぞれが第一段階と第二段階で原

因と動作目的の意味表出に関わっていると同時に他の類義表現との相違も示している^{*1}。

E : [用言+タメニ] 文が表す動作目的表現は、動作を引き起こす目的を表すため、意志性が必要であるが、その意志性は、誰かがする動作であればよく、動作主を特定する必要はない。特に、主節の意志的な動作による目的性が明確になればなるほど、目的性の影響下にあるという関連性が強くなり、状態・結果になるぎりぎりまで、従属節を動作目的に仕立てることができる。

F : 動作的にも状態的にも解釈できる中間的なものは、主節と従属節との相互影響によって表す意味が決まる。

G : 依存性の強い中間的なものは、もう一方の働きかけを受けて機能を顕在化するのである。典型的な状態・結果的なもの、典型的な動作的なものと組み合わせることが多い。特に動作目的表現では、従属節も主節も動作性と意志性が要求されるので、依存性の強い中間的なもの同士の組み合わせは見あたらない。動作の意志性の顕在化は、もう一方の強い働きかけが必要であるからであろう。

^{*1} 第二章で述べることになるが、例えば、出来事発生の時間関係を示す継起性は、[用言+タメニ] 文において、原因と動作目的を区別させていると同時に、継起関係でない[ノデ/カラ] 文との違いをも示しているのである。また、動作目的を表す[タメニ] 従属節が必要とする動作性と意志性は、結果・状態を表す目的表現[ヨウニ] 節との違いを明確にしているのである。

第二節 「名詞の＋タメニ」について

出来事と出来事の対置関係を構成している「用言＋タメニ」と異なって、「名詞の＋タメニ」は、主語・述語を持たないため、テンス・アスペクト・ヴォイスなどの表現がなく、述語成分を中心に形成される出来事との発生の前後関係や意志的な動作か、動作の持続・結果状態か、純粋な状態か、といった区別を積極的に示すことができない^{*1}。しかし、意味表出において、「用言＋タメニ」文と同様に、述語成分との結びつきによって原因から動作目的まで表すことができる。

- | | |
|------------------------|-----------|
| 1) 洪水のために、今年の稲の収穫は悪い。 | －原因－ |
| 2) 旅行のために、毎月少しずつ貯金しよう。 | －動作目的－ |
| 3) 試験のために、徹夜で復習した。 | －原因／動作目的－ |

この節では、「名詞の＋タメニ」が「用言＋タメニ」と構造的にどのように違い、その違いは意味表出において、どのように表れるかを検討し、「名詞の＋タメニ」文の表現特徴を明らかにしたい。

1. 「名詞の＋タメニ」文の特徴について

「名詞の＋タメニ」は、主語・述語を持たないため、テンス、アスペクト、ボイスの表現がなく、モダリティ形式もない。原因表現と動作目的表現の使い分けに必要な継起性と動作性、意志性について、次のような特徴がある。まず、出来事発生の前後関係は、述語成分の描き出す出来事を中心にして、「名詞の＋タメニ」が表す事柄を、時間的に以前に位置づけるか（先行）、以後に位置づけるか（後続）によって示されている。述語成分の事柄に先行すれば、原因表現になり、述語成分の事柄に後続すれば、動作目的表現になる。

^{*1} 原因を表す用法には、異なった主語を持つものもある。

○夫が大酒飲みのため、妻はずいぶん苦労している。

この場合の「ノ」は、「ダ」の代替と考えて、「名詞＋タメニ」と区別する。なお、次の例は、「スル」の代替といえようか。

○水稻の病虫害を防除のため、今年も農薬の空中散布を行うことになった。（ＴＶ筑波の通知）

4)旅行のために、少しずつ貯金しよう。

5)旅行のために、三日間学校を休んだ。

次に、動作性と意志性の有無は、用いられる名詞が動作性を持つか、動作性を持たないかによって制限を受ける。つまり、動作性、意志性を持たない名詞は、単語の語彙的な性格から述語成分の事柄より後続発生すると位置づけることができないので、動作目的表現になる可能性が消されるのである。

6)洪水のために、家が流された。

7)??洪水のために、力を合わせて頑張ろう。

さらに、その他に、[タメ]の本来の語彙的な意味である利益の授受がつけ加わる用法がある^{*1}。[タメニ]が表す利益の用法は、それぞれ原因表現と目的表現の一種として、例8)が原因・不利益を表し、例9)が目的利益を表していると考えることができる。

8)友達のために、先生に叱られた。 (原因・不利益)

9)友達のために、駅へ迎えに行く。 (利益目的)

[名詞の+タメニ]は、原因と不利益を表す場合、同じく述語成分の事柄より先行すると位置づけられているが、利益目的を表す場合、動作ではないので、述語成分の事柄より後続するとは考えにくい。ここでは、継起性による時間前後の位置づけに基づいて、[名詞の+タメニ]を、原因(不利益)と利益目的/動作目的に分けることにする。

このように、[名詞の+タメニ]は、[用言+タメニ]文のように、構造的には従属節と主節のような対置関係を構成するものではないが、意味的には述語成分の描き出す事柄との時間関係によって、原因(不利益)と利益目的/動作目的を表しているのである。

2. 継起性に基づく[名詞の+タメニ]の名詞の意味分類及び表現との関係について

次に、[名詞の+タメニ]と述語成分の事柄との前後関係という角度から、[名詞の+タメニ]の名詞の特徴を検討しよう。

先行か後続かという時間の位置づけに基づいて、[名詞の+タメニ]の中の名詞を三つの語彙

^{*1} 影浦1995では、[名詞の+タメニ]の[タメニ]を、後置詞と呼んでいる。

的な意味タイプに分けることができる。

〔タメニ〕に前置する名詞の語彙的な意味タイプ：

タイプ1：動作を表すもので、述語成分の事柄より以後に位置づけることができるもの

タイプ2：利益を受けることができる人や組織など

タイプ3：動作にも利益にもなれないもので、述語成分の事柄より以前にしか位置づけることができないもの

名詞の語彙的な意味ごとに用例を挙げておく。

10) 旅行のために、毎月少しずつ貯金している。

11) 母親のために、この本を捧げる。

12) 冷害のために、今年の農作物の収穫は例年と比べて、30%減少となった。

10)は動作目的、11)は利益を与えるのが目的、12)は原因と、一応解釈される。

A：語彙的な意味タイプ1について

例10)が示すように、動作の遂行を目的とするためには、〔名詞の＋タメニ〕の表す事柄が相対テンスとして、述語成分の事柄より後に発生し、かつ動作性を持たなければならない。次に挙げる例は、〔名詞の＋タメニ〕が述語成分より後に発生する動作とは解釈しにくいので、動作目的表現にはなれない。

13) 感動のために、涙を流した。

14) 心配のために、一晩中ずっと寝なかった。

確かにテンスを示す形式を持たない〔名詞の＋タメニ〕は、述語成分より以前の出来事か以後の出来事かが明示的ではないし、名詞の動作性の有無についても、流動的な所がある。そのため、原因か動作目的かという意味解釈も揺れてくる。例15)の「気分転換」は動作にもなるので、原因と動作目的の両方を表すことができるが、例16)を目的表現と解釈するには、「快楽」に動作性が認められなければならない。

15) 気分転換のために、旅に出た。

16) 快樂のために、すべてを捨てた。

例16)を動作目的表現と解釈することができるのは、「快樂」が「捨てる」の後に位置づけられ、かつ動作的に解釈される場合に限られ、一般的には原因に理解されやすい。次の例17)も同じことが言える。動作目的表現になるためには、「放棄する」に後続するものとして「恋」が位置づけられ、しかも「恋を得る」というように、動作的に解釈する必要がある。

17) 恋（を得る）のために、皇位の継承を放棄した。

B：語彙的な意味タイプ2について

語彙的な意味タイプ2には、人間や人間の組織だけでなく、利益の対象になる対象や事柄も含まれる。人間や組織であろうと、対象や事柄であろうと、共に利益目的になるのであるから、意味表出においては、同類になる。また、述語成分の動作を中心に考えれば、利益がなければ、すすんで動作をするということはある得ないから、タイプ2もタイプ1も、利益になるという目的において、一致しており、区別する必要はないかもしれない。しかし、動作性を持つ名詞のタイプ1は、述語成分の意志的な動作との前後関係によって原因と動作目的に別れる。それに対して、タイプ2の名詞が、動作でもなく、時間の先行・後続を示さないにもかかわらず、目的になることができるのは、述語の意志的な動作によって利益が与えられているからである。次に挙げる例18)19)は、人間や人間の組織のための利益目的表現で、例20)21)は、動作的な事柄のための動作目的表現である。

18) 子供のために、新しい遊園地を作ろう。

19) 古里のために、何かしたい。

20) 娘の大学合格のために、母親は一生懸命に頑張っている。

21) 息子の出世のために、いやでもそれを引き受けてやっている。

C：語彙的な意味タイプ3について

動作でもなく、利益にもならない語彙的な意味タイプ3の名詞は、基本的に原因にしか解釈されない。原因しか表さない名詞は、すでに発生した、人間の意志でコントロールできない自然現象を表すものが多く、しかも利益にならないマイナスの意味が伴う場合が多いようである。

22) 大雨のために、橋が流された。

23) 友達は、交通事故のために、去年なくなった。

〔名詞の＋タメニ〕が表す原因表現は、原因の他に被害を蒙るというニュアンスを伴っている。これは、人を表す名詞が原因表現に使われると、不利益のニュアンスを伴うことと一致している^{*1}。

24) 恋人のために、逮捕された。

25) 友達のために、あらぬ濡れ衣を着せられた。

以上のような、名詞の意味タイプと、〔名詞の＋タメニ〕の表す表現の関係をまとめると、次のようになる。

A：タイプ1のすべての名詞は、動作目的だけでなく、基本的に原因も表すことができるのに対して、タイプ3の名詞は、原因だけを表し、動作目的と利益目的を表すことができない。

B：タイプ1の名詞は、述語成分の出来事より先行的に位置づけるか後続的に位置づけるか、または、述語成分が意志的な動作を表すか状態を表すかによって、原因としても、動作目的としても働くことができる。

C：タイプ2の名詞は、述語成分が意志的な動作を表すか状態を表すかによって、原因（不利益）としても、利益目的としても働くことができる。利益目的は、述語成分より以後に発生すると位置づけられ、意志動詞によって利益が与えられることを表し、不利益の原因は、述語成分より以前に発生すると位置づけられ、結果を起因させていると考えられる。

このように考えれば、原因と動作目的を分ける前後関係の位置づけは、利益と不利益にも機能しており、利益目的は、述語成分の動作があって利益が与えられる表現で、不利益は、原因があって述語成分を結果としてもたらしめているということになる。次の例は、原因と動作目的、利益と不利益の関連を総合的に示している。

26) 人身事故のために、新幹線は5分ほど遅れている。

－原因（不利益）－

^{*1} 〔名詞の＋タメニ〕が表す原因表現は、被害や不利益のニュアンスを伴うことで、原因を表す〔デ〕と異なっている。また、人名詞の場合は、話者がその人によって被害を蒙る意味を表し、物や出来事を表す名詞の場合は、その物や出来事によって被害を蒙ることになる。

27) 友達のために、先生に叱られた。

－原因＋不利益－

28) 私を育ててくれたおばあさんのために、この本を捧げる。

－目的利益－

29) 息子の出世のために、母親は一生懸命に頑張っている。

－動作目的（利益）－

30) 旅行のために、毎月少しずつ貯金しよう。

－動作目的－

こうして、「名詞の＋タメニ」は、「（原因）－（原因＋不利益）－（利益目的）－（動作目的＋利益）－（動作目的）」というように、原因から動作目的まで連続して機能していると言える。

3. 「名詞の＋タメニ」の働きに視点をおいた解釈

以上の分析はすべて、述語成分の働きを中心にきて行ってきた。しかし、述語成分の働きから「名詞の＋タメニ」の働きへと視点を変えてみると、上に挙げた三つの名詞のタイプは、述語成分が明確に意志的な動作による目的性を表している場合を除けば、意志動詞でも、過去のことや現在の持続状態を表す場合も含めて、すべて述語成分の行為を起因させる「動機づけ」として解釈することができる。これは、名詞の語彙的な意味タイプ1と2が両義に働くのに加えて、意志動詞でも過去のことや現在の持続状態を表す成分は、動作か状態かの区別を積極的に示さなくなるからであろう。31)32)33)について、主節の意志的な動作の目的として、「名詞の＋タメニ」が理解されてもよいし、「名詞の＋タメニ」が起因となって、主節の出来事をもたらしていると解釈することもできる。

31) 借金返済のために、生活費をできるだけ切りつめて金の節約をしている。

32) 恋人のために、会社の金を横領した。

33) ロジャースを隊長とする英国軍遊撃隊は、北米大陸の開拓のためにフランスと激しく争っていた。

(TV)

述語成分が状態を表すことになれば、述語成分の機能から原因と動作目的を積極的に区別する文法的条件がなくなる。それに加えて、「名詞の＋タメニ」の働きを中心に考えれば、その中の名詞が、すべて動機づけ的に働くことができるので、述語成分への起因を表すという、案

外単純な働きをしているということもできそうである*1。原因と結果、行為と目的という関係は、基本的に継起性に基づく時間の前後関係と、動作性、意志的な動作による目的性の有無という相違にすぎない。先行・後続の時間関係にニュートラルな「名詞の＋タメニ」^文は、さらに動作目的を積極的に仕立てる意志的な動作による目的性という文法的条件を失うと、動機づけを表す起因という働きに統一することができるようになる。このように考えれば、「名詞の＋タメニ」の動作目的表現は、述語成分が積極的に意志的な動作による目的性を表すことによって支えられているとも解釈できる。

4. 述語成分の性格と表現の関係について

述語成分の性格づけと表現の関係について、次のような三つのタイプが観察される。34)は、述語成分が明確に意志性を持つ用例で、35)は、述語成分が状態を表すもので、36)は、述語成分が意志的な動作としても、動作の持続状態としても解釈される用例である。

34)旅行のために、できるだけ貯金しよう。

－動作目的－

35)旅行のために、学校に行けなかった。

－原因－

36)旅行のために、毎月少しずつ貯金している。

－動作目的か原因－

例34)35)のように、述語成分が明確に意志的な動作による目的性を示せば、動作目的表現になり、状態（可能状態を含む）の性格が強ければ、原因表現になる。しかし、例36)が示すように、意志動詞の過去形や進行形は、過去における意志的な動作の実行や進行とも、動作の結果や現在の持続状態とも、解釈することができるので、動作目的表現にも原因表現にもなる。従って、述語成分が意志的な動作を表すか、動作の持続・結果の状態や純粋な状態を表すかは、「名詞の＋タメニ」が表す意味に大きく影響することになる。述語成分の性格づけに対して、目的性を持つ典型的な意志的な動作と、典型的な状態とが対蹠的な位置にあり、その中間に目的性を持つ意志的な動作としても、動作の持続・結果の状態としても働く意志動詞を置くという三分類をすることができると思う。

述語成分に対する分類：

*1 序章において、中国語文法の解釈では原因・理由・目的を区別せずに、すべてを動機づけとして説明するものがあることを紹介した。「名詞の＋タメニ」文に対して、視点を変えれば、同様な連続が見られるのではないかと考えられる。

タイプ1：目的性を持つ典型的な意志的な動作

タイプ2：典型的な状態

タイプ3：目的性を持つ意志的な動作としても、動作の持続・結果の状態としても働くもの

タイプ1には、テンス的に未来志向の意志的な動作、特に話者の心的態度や相手への働きかけを明確に示す表現が入る。タイプ3には、意志動詞で、過去を表すタ形、過去か現在の持続状態を表すテイル／テイタ形を取る場合が挙げられる。タイプ1とタイプ3を除いた、すべてのものがタイプ2に入ると考えられる。次に、タイプごとに、例文を挙げる。37)38)39)は、述語成分が呼びかけや誘いかけ、決意や命令などを表す表現で、タイプ1に属し、40)41)は、述語成分が形容詞や非意志動詞で、典型的な状態を表すので、タイプ2に入り、42)43)44)は、意志動詞の過去形や現在進行形、意志動詞の受け身形で、タイプ3の例となっている。

37)美しい地球のために、ゴミと環境のことを一緒に考えよう。

38)4月の人事異動で君を企画部次長に抜擢しようと考えている。ショーの成功のために、
全力投球してくれ。 (背徳p.59)

39)仕事も無事に終わったし、どうだ、今晚お祝いのため、一杯やりませんか。

40)仕事のため、帰りが遅い。

41)すっかり冷え切った夫との関係のために、彼女は毎日いらいらしている。 (TV)

42)コマーチョは、報復のため、トニーの家族と手下を虐殺した。 (TV)

43)大學入試のために、毎晩徹夜で勉強している。

44)借金返済のために、操の姉は芸者に売られた。 (TV)

名詞の語彙的な意味が原因か動作目的かの意味表出に影響を与えると同時に、述語成分も、[名詞の+タメニ]の名詞の使用に制限を加える。話者の心的態度の表出や相手への働きかけなどによって、意志的な動作による目的性が強調されるタイプ1は、目的表現への指向が強く、そのため、意志的な動作にも利益にもなれない名詞は使われにくい。

45)??風邪のために、会社を休もう。

46)??大雨のために、頑張ろう。

また、例38)39)が示すように、動作目的にも原因にもなる名詞でも、述語成分の明確な働きかけ性によって、述語成分の出来事より先行して位置づけることができなくなる場合があり、

そういう場合には、原因に解釈されにくくなる^{*1}。さらに、例を少し補足しておく。

47) 女泥棒に拾われて育った青年が、育ての親と身に染みついた泥棒稼業を捨てて、愛する女性のために生きようとする。(TV)

48) クラブ運営のために、智恵を出し合って協力していこう。

それに対して、絶対に原因を表すことができない名詞はないので、タイプ3における原因か利益目的／動作目的かの区別は、述語成分を、過去に行われた意志的な動作と受け取るか、過去の動作の結果、または現在の動作の持続状態と受け取るか、によって決められることになる(例36)及び42)43)44)を参照)。また、次の例も、述語成分に動作性、意志性が認められているので、利益目的に解釈されていると考えられる。

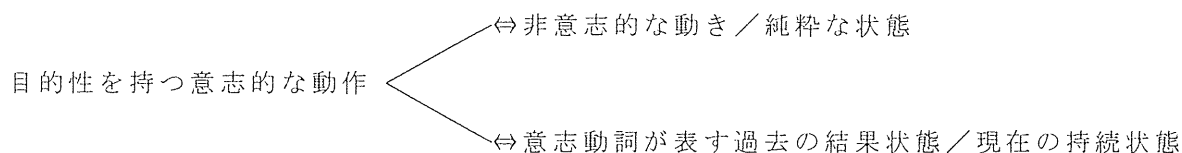
49) 「そうだよ。これで、堂々と、北条刑事のために、調査がやれるよ。」(富士p.90)

50) 店のマネージャーは、5号館まであって、どのクラブにも、星野のために、社長室が設けてあるといっています。(富士p.91)

ここでは、例49)の「調査がやれる」は、「調査をやることができる」と、例50)の「どのクラブにも、星野のために、社長室が設けてある」は、「星野のために、社長室を設けて、どのクラブにも(社長室が)ある」と、動作性が認められるような解釈がされているので、利益目的になっているのである。

このように考えれば、述語成分は、動作の意志性の有無で次のような対立関係を形成しているのである。

図①：動作の意志性の有無に関する述語成分の対立関係



このような対立を機能の連続体と見なせば、タイプわけされた述語成分は、まさに機能移行

^{*1} 集めた用例の中で、述語成分が明確な働きかけ性を持つものが21例あるが、原因と解釈される用例は見つからない。

の連続体を呈することになる。

図②：述語成分の機能移行の連続について

タイプ1：目的性を持つ典型的な意志的な動作 →タイプ3：目的性を持つ意志的な動作
としても動作の状態としても働くもの →タイプ2：典型的な状態

5. 「名詞の＋タメニ」が表す原因（不利益）表現と利益目的／動作目的表現の連続性と相違点について

タイプわけされる述語成分は、「名詞の＋タメニ」にある各名詞の語彙的な意味タイプと組み合わせ、様々な意味を表す。それをまず表にまとめると、次のようになる。

図③：「名詞の＋タメニ」と述語成分の組み合わせ方及び表現との関係について

[名詞 の＋タメ ニ]と述 語成分全 体との組 み合わせ方	表現	
	名詞の意味タイプ1＋述語成分タイプ1	動作目的（利益）
	名詞の意味タイプ2＋述語成分タイプ1	利益目的
	名詞の意味タイプ1＋述語成分タイプ3	動作目的と原因
	名詞の意味タイプ2＋述語成分タイプ3	利益目的と原因
	名詞の意味タイプ1＋述語成分タイプ2	原因（不利益）
	名詞の意味タイプ2＋述語成分タイプ2	不利益（原因）
	名詞の意味タイプ3＋述語成分タイプ2	原因（不利益）

これに、さらに継起性の条件を加えて整理し直せば、次の図④になる。

図④：「名詞の＋タメニ」と述語成分の継起性、組み合わせ方及び表現との関係

時間の前後関係	表現	
	組み合わせ方	
[名詞の＋タメニ] が先行 述語成分が後続	名詞の意味タイプ1＋述語成分タイプ3	原因
	名詞の意味タイプ2＋述語成分タイプ3	原因
	名詞の意味タイプ1＋述語成分タイプ2	原因
	名詞の意味タイプ2＋述語成分タイプ2	原因
	名詞の意味タイプ3＋述語成分タイプ2	原因

[名詞の＋タメニ] が後続 述語成分が先行	名詞の意味タイプ 1 + 述語成分タイプ 1	動作目的
	名詞の意味タイプ 2 + 述語成分タイプ 1	利益目的
	名詞の意味タイプ 1 + 述語成分タイプ 3	動作目的
	名詞の意味タイプ 2 + 述語成分タイプ 3	利益目的

このように、[名詞の＋タメニ]は、述語成分との継起関係に基づきながら、述語成分と様々な形で組み合わされて、典型的な原因表現と典型的な動作目的表現が両極に存在し、その間に中間的な用法が存在する、という表現の連続体を作り出している。原因（不利益）と利益目的／動作目的の表現は、様々な文法的条件に性格づけられた[名詞の＋タメニ]と述語成分の相互影響によって、段階的に常に移行可能な連続線上にあると考えられる。

6. 結論

以上、第2節では、次の三点を明らかにした。

- A：[名詞の＋タメニ]は、構文的には、従属節のように主語・述語を持たないが、意味的には、述語成分と対置的な関係を有する出来事を表して、両者の組み合わせ方によっていろいろの表現に与かる。原因表現（不利益を含む）と利益目的／動作目的表現は、一つの連続体を作っている。名詞の語彙的な意味に規定される[名詞の＋タメニ]と、目的性を持つ意志的な動作、動作の結果・持続状態、純粋な状態などに性格づけられる述語成分が、発生の時間前後の位置づけを示す継起性に基づいて、相互に影響し合って、原因（不利益）か利益目的／動作目的かの意味を表す。
- B：[名詞の＋タメニ]は、テンス・アスペクト・ヴォイスなどにニュートラルなため、その意味表出の明確化がより述語成分の性格に依存することになる。
- C：分析の方法において、[名詞の＋タメニ]視点と述語成分視点という二つがあるようである。意志的な動作による目的性の強い述語成分を除けば、[名詞の＋タメニ]の機能に視点を据えると、すべてが「動機づけ」という働きに統一される可能性がある。この意味で、動作目的表現は、述語成分に現れる意志的な動作による目的性に支えられているとも言えよう。[用言＋タメニ]の場合とは異なり、[名詞の＋タメニ]は、述語成分に対する働きかけが弱いので、原因と動作目的の区別は、述語成分が示す意志的な動作による目的性により大きく依存している。

第三節　〔タメニ〕と〔タメ〕の相違について

〔タメニ〕と〔タメ〕は、両方とも原因表現と目的表現^{*1}の両方を表すことができ、しかも、相互に置き換えのできる場合が多い。つまり、〔ニ〕の付加は基本的に、〔タメニ〕と〔タメ〕が示す従属節と主節の対置関係を変えることはなく、原因と動作目的の区別に関わっていない。

- 1) 電車が遅れたために／ため、開会式に間に合わなかった。
- 2) 日本語を勉強するために／ため、日本に来た。

一方、実際の使用において、〔ニ〕の付加の有無は確かに、両者の間に違いを感じさせるが、これは何によるのであろうか。

第一節と第二節で、従属節と主節から構成される〔タメニ〕または〔タメ〕文は、基本的に両者が置き換えることができ、ともに原因／目的を表すことができることについて分析した。本節では、〔タメニ〕と〔タメ〕の相違は、〔ニ〕の付加によって両者の間に生じる従属節と主節の関係構成の仕方の相違を示すものと考え、それを明らかにしたい。つまり、〔タメニ〕文は、起因、対象、結果目的を表す〔ニ〕が付加されることによって、従属節が主節の述語と格関係を兼ねて表す「格的関係の兼用の」^{*2}表現に用いられやすいのに対して、〔タメ〕文は、従属節が主節と対置関係を構成する表現になるのである。

以下、〔タメニ〕と〔タメ〕の相違について、両者が置き換えのできない構文的相違を表す場合と、両者が置き換えのできる表現選択的 (optional) 相違を表す場合、との両方から、考察を加えることにする。

1. 先行研究について

小矢野 1995 では、〔ノニ〕に現れる統語論的な現象を中心に、「ひとえ文と連体的なつきそ

^{*1} 〔用言＋タメニ〕と〔名詞の＋タメニ〕を一緒に論ずるので、動作目的表現と利益目的表現を区別せず、目的表現に代表させて論を進めることにする。

^{*2} 「デ」や「ニ」で述語と構成する格関係とは異なって、〔タメニ〕と〔タメ〕文は基本的に、従属節と主節の対置関係を構成するものである。しかし、〔タメニ〕文は表現的に、主節の述語との格関係を兼ねて表しており、〔タメ〕文より相対的に格的な結びつきが緊密であるというので、「格的関係の兼用」と呼んでいる。なお、以下は便利のため、「格的関係の兼用」を略して、「格的関係」と呼び、格関係と区別することにする。

い・あわせ文、連用的なつきそい・あわせ文との間に段階的な相互移行の関係がある」(p. 7) ことを指摘し、「格くずれ」という用語を用いて、格的関係の構成と対置関係の構成との間に存する連続性を分析している。

「格くずれ」とは、意味統語論的なレベルにおいては、連語間の意味的なむすびつきがゆるくなること、つまり、一定の形式をとったX格のかざり名詞の語彙的な意味と、かざられる動詞の語彙的な意味とのむすびつきの有縁性(論理的な張り合い関係)がゆるくなり、対象的なむすびつき、規定的なむすびつき、さらに状況的なむすびつきといった、むすびつきの質に変化が生じることである。そして、質の変化に対応して、機能統語論的なレベルにおいては、対象語として機能していたX格の名詞が、名詞の語彙的な意味の変更によって状況語として機能するようになり、最終的には、格ではなくなり、つきそい文、ならべ文へと変わっていくことである。(p. 7)

[二]の付加の有無による[タメニ]と[タメ]の相違については、従属節が主節の述語と格的関係を構成するか、主節と対置関係を構成するか、という相違を示すもので、「名詞の語彙的な意味の変更によって状況語として機能するようになる」ことは見られない。従って、[二]に付加は、構文的に単文(格関係)と複文(対置関係)の間に生ずる「段階的な相互移行」を表すことを示すものではないと考える*¹。

益岡1995では、主張の焦点(疑問詞が質問文の焦点になりやすいので、結果的には主張の焦点と同じに考えられる)になるか否かで、[タメニ]と[タメ]の違いは、「格助詞を伴う場合は格成分として機能し、主張のスコープに含まれ」、「格助詞を伴わない場合は状況成分として機能し、主張のスコープの外に出る」(p. 162)と分析し*²、[二]の付加は、格成分か状況成分かを区別していること、格成分と状況成分の区別は、[タメニ]または[タメ]の部分が主張の焦点になれるか否か(同じ指摘は、今尾1991にも見られている)、疑問詞が使われる

*¹ 単文の格関係と複文の対置関係の間に、「段階的な相互移行」を表す構文的な要素があるとすれば、それを[名詞の+タメニ]という文の成分と考えたい。詳しくは、今後の研究に譲る。

*² 益岡1995では、「格成分：事態のあり方を限定するもの」、「状況成分：事態のあり方から独立した情報を表すもの」(p. 161)と定義している。

か否かによって裏付けられると述べている^{*1}。

3) 雪が降ったために、新幹線がとまったのだ。

4) 雪が降ったため、新幹線がとまったのだ。

3)と4)の中で、次の読みができるのは3)だけである。

5) 新幹線がとまったのは、雪が降ったためだ。

また、疑問詞が現れうるのは、〔ニ〕を伴う場合に限られている。

6) 何があったために、新幹線がとまったのですか。

^{*1} 主張の焦点になるか否かという違いによって、〔タメニ〕は格成分、〔タメ〕は状況成分と分類することは、両者とも原因／目的を表す意味表出の連続体を構成しているという用法の解明には繋がらないので、動的に〔タメニ〕と〔タメ〕文を把握することにとっては有効な分類とは言い難い。つまり、〔タメニ〕と〔タメ〕は両者とも、基本的に従属節と主節の対置関係を示し、文法的条件によって原因か目的を表しているという前提を踏まえた上で、〔ニ〕の付加によって、〔タメニ〕と〔タメ〕が構文的にどう異なるかを論ずるべきであろう。というのは、〔ニ〕の付加の有無は、原因と目的を表すという基本を変えていないからである。

また、久野1987では、疑問詞に質問の焦点を合わせるためには、〔ノダ〕を用いて疑問詞をスコープの中に収める必要があると指摘している。〔ノダ〕の役割は、文の中のどの部分を主張の焦点に合わせるか、スコープをどこまで拡大して説明部の内容にするか、であって、格成分か状況成分かの区別には繋がるかどうかは疑問に思う。

7)??何があったため、新幹線がとまったのですか。

(p. 162～163) *¹

主張の焦点になるために、〔ニ〕の付加が必要であるという益岡の指摘は、格的関係の兼用か対置関係かという関係構成の仕方にとらえ直して見れば、格的関係の構成は、主張の焦点になるので、〔ニ〕の付加を必要とし、対置関係の構成は、主張の焦点にならないので、〔ニ〕の付加を必要としないか、義務的ではないというふうに理解することができる。

ここでは、小矢野1995の「ひとえ文とあわせ文との間に段階的な相互移行関係がある」という説に従いながら、〔タメニ〕と〔タメ〕の相違は、格的関係か対置関係かという関係構成の仕方に関係するものであると考え、また、主張の焦点の問題は、格的関係の構文と対置関係の構文という関係構成の違いを表すものとして位置づけることにし、両者の相違を、構文的相違と表現選択的相違の両方から分析していくことにする。

2. 〔タメニ〕と〔タメ〕が示す構文的相違について

構文的相違を表すものとして〔タメニ〕か〔タメ〕が用いられる場合は、基本的に両者は置き換えができないか、置き換えると、表現が著しく不自然になる。関係構成の仕方から言えば、述語との格的関係の明示を強く要求するため、〔タメニ〕が使われる場合と、従属節と主節の対置関係を強く求めるために、〔タメ〕が選択される場合、との二つがある。

2.1. 格的関係の明示によって〔タメニ〕が選択される場合について

構文的に述語の格体制に置かれる場合は、〔タメニ〕部分が述語に係る形として文の中に組

*¹ 益岡1995で指摘されている〔タメニ〕と〔タメ〕の使い分けは、二者択一のものではなく、相対的なものである。対置関係を表面化する〔タメ〕は、主張の焦点になる読みが不可能だというのは言い過ぎのようであり、〔タメ〕の従属節の中に疑問詞が絶対に含まれないというわけではない。例1)に、〔タメニ〕を使っても、〔タメ〕を使っても、例2)のような読みが可能であり、例3)と4)では、〔タメ〕を使っても、さほど不自然にも感じられない。

1) 日本語を研究するために／ため、日本に来たのだ。

2) 日本に来たのは、日本語を研究するためだ。

3) 何のために／ため、日本に来たのですか。

4) 誰に会うために／ため、ここに来たのですか。

しかし、相対的に疑問詞を含む質問や主張の焦点を表すのに、〔タメニ〕が使われやすいということは、言えそうである。

み込まれ^{*1}、述語と格的関係を構成しているのである。このような文では、本来〔ニ〕格を必要とする動詞や形容詞が述語に使われる場合が多く、〔ニ〕が脱落すると、表現は不自然になる。このような文は、目的を表す表現が多い。

8) 規子の注意はすべて、ぜんそく気味の息子の将来と健康、それにく自分の家を持つこと
に注ぎ込まれていたからだ。教養のために(??ため) 使っている余分のお金は典子に
はない。 (家p. 82)

9) この本は、アメリカへの留学希望者のために(??ため)、非常に役に立つ。

10) 話し手による語順の逆転が聞き手の認知に果たす役割は、発話を正しく、また効果的に
理解させるために(??ため) 重要である。

例8)9)10)はそれぞれ、〔ニ〕（〔ニトッテ〕〔ニ対シテ〕）と置き換えが可能である。上例
が示すように、文の構造は、〔～は、～述語〕が基本となっており、〔タメニ〕部分は、述語
だけに係っていくのである。言い換えれば、「教養」や「アメリカへの留学希望者」、「理解
させる」は、述語「使う」や「役に立つ」、「重要である」が要求する格成分と同じように働
いているのである^{*2}。

また、文の構造として固定化してしまうと、〔タメニ〕部分が述語と一体になっている場合
さえある。次の例が示すように、述語の語彙的な意味が〔ニ〕格を必要とする格的関係のもの
ではないが、〔～は～にある〕という構文の中では、〔ニ〕が義務づけられているように思わ
れる。この場合も、〔ニ〕が落ちると、文が不自然になる。

^{*1} 矢沢1994では、「いわゆる『格』は、文構造における主要成分を示す『構造表示の格』と、意味役割を示す『意
味表示の格』とに分けることができる。」との指摘がある。述語を中心に形成される格体制に属する成分は、
述語の語彙的な意味との結びつきが強いため、構文的に格助詞の付加が強く求められる傾向があるように思う。

^{*2} 〔タメニ〕と〔ニ〕との違いは、〔ニ〕が単に述語の表す動作の及ぶ対象（直接目的）を表すのに対して、
〔タメニ〕は、利益を媒介にしているので、利益者と対象が一致する直接目的も、利益者と対象が別々になる
間接目的も表すことができる。〔ニ〕格を必要としない述語の場合は、〔タメニ〕と〔ニ〕は置き換えること
ができない（例1）。また、利益者と対象が別々になっている場合も、〔タメニ〕が使えるが、〔ニ〕は使え
ないと思う。

1) 国際親善のために(??に)、定期的に留学生とスポーツ試合を行っている。

2) 田中さんのために(??に)、駅へ鈴木さんを迎えに行った。

11) 交通信号は、人の命を守るためにある。

さらに、格体制にあるときほど義務的ではないが、気持ちや感情を表す動詞が使われるときには、〔タメ〕より、〔タメニ〕を用いる方がずっと許容度が上がるようである。例12)が受け身の用法で、例13)は心理動詞の用法である。このような用法は、原因表現に多く見られる^{*1}。

12) 私は絶対にあんなふうに惨めにならないわ。母親のように気性のために嫌われるようにも、克子のように自分の強さのために孤立してしまうようにも。 (家p.137)

13) それに、自分で階下にゆく気持ちは、あの自分でついついしてしまった妄想のためにまるきり失せてしまっていたので、ひどく酒の欲しい気分ではあるけれども、ともかくベットに横たわり、なるべく早く眠ってしまおうと努力することにした。 (家p.58)

気持ちや感情を表す動詞が用いられる場合、〔ニ〕の付加によって起因が明確に示めされ、文が落ち着くのであろう。

しかし、前にも述べたように、格的関係と対置関係とは、それぞれ固定化したものではなく、相互移行の連続体を形成している。ここでは、〔タメニ〕部分が文頭に移動することによって、格的関係から対置関係に変わる可能性があり、そうすれば、〔タメ〕も使えるようになるという目ことを指摘しておきたい。

2.1.1. 〔タメニ〕部分と述語の相対的位置について

対置関係は、従属節と主節の結びつきを意味する。〔タメニ〕部分と述語の間に別の成分が入ると、述語との格的関係の結びつきが相対的に弱くなり、従属節と主節のような対置関係として認められやすくなる。そのため、義務的とされる〔ニ〕の付加も、節と節の対置関係の構成によって義務的でなくなり、〔タメ〕が使われても、許容度が上がることになる。

^{*1} 気持ちや感情を表す動詞は、意志性を持たないため、動作目的を表すことができない。また、原因を表す〔タメニ〕は、目的の場合と同じように、起因を表す〔ニ〕より間接的であるが、間接原因と対象を分ける用例は見つからない。次にあげる1)と2)は、直接原因と間接原因の区別を示すものであり、例3)は、作例であるが、間接原因と対象を分けた原因表現である。

1) いつもわがママをいう父親のために、私は非常に困っている。

2) いつもわがママをいう父親に、私は非常に困っている。

3) しつけの悪いよめのために、まごの教育に、(おばあさんは)頭を痛めている。

14) 収入の大半は、子供の教育のために (??ため)、使っている。

15) 子供の教育のために (?ため)、収入の大半は使っている。

16) 日が立つにつれて、これは、卑怯な行為ではなく、自分を守るために (??ため) 必要な賢明な方策であるとさえ、思い始めた。 (情事 p. 52)

17) これは、卑怯な行為ではなく、自分を守るために (ため)、このような方策が必要で、賢明であるとさえ、思い始めた。

2.2. 対置関係の明示によって「タメ」が選択される場合について

第一節では、複文において、原因を表す「タメニ」文は基本的に、継起性に基づく客体的な表現で、主節に、テンス的に未来志向を特徴とする話者の心的態度の表出や聞き手への働きかけなどの形が用いられないと述べた。しかし、次の例のように、主節が丁寧な要請を表す場合に限って、原因を表す「タメ」を使うことができる。そのときは、格的関係を明示する「タメニ」より、対置関係を明示する「タメ」が選択されやすい。

18) ポイント事故のため (??ために)、お急ぎの方は在来線をご利用ください。

(東北新幹線の車内放送)

19) 工事のため (??ために)、迂回してください。

(工事の看板)

20) 小銭が不足しているため (??ために)、釣り銭のないようにしてください。

21) 新幹線が3分ほど遅れているため (??ために)、少々お待ちください。 (車内放送)

例18)～21)に現れる「タメ」と「タメニ」の違いは、構文的に次のように説明することができる。「タメニ」または「タメ」文は、原因表現においては、従属節の出来事と主節の出来事が継起的に発生するという概念が強く、話者の心的態度や相手への働きかけを表すモダリティ形式に接続しにくい。しかし、原因がすでに客体的に生じ、しかも、それによって不本意にも相手（不特定の相手が多い）に依頼せざるを得ないという意味を表そうとすれば、「タメ」を使うことができる。その場合は、「ニ」を振り落とすことによって、述語との格的関係の明示を避け、従属節と主節の対置関係を明示する「タメ」が選択されるのである。

一方、これとまったく反対に、「タメニ」文がさらに名詞を修飾する連体修飾節になるときは、「タメ」より「タメニ」の方が、相対的に表現が落ち着く場合がある。

22) 家に帰ったのは、午後八時近くだった。眠気のために機嫌のよくない佳代を、麻子があ

やしながら風呂に入れた。 (情事 p. 74)

23) 八木はキイをひねると、ゼロ・ワンのために開発された直流電気モーターが衣ずれのよ
うな音を発して回転した。 (背徳 p. 262)

24) この映画は、不良少年を教育するために送り込まれたサイボーグ教師と生徒の死闘を描
いている。 (TV)

25) 息子に会うためにこの集会に参加した彼女は、その夜何者に殺された。

22)～25)は、絶対に「タメ」が使えないというものではないが、主節との結びつきが相対的に強い「タメニ」従属節が、対置関係の性格の強い「タメ」従属節より表現が落ち着くことが言えよう。「タメ」を使うと、対置関係の色合いが強くなるということは、例えば、例22)のように、「タメニ」がすぐ近くの述語と関係する(機嫌のよくない佳代)と解釈されやすいのに対して、次の例26)では、「眠気のため」という「タメ」従属節は、主節と関係する(あやまって殺してしまった麻子)と解釈する可能性が高くなる、ということによっても、裏付けることができると思う^{*1}。

26) 眠気のため、機嫌のよくない佳代を、麻子はあやまって殺してしまった。

3. 「タメニ」と「タメ」が示す表現選択的相違の場合について

従属節と主節の対置関係を構成している場合では、「タメニ」と「タメ」は、基本的に置き換えることができる。両者の違いは、従属節が主節の述語との格的関係をより強く出すか、主節の表す出来事全体との対置関係を強く出すか、というニュアンスの違いを表すことになる。このような表現選択的相違は、原因表現にも目的表現にも見られる。

27) 「チャールズ、わたしは何もしていないのに、監獄に送られようとしているの」
恐怖のために (ため)、彼女は泣き出した。 (明日 p. 86)

28) 授業が終わっても、教室に残って自習をする学生がいる。確認のため (ために)、影
山は職員室を出て教室に向かった。 (女教師 p. 277)

29) 一度彼女が夕食に十五分遅れたことがあったが、チャールズがそれで不機嫌になったた
め (ために)、その夜のデートが台無しになってしまったことがある。 (明日 p. 21)

^{*1} これは、福嶋健伸氏の指摘によるものである。また、同氏は、「タメ」は「タメニ」より、その後ろにポーズがあると想定しやすいとも指摘している。

30)トレイシーは祈り、ロマーノが活着ているかどうかを確かめるために（ため）、彼のそばにひざまずいた。 (明日p.63)

27)29)は原因表現の例で、28)30)は目的表現の例と思われる。〔タメニ〕と〔タメ〕を置き換えても、基本的に原因と目的の意味表出には影響が出ない。しかし、〔ニ〕を付加すれば、主節に対する従属節の機能が明確になり、主節の述語との格的関係の結びつきの緊密度が高められ、そのために、原因としてか目的としてかという特定されたニュアンスが強く感じられるようになる。それに対して、〔タメ〕の場合は、従属節と主節の対置関係を明確にしているため、節と節の関係が強くなり、それだけ、従属節と主節のそれぞれの独立性が高く感じられるのである。

ニュアンスの違いだけといっても、構文的相違と表現選択的相違は段階的に相互に移行することができるので、具体的な用例においては、選択されやすさという傾向が存すると考えられる。次の例は、述語との格的関係の結びつきを相対的に強く要求するために、〔タメニ〕が〔タメ〕よりも選択され^すやすいようである。

31)子供の教育のために、あの人に会って、もう一度話してみたい。

32)平和を守るために、力を合わせて一緒に戦おう。

33)世の中のために、ぜひ選挙に出て当選してください。

例31)～33)では、いずれも主節が働きかけ性を強く持つために、それと呼応して、目的をより明確にするために、従属節に〔タメニ〕が使われていると考えられる。言い換えれば、主節が強い目的性を表すと、述語との格的関係が強く意識され、〔タメニ〕が選択されやすくなるのかもしれない。

ニュアンスの相違は、両者が置き換えのできる場合において、話者がより格的関係の結びつきをするか、より対置関係を結ぶかのために生じるものである。本来、動詞との格関係を示す格助詞〔ニ〕は、従属節と主節の結合という複文の中に使用されることによって、副次的に格的関係の兼用を表す構文的なマーカーとして利用され、機能の明確化のために働くことになっている。〔ニ〕の付加に対する話者の選択は、まさに話者の表現意図に関わってくることになるのである。

4. 結論

〔タメニ〕と〔タメ〕の相違を、次の二点でまとめることができる。

A : 「二」の付加の有無は、主節の述語との格的関係兼用か従属節と主節の対置関係か、という関係構成の仕方の相違を表している。構文的相違として、「二」を必要とする動詞や形容詞が述語に使われるとき、述語と格的関係を結ぶため、「タメニ」が選択されるようになる。それに対して、原因表現で、主節が依頼を表すとき、従属節と主節が結ぶ対置関係がより強く求められるため、「タメ」が選択されやすくなる。主張の焦点になるために、相対的に「タメニ」が選択されやすいのも、節と節との対置関係では、節全体が焦点に定められにくく、主節の述語との格的関係を明確にすることによって、焦点になる部分が定められるからである。

B : 一方、実際の表現において、「二」の付加の有無はよく、述語との格的関係をより強く出すか、従属節と主節の対置関係をより強く出すか、という表現のニュアンスの差として現れてくる。このような表現選択的相違は、複文を基本的な構造としながら、格的関係の影響を受けて生じたものと考えられる。

第二章 原因表現と理由表現の共通点と相違点

ー [タメニ、ノデ、カラ] を中心にー

この章では、[タメニ、ノデ、カラ]の表す因果性表現における客体性と主体性について^{*1}、出来事発生の継起性と非継起性、表現の叙述性と話者の心的態度表出の主張性という二つの側面から検討する^{*2}。

論理的に、二つの出来事の間原因と結果の関係が認められるのは、まず出来事発生の時間に前後関係が形成されたときである。つまり、原因／理由になる従属節の出来事が、主節の出来事より以前に発生していなければならない、ということである。時間的に従属節が先に発生し、存在する出来事でなければ、原因／理由になって、主節に結果をもたらすことは不可能であろう。しかし、実際の言語表現においては、従属節の出来事が主節より以後に発生することが、いくらでもある。因果性表現には、継起的な発生に従う表現と、理由となる従属節の出来事が主節のそれより以後に発生する非継起性の表現とがある。次の例では、従属節の出来事は、主節より相対的に以後に発生するが、理由として働いているのである。

- 1) 明日友達が来るので、いま部屋を片付けている。
- 2) こうなると、いやでも自分の顔が彼女の視線に触れるので、久恒は慌ててその階を降りた。音が背後から頭上に昇った。(けものp. 103)
- 3) 「そこだけ母屋から突き出ているから外から見てもすぐわかります。その戸を開けておくから、そっと入ってください。夜はだれもいないから・・・。(けものp. 195)
- 4) 日曜日なら都合が良いだろうから、日曜日にしてはどうですか。

日本語の因果性表現には、出来事発生の時間の前後関係から見ると、基本的に継起性に基づく前因・後果的な原因表現と、継起性にとらわれない理由表現との二つのタイプがある。前者

^{*1}ここでは、[タメニ]を代表させて、比較研究を進めることにする。

^{*2}接続助詞[テ]も、継起性と表現の叙述性において、[タメニ]と似たような振る舞いをするが、[テ]の用法の全般については、成田1983、高橋1983、仁田1995などで、詳しい分析が行われている。従って、ここでは、[テ]については、全般的な紹介は省略して、第三節で[テ]と[タメニ]の違いだけを取り上げて検討することにする。

は、〔タメニ〕を典型とし、後者は、〔ノデ、カラ〕を代表とすると考えられる^{*1}。

原因と理由の区別について、F・ワイスマンの説明を引用したい。F・ワイスマン1977では、原因と理由の関連性について次のような興味深い記述をしている。

われわれは理由と原因をどのように区別するのだろうか。計算しながら種々の数字を書き付けている人を仮定しよう。なぜそのように種々の数字を書いているのかを問われると、その人は二様に答えられよう。第一に「この数字を加えていたのであり、その際には、これこれの規則に従っていた」と言うこともできる。この場合には、その人は自分の行為に対する理由を述べていることになる。第二には「私の頭の中には、これこれの種類の過程が進行していた。その諸過程が、このような数字を書かせるように筋肉に刺激を与えたのだ」と答えることもできたであろう。この場合には、その人は自分の行動の原因を述べていることになる。（p. 139）

ある結果に対して、理由は、話者の主体性（自分が認定した因果性）に基づいて述べられるものであり、原因の説明は、話者の主体性から離れた客体的な所（筋肉に対する刺激）に起因があるというF・ワイスマンの指摘は、理由と原因の区別に非常に役に立つ。彼は、さらに「ある行動の原因は、観察によってのみ発見できるのであり、経験が積み重ねられれば、場合によっては、そうした因果連続は確からしさをますこともあり、あるいは反証されることもある、という意味内容で仮説的な性格のものである。」のに対して、「自分の行動の理由を知っているのは、その人だけである。」（p. 139）と原因の観察可能性・客体性と理由の観察不可能性・主体性を論じ、医者と患者の例をあげて、その関係を次のように具体的に述べている。

医者が私を観察して、私の行動の原因を、私より上手でないまでも、同様に知る、ということはあるが、何故にそのような行動を取ったかという理由は、私だけしかわからないのである。（p. 139）

^{*1} 原因と理由を明確に区別するのは難しい。仁田1995には、「無意志動詞で形成されているものを『原因』と仮称し、意志動詞からなっているものを『理由』と仮に呼んでおく」（p. 113）という指摘がある。また、言語研究会・構文論グループ1985には、「原因的なつきそい・あわせ文は、『するので』のかたちをとるときには、原因を表しているし、『するから』のかたちをとるときには、理由を表していると、一般的に規定することができる」（p. 27）という記述がある。ここでは、原因が客体的因果性を、理由が主体的因果性を表すと考えて、その相違を時間の前後関係と表現の性格から分析する。

原因が示す因果性は客体的なもので、理由が示す因果性は主体的なものであると一応言うことができるのではないかと思う。

世の中のすべてのものが、相互に関連性を持ちながら因果的に動いていると言われている。一つの物や出来事が発生、成長、持続、消失するプロセスは、他の物や出来事のプロセスを起因にして生じる結果であると同時に、他の物や出来事のプロセスを起因させる原因としても働いているのである。自然発生的に起きる因果性に対する捉え方は、出来事発生 of 継起性を特徴とする。しかし、因果性に対する人間の認識は、継起性にとどまらない。相対的に主節より以後（未来）に起こる出来事でも、それを理由として結果を述べることができるばかりでなく、主節が表す話者の心的態度の表出を理由づける内容として、理由を提起することもできる。この場合の因果性は、話者の認識の中に展開される因果関係を拠り所としているのである。

第一章では、継起性に基づく「タメニ」文の原因表現は、話者が観察の立場に立って、出来事発生 of 先行・後続を手がかりに、その因果性を客体的に把握して表現するものであり、出来事発生 of 時間の前後関係に基づく継起性を特徴とする「タメニ」文は、自然発生的に起きる因果性に強く依存しているため、話者の心的態度の表出をできるだけ抑えた叙述的表現になりやすいことについて述べた。ここでは、出来事発生 of 先行・後続にとらわれない「ノデ、カラ」の理由表現は、話者が理由と結果、理由と心的態度の表出を主体的に結び付ける主体的な因果関係を表す表現であることについて考える。話者が主体的に因果的に取り結ぶ働きを特徴とする「ノデ、カラ」文は、話者の意図的な理由づけ、判断や主張、聞き手に対する要請など、話者の主体的な態度を主張する表現に使われやすい。

また、同じく非継起性の「ノデ」と「カラ」でも、両者の間には、従属節の理由と主節の結果や心的態度の表出の結合において、理由設定の仕方、理由と結果や心的態度の結び付け方に相違が見られている。その相違は具体的な表現において、根拠の客観性、客観的な根拠からの結果や心的態度の表出の導きだし式（ノデ）と、根拠の主観性、主観的な根拠による結果や心的態度の表出へのつけ加え式（カラ）、として現れてくる^{*1}。

上記の対立関係を図示すれば、次のようになる。

^{*1} 「から」が付け加えのであるということについては、渡辺1992に次のような言及がある。

ある判断や結論を下した理由・原因・根拠を解説したり、主張したり、言い添えたりすることが「から」条件文の目的である。目的に向かって、主体的な心的態度で望もうとするから、独立性が弱く、理由を示す働きも弱い「ので」では、かたがわりできない。これは「から」が、その判断の理由や根拠を一つの主張として付加していく働きがあるからである。（p.81）

表1 [テ、タメニ、ノデ、カラ] が示す対立関係の補完構造

表現の特徴			
表現の性格			
出来事発生の前後関係			
表現の形態			
[テ、タメニ] ⇔ [ノデ、カラ]	継起性⇔非継起性	客体的⇔主体的	叙述性⇔主張性
[ノデ] ⇔ [カラ]	非継起性	導きだし⇔付け加え	客観性⇔主観性

このように、因果性表現に現れる対立関係は、相互補完の分布をなして表現のシステムを構成しているように思われる。

以下、まず上の図に示される対立関係を基にして、[タメニ、ノデ、カラ]に現れる共通性と相違性を具体的に検討していく。第一節では、客体的表現の[タメニ]と主体的表現の[ノデ、カラ]の対立関係、第二節では、導き出し式の[ノデ]と付け加え式の[カラ]の対立関係、について、それぞれ論ずることにする。

なお、同じく継起性を特徴とする因果性表現には、因果性表出の形態を持たない接続助詞の[テ]が挙げられる。しかし、[タメニ]と異なって、[テ]は、形態的に因果関係を明示する機能がないため、時間の継起から因果の継起への移行という読みが、基本的に従属節と主節の意味関係に頼っている。また、継起性に特徴づけられる表現の叙述性も、本来の並立の機能のため、従属節と主節のまとまり性が緩められて、話者の気持ちをも表すことができるようになる。第三節では、同じく継起性に基づく原因表現の[テ]と[タメニ]が、形態上の因果性の明示(MARKED)と不明示(UNMARKED)によって現れる表現上の相違について考察を加えることにする。

また、用言を中心に形成される出来事の対置関係と異なって、名詞を中心に形成される[名詞の+タメニ]部分と述語成分の結びつき関係においては、[名詞の+タメニ]と[名詞+なノデ/だカラ]で、継起性と非継起性、関係づけ方の客体性と主体性、及び表現の叙述性と心づいた態度の主張性といった対立がどのように現れるかについて、第四節で取り上げて分析することにする。

第一節 原因表現と理由表現に現れる

時間関係と表現の性格について

ー [タメニ] と [ノデ、カラ] の相違を中心にー

この節では主に、次の二点を手がかりにして、[タメニ] と [ノデ、カラ] の表現に現れる違いを明らかにする。

- A：従属節に描かれる出来事と主節に描かれる出来事の発生時間の先行・後続関係、
- B：従属節と主節に用いられるモダリティ形式。

本節の分析を通じて、次の二点を主張したい。

- I：因果性表現の文には、基本的に二つの出来事発生 of 先行・後続という継起性を特徴として、発生順にとらえて表現する客体的表現の [タメニ] 文と、継起性にとらわれず、二つの出来事を、話者が理由から結果へ（理由⇒結果）と、理由から心的態度の表出へ（理由⇒心的態度の表出）、というふうに結び付けて表現する主体的表現の「ノデ、カラ」文が存すること。
- II：継起性に基づく原因表現は、発生順に基づく前因・後果の関係を基にしているため、因果性に対する客体的な把握が特徴で、事実に対する叙述的な表現が多い。これに対して、継起性にとられない理由表現は、理由と結果、理由と心的態度の表出という、話者の主体によって確認され、結び付けられる因果性のものであるため、話者の結論のための理由づけ、話者の心的態度の表出のための理由づけという、話者の主張を取り入れる表現が多いこと。

次に、この二点について、詳しく検討する。

1. 先行研究について

[ノデ] と [カラ] の比較研究が非常に盛んであるのに対して、[タメニ] と [ノデ、カラ] の使い分けについて、構文的な側面から取り上げて研究した論文は、数が非常に少ない。これは、モダリティ形式の有無に主眼を置く研究が多いのに対して、出来事発生 of 時間の前後関係

や時間と表現の関連性からのアプローチが少なかったからであろう。従って、因果関係を表す「テ」も最初から、これらの比較研究の対象から外されてしまうのである。〔タメニ、ノデ、カラ〕の使い分けについて論じたものに、構文の角度から接続の違いを論じた三上1972と、モダリティ形式の有無から三者の使い分けを分析した今尾1991がある。以下、これらについて見てみることにする。

三上1972では、複文には、構文的に単式と複式があり、複式はさらに軟式と硬式に分かれると指摘し、〔タメニ、ノデ、カラ〕を例にして、次のように説明している。（例文はすべて、通し番号で統一しているため、原文と異なる。以下も同様。－筆者－）

- 1) 寝坊シタタメニ、遅刻シタ。 (単式)
- 2) 寝坊シタノデ、遅刻シタ。 (複式／軟式)
- 3) 寝坊シタカラ、遅刻シタ。 (複式／硬式)

「フシとフシとの間の中空な直線的な部分が単式である。フシのような継ぎ目、そこが割れやすいような継ぎ目を含んで折線式になっているのが複式である」（p. 273）と、その構文的な違いを説明し、また、〔ノデ〕を「2の軟式は3の硬式に近いが、1の意味になる可能性もある。要するに中間的である」（p. 274）と位置づけている。

接続形式に、内容的にまとまりを特徴とする単式と、割れ目が存する複式の区別があり、さらに単式と硬式の両方にまたがる軟式があるという指摘は非常に優れている。が、その違いは何を背景にして生じてくるのか、また、従属節と主節の時間関係、モダリティ形式の有無、さらに原因づけと理由づけの仕方などに、それぞれがどのように関与し、どんな構文的な特徴があるのか、という分析がないので、分類だけに終わっている感じが強い。

今尾1991では、〔カラ、ノデ、タメ〕の選択条件に当たって、主に従属節と主節に現れるモダリティ形式の有無について調べたもので、出来事発生時間の前後関係に触れていない。今尾は、「主観性、客観性^{*1}を連続する概念と見なし、対立概念とする従来の枠組みとは異なる分析方法を用いる」（p. 78）として、次のように三者の相違を分析している。

^{*1} 『日本国語大辞典』には、客観と主観について、次のように説明している。

客観：意志や認識などの精神作用が目標として向かう対象。また、主観と独立して存する外界の対象。

主観：体験、認識、行動の対象に対して、体験し、表象し、認識し、感動し、意志する存在。また、その意識。

A：従属節に用いられるモダリティ形式の有無は、下記の表に示される通りである。

	モダリティ形式	カラ	ノデ	タメ
疑似モダリティ形式	タイ（欲求）	○	○	×
	ソウダ、ヨウダ、ラシイ（推量）	○	○	×
	ソウダ、トイウ（伝聞）	○	○	×
真正モダリティ形式	ダロウ、デショウ	○	×	×
	マイ	○	×	×

B：主節に用いられるモダリティ形式について、「意志、勧誘、依頼表現が後続する場合には、[カラ]と[ノデ]は使えるが、[タメ]は使えない」（p. 81）と指摘し、「従来、[ノデ]は客観的接続機能を持つとされてきたが、[ノデ]よりも[タメ]の方がさらに客観的な接続形式と考えられる」（p. 81）と述べている。

4)「…つまらぬこじつけをしている」とおっしゃる読者も多かろうと思うので（から／＊ため）、ここで、筆者には強力な支援者がいることを明らかにしよう。

（非丁寧形意志・意向）

5)映画の切符が二枚ありますので（から／＊ため）、一緒に行きませんか。（勧誘）

6)ご契約が下記の通り満期となりますので（から／＊ため）、引き続きご契約を賜りたくご案内かたがたお願い申し上げます。（丁寧形依頼）

7)そのうちに訪ねるが、今は急ぐので（から／＊ため）、素人の悲しさに免じて種々教示の程お願いする。

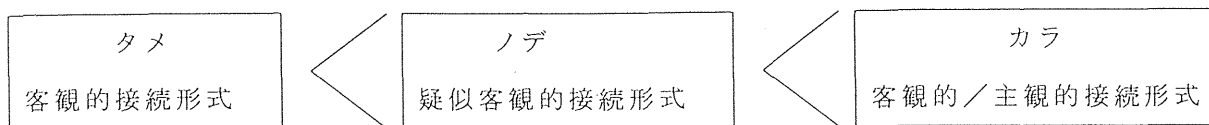
こうして、今尾は、そのモダリティ形式との共起関係に基づいて、発話態度の角度から次のようにまとめている。

[カラ]：主観的要素にも客観的要素にも使用可能な接続形式

[ノデ]：客観的要素が含まれていれば、使用可能な疑似客観的接続形式

[タメ]：主観的要素が含まれていると、使用不可能な客観的接続形式（p. 81）

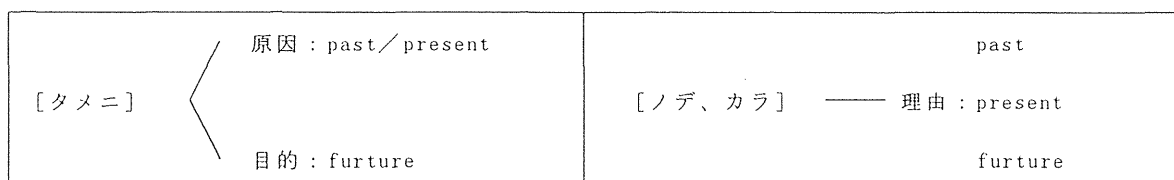
今尾の結論は、下記の図のようになるのではないかと考える（＜が前者の使用範囲を含む関係にあることを意味する）。



つまり、〔タメ〕は、用法が一番狭く、客観的な意味の表出にしか使われないのに対して、〔カラ〕は、客観的／疑似客観的を含め、純粋な主観的な真正モダリティ形式も接続でき、その中間に〔ノデ〕が置かれるという分類のようである。しかし、従属節と主節にモダリティ形式を用いることが可能か不可能かに基づく今尾の分類は、〔カラ、ノデ、タメ〕の接続可能な範囲を明確にすることはできるが、三者の意味や用法の相違を明らかにすることができない。客観／主観の判定基準をモダリティ形式の接続の可否に置き、疑似客観を中間にして、客観性と主観性が連続するものととらえるだけでは、分析基準を〔タメ〕の使い方に拡大し、用法を整理し直したに過ぎないのである。なぜ接続にこのような違いが現れるのか、その違いが何を意味しているか、〔カラ、ノデ、タメ〕は、相互に置き換えができる場合とできない場合があるが、その共通点と相違点がどこにあるのか、といった問題は依然として残されているのである。

表現は、相補分布^{*1}の関係をなして、連続を有しながら、対立しているものである。対立を出発点にして、文法的条件によって表現が移行するものと見るか、連続を出発点にして、文法的条件によって表現が分かれていくものと見なすか、視点の問題であるかもしれない。ここで

^{*1} 相補分布とは、各形態が、異なった文法的条件に規定されながら、同じ表現に加わっていることを言う。しかし、継起性と非継起性の対立という文法的条件から見れば、〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕は、それによって同じ表現にまとめられているとは言い難い。



ここでは、相補分布を、異なった文法的条件によって規定される部分対立という非対称的な相補関係と考える。

は、継起性・叙述性と非継起性・主張性を、客体的表現と主体的表現^{*1}を特徴づける対立概念と見なし、分析を進めることにする。

以上で述べたように、〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違については、モダリティ形式の有無だけでは、説明できない問題が残されている。これは、二つの出来事の発生の先行・後続という時間関係に注目して、出来事発生の前後関係を示す継起性と非継起性、その時間的な特徴と表現の繋がりという角度からのアプローチがほとんどなかったからであろう。考察から、時

^{*1} 客体的表現と主体的表現、客観的表現と主観的表現の区別については、すでに各箇所にて定義が述べてある。ここでは、念のため、もう一度、まとめて提示しておく。

客体的表現：継起性に基づき、二つの出来事を、発生の時間の前後関係に従って、因果的にとらえて表現するもの。

主体的表現：継起性にとらわれず、二つの出来事を、話者が主体的に因果的に結びつけて表現するもの。

客観的表現：理由とする根拠が客観的に存在し、話者がその根拠から、因果的に結果や心的態度の表出を導き出すもの。

主観的表現：理由とする根拠が話者の認識の中にあり、話者がそれを理由として、結果や心的態度の表出を理由づけるもの。

間関係の役割が完全に排除されているのである^{*1}。

以下、今までの研究成果を踏まえながら、時間の前後関係、モダリティ形式の有無、継起性・非継起性と表現の叙述性・主張性の関わりなどを中心に、客体的表現の〔タメニ〕と主体的表現の〔ノデ、カラ〕の相違を検討していくことにする。

2. 〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違について

客体的表現の〔タメニ〕と主体的表現の〔ノデ、カラ〕の違いを次の二点に分けて考察する。

A：二つの出来事発生の中に存する先行・後続の継起性 \iff 先行・後続にとらわれない非継起性、

B：因果関係の把握に見られる継起性に基づく表現の叙述性 \iff 継起性にとらわれない表現の話者の心的態度の主張性。

客体的表現と主体的表現の違いはほかでもなく、時間の継起性と非継起性、表現の叙述性と

^{*1} 前田1996（未刊）では、「『条件』『原因』『逆条件』『逆原因』という文は、基本的に『因果関係』、即ち、ある結果を引き起こす原因と、原因によって発生する結果という関係にある」（p.10）として、論理文という一つのグループにまとめ、リアリティー（言語によって表された事態と、現実との事実関係）という角度から次のように分析している。

仮説的リアリティー：両者とも、まだ実現されていない事態、あるいは事実かどうか未確認の事態としてとらえている場合、

反事実的リアリティー：両者とも実現しなかった事態、あるいは事実でないことが確認された事態である場合、

事実的リアリティー：両者ともに実現したこと、あるいは事実であると確認されたこととしてとらえられている場合。（p.11）

しかし、具体的にリアリティーから、〔タメニ〕〔ノデ〕〔カラ〕の三者の相違に対して言及するところは、ほとんど見られない。〔タメニ〕文が原因と目的を表し分けることについては、次のような記述がある。

原因・理由を表す〔タメニ〕：事実的リアリティー

○留学したために借金をした。

目的を表す〔タメニ〕：仮説的リアリティー

○留学するために借金をした。（p.11）

主張性によって特徴づけられているのである*¹。

2.1. 時間関係に見られる「タメニ」と「ノデ、カラ」の相違について

二つの出来事を、発生の前後に従って先行・後続の順序に並べる客体的表現の「タメニ」は基本的に、継起性に基づいて前因・後果的に因果性を表しており、従属節と主節の時間関係は、相対テンスとも絶対テンスとも異なる継起関係をなしている。その継起性に特徴づけられて、「タメニ」の表現は、話者の心的態度の表出を排除する自然発生的な因果性関係を優先させる性格が強く、従属節と主節を、継起的な発生という時間の制約から離れて内容的に分断することはできない。そのため、表現全体が一まとまりをなして、客体的に二つの出来事の間を、継起性に基づいて因果的にとらえて描写するという叙述的表現になりやすい。

これに対して、先行・後続という継起性にとらわれない主体的表現の「ノデ、カラ」は、二つの出来事に対する話者の時間的な操作を可能にする理由表現になるので、従属節と主節の時間関係は、相対テンスとしても絶対テンスとしても、規定することができ、組み合わせも自由である*²。特に、絶対テンスの場合には、従属節と主節のテンスを、発話時を基準時にして別々に規定しているので、節と節の間にフシのような継ぎ目ができて、話者の主体的な操作によって自由に、従属節と主節を因果的に結び付けることができるようになる。後に触れるが、話者の心的態度を示すモダリティ形式を用いることができるのも、まさに絶対テンスによる解釈が可能のために、話者が自由に従属節と主節とを結び付けることができるからである。

2.1.1. 従属節のテンスによる「タメニ」と「ノデ、カラ」の相違について

継起性に基づく「タメニ」と非継起性の「ノデ、カラ」の違いはまず、従属節のテンスのあり方に影響してくる。以下、従属節の述語に用いられる単語の品詞別に、その相違を見てみることにする。

*¹ 奥田靖雄1986に、「ノデ」の非継起性について、次のような言及がある。

つきそい文が「するので」を述語にするばあい、つきそい文といいおわり文とさしだされる、ふたつの動作は、必ずしも継起的である必要はない。空間的に、時間的にはなれている、ふたつの動作は、原因・結果の関係さえあれば、「するので」のかたちでむすびつけられる。(p. 15)

*² 「カラ」の絶対テンス使用の傾向は、「ノデ」より強い。その相違は、根拠の客観性と主観性に基づく、導き出し式か付け加え式かという理由づけの仕方の違いに由来するものであると考える。詳しくは、第三節を参照されたい。

Ⅰ) 従属節の述語が形容詞である場合：

従属節の述語が形容詞である〔タメニ〕文は、主節のテンスに対して、相対的に以前か、同時を表す。

8) 頭が痛かったため、会社を休んだ。

9) 今回の申し合わせは企業への強制力はないため、効力は未知数だが、……。 (現代語)

10) お金がないため、欲しいものが買えなかった。

形容詞は状態を表す。状態は持続的なものである。主節の出来事を起因させる従属節の状態が結果として働けば、例8)のように「タ」形をとって以前になり、状態の発生は以前であるが、持続として働けば、例9)10)のように「ル」形をとって同時を表すことになる。この場合の同時は、主節の出来事発生の間に従属節の状態がずっと続いているという意味で、原因となる状態の発生が主節の出来事より以前に存することには変わりがなく、継起性が守られていることになる。従って、過去形を使って結果の状態を表すか、現在形を使って持続の状態を表すかは、主節より以前に発生するという継起性の制約を受けているため、原因づけという構文的な働きは、あまり変わらないように思われる^{*1}。

従属節の述語が形容詞である〔ノデ、カラ〕文は、「タ」形を用いると、過去の出来事を述べ立てる表現になるので、相対テンスか、絶対テンスかの解釈が意味表出の区別にほとんど影響しない。この場合、継起性と非継起性の違いは顕著に表れてこない。

11) 頭が痛かったので／から、会社を休んだ。

12) あまり余裕がなかったので／から、その場で断った。

しかし、ル形を使うと、発話時現在の状態を表すこともできるので、相対テンスとしての過去の出来事ばかりでなく、絶対テンスとしての現在・未来の状態を表すこともできる。次の例を見られたい。

^{*1} 動きを表すものであれば、その間に先行・後続という継起性が生じるが、従属節も主節も、動きを表さない状態であれば、それを継起性の中に入れていいのか、という問題がある。しかし、因果性表現に現れる「同時」は、厳密に言って、二つの出来事が同時に存することを意味するのであって、決して二つの出来事が同時に発生することを意味するわけではない。詳しくは、第一章・第一節の2を参照されたい。

13)まだ、生活の根が浅いので／から、内容的にはひどく薄ぺらだった。 (現代語)

14)まだ、生活の根が浅いので／から、もっと現実に入り込んで、経験を積み重ね、内容を充実させてください。

15)お金がないので／から、欲しいものが買えなかった。

16)今日はあまりお金がないので／から、安い店に行きましょう。

例13)15)は、相対テンスなので、過去の状態を表していると考ええる。例14)16)は、従属節と主節との間に内容的な割れ目ができて、それぞれが絶対テンスによる規定を受けていると解釈する。従って、現在（発話時）の状態を理由にして、これからの行為に対する要請などをも表すことができるのである。現在の状態を表すと、相対テンスではなく、絶対テンスに解釈されるということは、従属節が「タ」形になれば、平叙文にしかなく、次のような依頼文は成立しなくなることからも、裏付けられている。

17)??まだ、生活の根が浅かったので／から、もっと現実に入り込んで、経験を積み重ね、内容を充実させてください。

18)??あまりお金がなかったので／から、安い店に行きましょう。

Ⅱ)従属節の述語が状態動詞や動作動詞の「テイル／テイタ」形である場合：

状態動詞や動作動詞の「テイル／テイタ」形を取る〔タメニ〕文は、動詞の性格やテンス・アスペクトの性格として、状態を表す形容詞に近い働きを呈しているので、同様の継起性の性格を有するものと考えられる。

19)労働組合から強い反対があったため、計画の見直しをぜざるを得なくなった。

20)仮定的な用法はテモのみにあるが、事実的な用法はケレドモ、ノニ、テモの三者に共通するため、特に事実的なテモとノニ、ケレドモとの違いが問題となるが、…。

21)雪子が「写真は大嫌い」と言っていたため、遺影は少ないが、…。 (日本経済新聞)

22)だって、犯人でもないのに、嘘ついているため、刑事が来る度に、あたし圧迫を感じなきゃならないんだもの。 (情事 p. 44)

それに対して、〔ノデ、カラ〕文は、過去の出来事に対して、相対テンスのあり方と、現在・未来の出来事に対して、相対テンス、絶対テンスのあり方と、形容詞と同じような用いられ方が観察される。

23) いずれも資産再評価にも大丈夫だったし、増配見込みもあったから／ので、一時の波乱は別として、今の値頃で買ってもまず利益する株である。(現代語)

24) しかし、法律にあることはすべて合法的だとする単純な頭は、殴られたとき殴り返すのは正当だと想像していたから／ので、自称土木監督のゲンコツを見回れると、急に抵抗の意識が破裂した。(現代語)

25) 昨日は雨が降っているので／から、運動会が中止になった。

26) やむなく急ブレーキを掛けることがありますので／から、ご注意ください。

27) 彼女も君に会いたいと言っているので／から、一度三人で、どこかで食事をしませんか。

例23)24)25)は、相対テンスの用例で、26)27)は、絶対テンスの用例と考える。

Ⅲ) 従属節の述語が動作動詞の「タ」形である場合：

従属節の述語に動作動詞の「タ」形を使うとき、継起性と非継起性によって、テンスの振る舞いに大きな違いが見られる。

従属節が動作動詞の「タ」形である〔タメニ〕文は、先行する従属節が動きの結果を表し、主節の出来事が、その結果を原因として受けとめて生じるという意味を表すことになる。因果関係は、出来事発生の先行・後続という継起性によって顕著に特徴づけられているのである。

28) 石器時代の集落。若者アトークは族長の女ラナに恋をしたために追放された。(TV)

動作動詞の「タ」形を取る〔ノデ、カラ〕文は、主節より以前に発生した出来事を理由にしているの、主節がすでに発生した事実を述べ立てる場合では、継起性⇔非継起性、それに基づく表現の叙述性⇔主張性、という対立が表現の形式には顕著に現れない。

29) 若者アトークは族長の女ラナに恋したので／から、追放された。

しかし、次の例30)31)が示すように、〔ノデ、カラ〕文は、過去の出来事を理由にして、これからの話者の動作や相手の動作実行への働きかけを表すこともできるが、〔タメニ〕文は、それができない。

30) 土曜ですし、仕事も終わったので／から／??ために、今日は早く帰りましょう。

31) 先方とすでに話を付けたので／から／??ために、安心して行きなさい。

IV) 従属節の述語が動作動詞の「ル」形である場合：

動作動詞の「ル」形を用いると、継起性に従う〔タメニ〕文と非継起性を特徴とする〔ノデ、カラ〕文とでは、テンスのあり方に著しい相違が見られる。

非継起性を特徴とする〔ノデ、カラ〕は、絶対テンスの未来としても、相対テンスの以後としても、使用することができるが、継起性を特徴とする〔タメニ〕は、出来事の先行・後続を守る必要があるので、動作動詞の「ル」形を基本的に用いることができない。

32) 昨日、お客さんが来るので／から、一日部屋の掃除をした。

33) その夜のパーティは、彼女が行くので／から、僕も行った。

34) もしかしたら予想できないことが起きるので／から、対策を考えておこう。

35) 明日大學の入試を受けるので／から、今猛勉強している。

例32)33)は、発話時を基準時にして、「お客さんがまだ来ていない」や「彼女が行かなかった」とも、主節のテンスを基準時にして、「お客さんが来た」や「彼女が行った」とも解釈できるが非継起性であることには変わりがない。また、絶対テンスとしか解釈できない34)35)では、発話時を基準時にして、従属節と主節が別々にテンス規定を受けるので、非継起的な関係であることは、一層明白になろう。このような継起性に反する用法は、〔タメニ〕を使うと、いずれも不自然な文になる*¹。

36) ??昨日、お客さんが来るため、一日部屋の掃除をした。

37) ??その夜のパーティは、彼女が行くため、僕も行った。

38) ??予想できないことが起きため、いろいろな対策を考えておこう。

39) ??明日大學の入試を受けるため、今猛勉強している。

このように、非継起性の〔ノデ、カラ〕の従属節は、主節の出来事より、または発話時より以後に発生する出来事であっても、主節を結果させる理由にすることができる。この時間の前後関係を無視する因果性表出はまさに、〔ノデ、カラ〕が、話者が二つの出来事を結び付ける

*¹ 例外として、動作動詞でも、繰り返しのよって習慣や性質を表したり、既定事実化を受けたりする場合は、継起性の制限を受けない。詳しくは、第一章を参照されたい。

主体的表現であるからこそ、できるのである*1。

2.1.2. 主節のテンスによる「タメニ」と「ノデ、カラ」の違いについて

継起性を特徴とする「タメニ」文は、従属節と主節を内容的に分断することを許さないので、話者が観察の立場に立って、客体的に二つの出来事の因果関係を表現する場合が多い。この継起性と、継起性に特徴づけられる表現内容の一まとまり性は、表現において、確定的な事実を描写する叙述性を要求し、主節の未来テンスの取り方にも制限を加えることになる。確定的な事実を表す叙述性は、過去・現在の出来事（動作の持続状態を含めて）の表出を要求し、ル形を使って現在・未来のことを表すときも、話者の決意などムード性を伴わないことを要求する。

40) 風邪をひいたために、会社を休んだ（休んでいる／休んでいた）。

41) 恋人と喧嘩したため、今日一日中、気分がすぐれない。

*1 望月1990では、理由と目的の項に、未来テンスをとる「カラ」の用例を挙げてこのように説明している。

○国家試験を受けるから、猛勉強している。

上の例の理由節は、猛勉強している、その目的を差し出している。目的は原因にはなり得ないが、動作の理由にはなり得る。むしろ、我々がある行動を行うのは、なにがしかの目的を実現するためである、と言える。

(p. 36)

目的が動機になって理由的に働くことができることについては、序章で述べた。主節が過去の意志的な動作か、現在の意志的な動作を表し、従属節が意志的な動作で、主節より以後に発生する事柄を表すことになると、動作目的を表す「タメニ」文と文法的条件が同じくなる。従って、上記の例を「タメニ」に置き換えてもよい。

○国家試験を受けるために、猛勉強している。

理由としての動機づけ「カラ」と、動作目的としての「タメニ」の相違は、主節の意志的な動作を結果させるか、動作の遂行を起こすために主節の意志的な動作をするか、という出来事発生の前後関係の違いにあると考えられる。その意味で、「カラ」を使う望月1990の例では、「国家試験を受ける」ことは、あくまでも「猛勉強する」ことを結果させる働きをしているもので、実現する目的とは異なると考える。

さらに、理由としての「カラ」は、動作性を無くして、従属節を（既定の事実としての？）出来事にする傾向があるが、これも、動作目的の「タメニ」との違いを表しているものと解釈される。

??合格するから、金を貯めよう。

○献金すると合格するから、金を貯めよう。

○合格するために、金を貯めよう。

「献金すると合格する」が既定の事実になるので、「カラ」を使って理由表現にすることができるのである。

42) こうして造られた山廃酒母は、元気で力強い働きをするため、味に巾と奥行きが出ます。

(山廃の広告)

43) 女子高校生がヤクザの組長になったために、麻薬争奪戦に巻き込まれる。(TV)

次のように、主節が意志動詞の未来テンスをとると、未来の動作を表すだけでなく、話者の決意など、ムード性を帯びやすい。そのため、継起性に基づく確定的な事実の叙述に反するので、表現が不自然になる。

44) *風邪をひいたために、明日会社を休む。

45) *明日天気がよくなるために、明後日必ずピクニックに行く。

例44)45)は、継起性に反していない。にもかかわらず、不自然に感じられるのは、話者の心的態度の表出が主節に織り込まれることによって、従属節と主節とが内容的に分断されることになり、そのために、継起性に特徴づけられ^る自然発生的な因果性表出、それに基づく確定的な出来事を表す叙述性に反することになるからであろう。主節が未来テンスであり、その上に心的態度を表すモダリティが加わると、出来事の先行・後続の継起性に従う客体的表現ではなく、話者が二つの出来事を因果的に結び付ける主体的表現に変わるのである。

それに対して、継起性にとらわれない主体的表現の「ノデ、カラ」文は、絶対テンスで表現することもできるので、未来テンスで、モダリティ形式をとると、相対テンスではなく、絶対テンスに解釈されることになり、自然な文を作ることができる。46)は推量、47)は願望、48)は決意、を表す用例である。

46) 明日天気がよくなるので／から、今晚出発して、明日の朝、きっと山頂に着く。

47) 円高で輸入品が割安になるので／から、外国製品の販売網を拡大して、もっと利益をあげたい。
(日本経済新聞)

48) 午後から天気がよくなるので／から、夕方に出発するつもりだ。(TV)

また、継起性に基づく表現内容のまとまり性、叙述性は、主題化による内容の分断を許さない要素としても、働く。原因表現の「タメニ」文には、「タメハ」、「タメニハ」という用

法がないのに対して*¹、〔カラ〕文には、従属節を主題化した〔カラハ〕、〔カラニハ〕の用法が見られる。*²

49)??風邪をひいたためには、休暇を取ってゆっくり休むべきである。

50)風邪をひいたからには、休暇を取ってゆっくり休むべきである。

以上述べた時間関係を表すテンスの特徴から分かるように、継起性に基づく〔タメニ〕文の原因表現は、人間の思惟活動に現れる出来事発生順の前因・後果的な論理性に一致しており、また、その継起性は、従属節と主節の内容的な分断を許さない表現内容のまとまり性を要求するため、確定的な出来事との因果関係を表す叙述的な表現になりやすい。それに対して、継起性にとらわれない〔ノデ、カラ〕文の理由表現は、話者が二つの出来事を因果的に結び付けるもので、従属節と主節を時間的に自由に組み合わせて表現することができる。特に絶対テンスをとるときには、理由を表す従属節と、話者の決意や願望、依頼などを表す主節との間に、「フシ」のような割れ目ができて、確定的な出来事ばかりでなく、未来の不確定な出来事も表すことができるのである。未来の出来事の表出はすでに、テンスの表出だけでなく、ムード的に話者の決意や願望、推量、依頼などのモダリティ範囲に繋がっていくことになるのである。

2.2. モダリティ形式の用いられ方に見られる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違について

継起性に特徴づけられる〔タメニ〕文は、自然発生順に前因・後果を表し、叙述性の高い表現であった。それに対して、非継起性の〔ノデ、カラ〕文は、話者が主体的に、二つの出来事を因果的に結び付けることを表し、話者の心的態度を表す形式を自由に入れる余地があった。絶対テンスを取ることができるかどうかの相違は、モダリティ形式の有無の違いに繋がるので

*¹ 動作目的表現には、〔タメニハ〕の用例がある。

○推薦と勤務評定ー。この二つを握られている以上、校長資格を取るためには、まず現在の校長のおぼえがよくなければならない。

*² 〔ノデ〕に、〔ノデハ〕の使い方がないのは、理由の客観性のためであると考えられる。詳しくは、〔ノデ〕と〔カラ〕の区別を論ずる第二節で取り上げることにする。

ある*¹。

2.2.1. 従属節の述語におけるモダリティ形式について

話者の心的態度を表すモダリティ形式が「タメニ」に接続できないことは、すでに今尾1991に指摘がある。

51) (私は) 通訳になりたいので (から／*ため)、一生懸命勉強しています。*²

また、基本的に話者の判断を表す助動詞の「ラシイ」や「ヨウダ」、形式名詞の「モノ」や「グライ」や「バカリ」、また、伝聞を表す「ソウダ」や「トイウ」、話者の考えを示す「～ト思ウ」などの「ル」形は、発話時を基準時にして絶対テンスとして規定される従属節と主節を、話者が因果的に結び付けることを表すため、「タメニ」には基本的に接続しない。次の例52)～58)は、正しい用法の例59)～65)を変えたものである。

52)??雨が降っているらしいため、運動会が中止になった。

53)??寝ようと思って次の間へ出ると、炬燵の臭いがぷんとした。かわやの帰りに、火が強すぎる様であるため、気をつけなくてはならないと妻に注意して、自分の部屋へ引き取

*¹ 山岡1995では、複文の各型のモダリティにおける違いを、「(1)内容指向的モダリティ、(2)行為指向的モダリティ、(3)聞き手指向的モダリティ」の三つに分け、「(1)は命題内容を述べ立てる際の内容に対する認識的態度、(2)は話し手または聞き手との間でどのような種類のコミュニケーション行為を果たそうとしているかいう態度、を表すもの」(p.311)と規定している。

*² 今尾1991には、「タメ」と「タメニ」の相違について、次のような指摘がある。

「タメ」はどのモダリティ形式とも共起しない。しかし、格助詞「ニ」を付加した「タメニ」は「タイ」と共起する。

もともと、外国へ行きたいために (から／ので／*ため)、スチュワーデスになる人が多いんですって。

(p.85)

しかし、この例に見られる「タメ」と「タメニ」の違いは、第一章の第四節で説明したように、連体修飾節になるときに現れる従属節と主節の結合の緊密度の差に由来するものと考えられる。つまり、これは、「[外国へ行きたいためにスチュワーデスになる] 人が多い」という構造に現れる結合の緊密度の問題で、主節に対して、従属節が表す原因の意味を明確にし、全体が連体修飾節に収める必要があるからであると解釈する。詳しくは、第一章第四節を参照されたい。

った。

54)??いや、あの女はアーノルドの遺品をカバンに詰めていた位であるため、こういう嫌疑を受けることを、先回りして考え、防御戦を張っておくことなどできなかったろう。

55)??子供はよくこの鈴の音で目を覚まして、あたりを見ると真っ暗だものであるため、急に背中で泣き出すことがある。

56)??栗餅屋は子供の時に見たばかりであるため、ちょっと様子が見たい。

57)??そんなときは、これからもそのうちに分かることもある。とりあえず符号を付けておこうというため、丸の内に十文字を引いて記しておいた。

58)??このままでは危ないと思うため、関わりを一切断ち切った。

まだ、具体的な調査が進んでいないが、判断を表す形式には、さらに「ニチガイナイ、ワケニハイカナイ」などの複合形式や、形式名詞の「ホド／ワケ／ハズ／コト+ダ」などという形式のものがある*1。これらの助動詞や形式名詞が〔タメニ〕に接続できないのは、原因表現の〔タメニ〕文は、継起的発生という特徴から解放して、時間的に絶対テンスとして従属節と主節を独立させて解釈することができなく、また表現は内容のまとまり性と既定事実表出の叙述性を要求する、という規則に違反するからであると考え。それに対して、〔ノデ、カラ〕文は、話者の心的態度を取り入れると、相対テンスから絶対テンスに解釈が変わることになり、いずれも自然な文になる。

59)雨が降っているらしいので／から、運動会が中止になった。

60)寝ようと思って次の間へ出ると、炬燵の臭いがぷんとした。かわやの帰りに、火が強すぎる様だから／なので、気をつけなくてはいけないと妻に注意して、自分の部屋へ引き取った。
(夢p. 59)

61)いや、あの女はアーノルドの遺品をカバンに詰めていた位だから／なので、こういう嫌疑を受けることを、先回りして考え、防御戦を張っておくことなどできなかったろう。
(現代語)

62)子供はよくこの鈴の音で目を覚まして、あたりを見ると真っ暗なものだから、急に背中で泣き出すことがある。
(夢p. 49)

63)栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちょっと様子が見たい。
(夢p. 46)

*1 前田1996では、「カモシレナイ」は〔タメ〕に接続できると指摘している。

○もしかしたら退院できるかもしれないため、念のために準備をしておいた。(p. 114)

64) そんなときは、これからもそのうちに分かるときもある。とりあえず符号を付けて

おこうというので／から、丸の内に十文字を引いて記しておいた。

65) このままでは危ないと思うので／から、関わりを一切断ち切った。

2.2.2. 主節の述語におけるモダリティ形式について

継起性に基づく客体的表現の〔タメニ〕文は、確定的な出来事のための因果関係を表現するため、叙述的な表現が多く、主節に話者の心的態度を表すモダリティ形式が用いられにくい。それに対して、主体的表現の〔ノデ、カラ〕文は、話者が二つの出来事を因果的に結び付ける表現であるので、基本的に主節にモダリティ形式を用いることに制限が見られない。67)は、「命令」を表し、69)は、「勧誘」を表している。

66) *交通が不便なため、タクシーを使ってください。 (命令)

67) 交通が不便なので／だから、タクシーを使ってください。

68) *ずいぶん汗をかいたため、先にお風呂にしましょう。 (勧め)

69) ずいぶん汗をかいたので／から、先にお風呂にしましょう。

命令や勧誘は、相手に対する働きかけ性が含まれるので、66)68)のように、〔タメニ〕は使うことができないが、67)69)のように〔ノデ、カラ〕に置き換えると、自然な表現になる。また、話者の「願望」や「決意」などを表すモダリティ形式も、同じ理由で、〔タメニ〕文の主節には用いることができず、〔ノデ、カラ〕なら、自然な文が作れる。

70) *喉が乾いたため、早く水が飲みたい。 (願望)

71) 喉が乾いたので／から、早く水が飲みたい。

72) *風邪がもう治ったため、明日必ず会社に行く。 (決意)

73) 風邪がもう治ったので／から、明日必ず会社に行く。

例70)と71)、72)と73)を比較して分かるように、主節に話者の心的態度が入ると、事実上、従属節と主節が内容的に分けられることになり、継起的に起きてくる確定的な出来事のための因果関係を表す〔タメニ〕文の特徴に反することになる。それに対して、テンス的にも内容的にも従属節と主節が分断可能な〔ノデ、カラ〕文は、理由の客観性と主観性の差があって、丁寧さや主張性の強弱などに違いがあるものの、基本的に主節におけるモダリティ形式の使用には制限がない。

また、同じ理由で、主節が話者の判断を表す例74)75)のような原因表現の場合も、[タメニ]が使えず、[ノデ、カラ]は使える。

74)結婚指輪をしているので／から(??ため)、彼女はミセスだ。(現代語)

75)その日の会議に出席したので／から(??ために)、彼はそのことを知っているはずだ。

ところが、例外がまったくないわけではない。すでに第一章で述べたことであるが、報道や広告の表現において、主節が丁寧な依頼を表す[タメニ]文の原因表現の例が見られている。

76)新幹線が三分ほど遅れたため、少々お待ちください。(電車のアナウンス)

77)小銭が不足しているため、釣り銭のないようにしてください。(店頭の看板)

例76)77)では、主節が聞き手に依頼を表しているが、報道や広告などに使われているため、原因を差し出して、聞き手に働きかけるという意味が感じられず、むしろ、原因と結果との間に、表現者の主体的判断を超えた継起的な、前因・後果的な関係が表されているように思う。そのため、主節に描き出される出来事は、話者からの要請としてではなく、不可抗力な原因によってもたらされる一種の「当然」な結果として受け止められることになる。このような因果性表出には、原因の発生には、話者の力ではどうにもならないという「やむなさ」が含まれて、聞き手も、それで納得がいくようになるのであろう。従って、ここでは、意味的には、「少々待っていただくことになる」、「お釣りを渡すことができない」と同じように理解され、継起性が介在しているように理解されることになると考えられる^{*1}。例76)77)の[タメ]を[ノデ、カラ]に置き換えると、話者が因果的に結び付ける表現になり、理由をもとにして、聞き手に行為を要請するという表現に変わり、聞き手への働きかけ性がぐんと強く感じられるようになる。原因が不可抗力にあるという感じも消えて、話者が責任を持って話しているというニュアンスが強くなる。

78)新幹線が三分ほど遅れたので／から、少々お待ちください。

79)小銭が不足しているので／から、釣り銭のないようにしてください。

^{*1} 報道や広告に[タメ]の使用によって表される原因の不可抗力、その不可抗力の原因によってもたらされる結果や依頼に対する「やむなさ」については、第一章の第三節で、従属節と主節が示す対置関係の角度から取り上げて論じた。

また、質問文の場合、質問のスコープとフォーカスに対する構文的な分析によって、次のような違いを指摘することができる。三上1972で指摘されている単式と複式、軟式と硬式の相違は、「問いかけ」文に顕著に現れている（分類の基準は仁田1991に従う）。

「問いかけ」文で問題になるのは、質問の焦点である。田窪1987では、「日本語では、原則的に文末の述語以外が自然な質問の焦点に来ることができない。そこで、『の』を付けて、焦点に来る要素を文末述語内に入れる必要がある」（p. 43）と指摘している。複文において、従属節と主節が内容的に、継起性に基づく一まとまり的なものか、非継起性による独立した二つの内容になるのか、として、その違いが現れてくることになる。

80) *雨が降ったため、運動会が中止になりましたか。

81) 雨が降ったため、運動会が中止になったのですか。

82) 雨が降っているので／から、運動会は中止になりますか。

83) 雨が降ったので／から、運動会は中止になったのですか。

80)が非文になるのは、主節だけに質問の焦点を置いたので、従属節と主節が内容的に分断されたからであろう。〔ノダ〕の形を取る81)は、80)より明らかに許容度が高くなる。つまり、客体的表現の〔タメニ〕文は、従属節と主節が内容的に一まとまりをなしているので、その因果関係の成立を問うために、表現全体を質問の中に納める必要がある。それに対して、〔ノデ、カラ〕文は、主節を質問の焦点にしても（82）、従属節と主節を全部、質問の中に納めても（83）、表現することができる^{*1}。

客体的表現の〔タメニ〕文は、継起性に基づいた表現内容のまとまり性が構文的な特徴になっているので、内容全体を対象にして、因果関係の成立を質問することができるが、従属節と主節を内容的に分断する質問の仕方はできない。それに対して、主体的表現の〔ノデ、カラ〕文は、話者が二つの出来事を因果的に結び付けるもので、従属節と主節がテンス的にも内容的にも分断された関係にある。従って、主節に焦点を置く表現、「ノダ」を付けて従属節に焦点を置く表現、内容全体にスコープを拡大して因果関係を問う表現、の三つが存在する。

^{*1} 従来、「ノダ」を付けて従属節に焦点を当てるという説明が多くなされているが、私は、「ノダ」の役割は事実の提起であり、提起された事実の部分を質問の範囲からははずすものだと考えている。はずされた内容から質問の重点は、自然に他へ移動するか、さもなければ、表現全体が質問のスコープの中に納められるか、ということになる。詳しくは、于日平1988を参照されたい。

ただし、上記の質問文に対して、次のことを付け加える必要がある。質問文で、「ノダ」を付けた場合でも、例84)85)のように、〔タメニ〕文は、主節にテンス未来を表す「ル」形を用いて、聞き手の行為の予定を聞くことができないということである。聞き手の行為の予定は、確定の事実ではないからであろう。そのため、主節が確定の事実を表すのなら、例86)のように、「ル」形でも表現の許容度が高くなるのである。

84)??(昨日) 雨が降ったために、(明日) ピクニックに行くのを止めるのですか。

85)??風邪をひいているために、明日は会社を休むのですか。

86)(昨日) 雨が降ったために、(明日) 運動会が中止になるのですか。

84)85)を不自然に感じるのは、主節が未来に起きる未定の出来事であるために、スコープの中に従属節も収めることができなくなって、質問の焦点が自然に、未来の出来事を表す主節に移動されることになるからである。そのため、従属節と主節の継起性が中断され、継起性に基づく自然発生的な因果性表出や確定的な出来事を表す表現の叙述性という〔タメニ〕の特徴に反することになる。それに対して、86)のように、「運動会が中止になるコト」が確定の事実になって、従属節も主節も「ノダ」文のスコープの中に収められているので、表現は許容されることになったのである。

3. 包摂関係に認められる〔タメニ〕と〔ノデ、カラ〕の相違

ここでは、客体的な因果関係を表す〔タメニ〕と主体的な因果関係を表す〔ノデ、カラ〕は、一文の中で相互にどんな包摂関係を形成しているか、仮定を表す条件文を原因節か理由節の中に包むことができるか、ということを検討してみる^{*1}。客体的表現と主体的表現の包摂関係の検討は、客体性と主体性の相違の存在を裏付けるためであり、仮定の条件文を原因節か理由節のどちらの中に包むかの検討は、継起性に基づく叙述性と非継起性の主張性の相違を検証するためである。

^{*1} 田窪1987では、南1974の従属節の階層性の議論に修正を加え、理由を表す〔カラ〕を、行動の理由と判断の根拠の二つに分けて、行動の理由を「B類」に、判断の根拠を「C類」にしておき、理由の〔ノデ〕も、「B類」と「C類」にまたがっていると分類している。田窪の分類に従えば、原因を表す〔テ、タメニ〕が「B類」になるであろう。そして、包摂関係については、南1974では、B類はC類に包まれることになっているが、同類の形態は相互に包み、包まれることができると分析している。

3.1. 客体的表現の「タメニ」と主体的表現の「ノデ、カラ」の包摂関係について

一文の中で、「タメニ」と「ノデ、カラ」が一緒に使われるとき、継起性に特徴づけられる「タメニ」は、客体的な性格が強く、命題内容を構成する内側に使用されやすいのに対して、非継起性の「ノデ、カラ」は、主体的な性格が強く、従属節と主節を対立させる外側に位置づけられやすい。つまり、主体的表現の「ノデ、カラ」は、客体的表現の「タメニ」が表す因果関係を内側に包み込んで、さらに外側の因果関係を構成することができるが、その逆は許されないのである^{*1}。

△：従属節の中に客体的表現の「タメニ」を包み込む場合：

次に挙げる例(87)～(90)ではいずれも、「タメニ」は、命題内容としての因果関係を構成し、外側の対置関係を表す「ノデ、カラ」従属節の中に収められているのである。従って、文全体は、話者が因果的に取り結ぶ理由表現である。(アンダラインの細い下線は、命題内容を構成するものを意味し、太い下線は、文の構成としての従属節と主節の関係を意味する。)

87)その他愛のなさはそのまま、真紀子の好色のところを表している。そして、浅井は真紀子が好色な女であるために、どうしても執着を断ち切ることができないので、二年来の関係を続けてきた。(情事p.21) (? ～ ので ⇒ ために ～)

88)法事があるために実家に帰るので、会社を早退した。(? ～ ので ⇒ ために ～)

89)ゲームセンターというのは、組織暴力団の資金源になってしまてね、コインの押し売り、借り貸しが横行しているんですが、風俗営業ではないために、法律で取り締まることができないから、犯罪があると分かっているけど、なかなか手が出せないんです。(? ～ から ⇒ ために ～)

90)その証言というのは、五月三十日に「ひかり110号」を利用した修学旅行生徒の一人が名古屋駅で売店へチョコレートを買に行き、その間に「ひかり110号」が発車してしまったため、次の「ひかり138号」に乗り、十九時五十六分に東京駅に到着した。団体旅行客のため、切符を持っていないから、改札口を通してもらいたいと、申し出たものがあるということだった。(女教師p.329) (? ～ から ⇒ ために ～)

87)～90)が示すように、「タメニ」と「ノデ、カラ」が一緒に使われると、客体的表現の

^{*1} 内側と外側とは、表現における包みと包まれるの關係に基づいて名付けたものである。客体的な性格の強いものは、包まれるの立場にあり、主体的な性格の強いものは、包みの立場にあると考える。

〔タメニ〕⇒主体的表現の〔ノデ、カラ〕という順序なら、自然な表現になり、主体的表現の〔ノデ、カラ〕⇒客体的表現の〔タメニ〕という順序は不自然に感じられるのである。集めた用例では、87)～90)のような例ばかりで（採集例は6、作例は4）、逆の例はない。上記の例文に示される包摂関係に従えば、次のような文構造の図式が得られる。

〔（法事があるために実家に帰る）ので、〕〔会社を早した。〕

B：主節の中に客体的表現の〔タメニ〕を包み込む場合：

実際の表現において、〔ノデ、カラ〕が先、〔タメニ〕が後という順序で現れることもあるが、意味解釈では、〔ノデ、カラ〕が従属節と主節を関係づける外側の関係、〔タメニ〕が節内の命題内容を構成する内側の関係を表す、という役割は変わらない。

91)ここで新幹線に乗り換えていくと、在来線より一時間も早くつくので、出発が遅れたために開けられた距離を十分に取り戻すことができる。

92)明日、証人喚問が行われるので、重要証人であるために命を狙われているチャルマースを警護してほしい。（TV）

例91)92)からも、次のような図示が得られよう。

〔ここで新幹線に乗り換えていくと、在来線より一時間も早くつくので、〕〔（出発が遅れたために開けられた）距離を十分に取り戻すことができる。〕

また、継起的起因を表す〔テ〕は、〔タメニ〕と同様な振る舞いをしているため、客体的表現に属し、同類同士の包摂関係においては、基本的に命題内容の構成に使われる。但し、〔テ〕は、本来出来事を並べる並立の機能（中止法）を基本としているので、並立の機能が強くなれば、〔ノデ、カラ〕の範囲を飛び出ることもある。次の93)は、継起的起因を表すもので、命題内容の構成になっているが、94)は、並立の性格が強く、話者が出来事を思い出しながら並べ立てる並立（中止法）の用例であろう。

93)法事があって実家に帰るので、会社を早退した。

94)友達に会って、ソレカラ、本屋によって、ソレカラ、池袋で新しい映画をやっているので、それを見て帰った。

次に、客体的な因果表現と主体的な因果表現は、互いに包摂関係を形成しているのに対して、同じ客体的表現の「テ」と「タメニ」、同じ主体的表現の「ノデ」と「カラ」は、相互にどのような包摂関係を作っているかを見てみる。例95)と96)は、「テ」と「タメニ」の用例で、97)と98)は、「ノデ」と「カラ」の用例である。

95)朝寝坊して会社に遅れたため、部長にさんざん叱られた。

96)会社に遅れたために部長にねちねちと言われて、とうとう会社を辞めてしまった。

97)会社を無断で休んだので、怒られたから、会社を辞めた。

98)美味しいから、食べ過ぎたので、お腹を壊してしまった。

95)の「テ」⇒「タメ」も、96)の「タメニ」⇒「テ」も、いずれも自然な表現であり、また、97)の「ノデ」⇒「カラ」も、98)の「カラ」⇒「ノデ」も、包摂関係上の制限はほとんど見られない。従って、同じ主体的表現同士の一客観的根拠から結論を導き出す「ノデ」か、結論を正当化するために理由を付け加える「カラ」かという相違^{*1}—包摂関係の決めるには、包摂関係を構成する外側の従属節と主節の因果関係づけの仕方によると言わなければならない。次の例では、外側の因果関係は、結論を正当化する付け加え式の「～自分が親代わりダカラ、～幸福な結婚をさせたい」、「～不審に思ったカラ、一応見回りに来たんです」という関係づけ方をしており、導き出し式の「両親がいないノデ、～」や「水音がしたノデ、～」は、その中に含まれているものである。

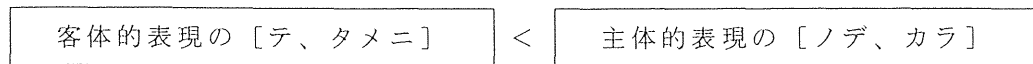
99)「よくあるケースと、同じでしたわ。自分の弟が、偶然、知り合った女性が好きになって、結婚したいと、いっている。両親がいないので、自分が親代わりだから、相手の女性のことを、調べて、幸福な結婚をさせたいと、おっしゃいましたわ。そして、この名刺をお出しになって、彼女が、本物の刑事かどうか、調べて欲しいと」 (富士p.57)

100)「やあ、夜中に水音がしたんでね、不審に思ったから、一応見回りに来たんですよ」
黒谷は突っ立ったまま言う。 (けものp.228)

従って、結論的に包摂関係においては、客体的表現と主体的表現の間に、構文的に客体から主体へと形成されていく傾向が顕著に見られるだけで、同じ客体的表現の「テ」と「タメニ」、

^{*1} 「ノデ」と「カラ」の相違については、第二節で詳しく述べる。

同じ主体的表現の〔ノデ〕と〔カラ〕の間には、包摂関係の傾向は見られない*¹。（＜は、包まれることを意味する。）



〔テ、タメニ、ノデ、カラ〕はそれぞれ因果関係を表出しているので、一文の中で、理論的に幾つでも用いることができるはずであるが、実際の表現では、因果関係を三つも四つも組み合わせることは、理解の混乱を招く恐れがある*²。従って、包摂関係において、〔客体的表現・命題内容の構成 ⇒ 主体的表現・従属節と主節の外側の対置関係〕の構成、という文構造は一番基本的で、客体から主体へと表現が形成されるのを構文的な特徴とすることができる考える。

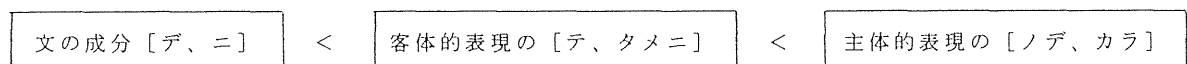
このように、一文の中で〔テ、タメニ〕と〔ノデ、カラ〕が一緒に使われるときに見られる包摂関係の特徴は、二つの出来事を結び付ける場合に、継起性に基づく客体的表現と非継起性の主体的表現の区別が存すること、客体的表現が内側にある命題内容の構成に、主体的表現が外側にある従属節と主節の結合に用いられるという使い分けが存することを示すと同時に、表現は、客体的なものから主体的なものへと段階的に形成されていくものであることをも示しているように思われる。

*¹ 客体的表現と主体的表現の他に、述語の格体制に置かれる文の成分で、原因を表すものがある。〔デ〕格や〔ニ〕格などが、それである。述語の格体制の中にある文の成分と、客体的表現と、主体的表現の三者は、包摂関係を形成しているようである。

○雨で、地面が濡れているため、とても滑りやすくなっている。

○余りの嬉しさに、涙が出てきたので、目の前は何も見えなくなった。

上記の三者を、構文的に因果関係を表す三つの層と考えれば、次のような包摂関係の図が得られる。



述語の格体制にある原因の文の成分、また、原因の文の成分と客体的表現、主体的表現の連続性と相違点については、今後の課題にしたい。

*² 私の調べた限りにおいて、6例は全部、因果関係の構成が二回で、しかも客体的表現と主体的表現の組み合わせである。客体的表現同士や因果関係の構成が三回以上の用例は見あたらない。

3.2. 仮定の条件文を包む原因節の「タメニ」と理由節の「ノデ、カラ」の相違について

継起性に基づく原因表現の「タメニ」文では、従属節がすでに発生した確定の事実を表し、非継起性の理由表現の「ノデ、カラ」文は、従属節が主節時に未発生 of 出来事でもよい、ということについては、すでに2で述べた。これは、仮定の条件文を包み込むときに現れる「タメニ」原因節と「ノデ、カラ」理由節の違いによっても裏付けられている。仮定の条件文は確定の事実を表すことができないので、「ノデ、カラ」理由節の中に包み込まれることができるが、「タメニ」原因節の中には包み込まれることはできない。

101) 「一口に言って、そういう性質だ。しかし、はっきり、それが利権といえるかどうか、法的な解釈となると微妙だがね。それに、あれくらいの大物になると、法の盲点を利用するから、単純には規定できないのだ。」 (けものp. 151)

102) それからすると、このような一流ホテルに部屋を借りておけば、ホテルではしばしば業務関係の会合があったり、人と合ったりするので、総裁がここに自動車を乗り付けても、すこしも不自然には見られない。 (けものp. 219)

集めた例6例は全部、「ノデ、カラ」理由節のものである。「タメニ」原因節の用例は見つからないし、上記の例を「タメニ」に置き換えると、いずれも不自然な文になってしまう。

103) ??それからすると、このような一流ホテルに部屋を借りておけば、ホテルではしばしば業務関係の会合があったり、人と会ったりするため、総裁がここに自動車を乗り付けても、すこしも不自然には見られない。

4. まとめ

以上に考察してきたことは、次のようにまとめることができる。

A: 客体的表現の「タメニ」文は、確定的な出来事が自然発生的に起きる先行・後続という継起性に基づいて、その間の因果関係を、話者が観察の立場に立ってとらえて表すもので、人間の思惟活動に見られる前因・後果的な推論式に叶う表現である。それに対して、主体的表現の「ノデ、カラ」は、話者が二つの出来事を因果的に結び付けて表出するので、継起性にとらわれず、確定的な出来事も未定的な出来事も、因果的に組み合わせて表すことができる。

B: 継起性に特徴づけられる「タメニ」文は、従属節と主節を内容的に分断することが許されないため、表現内容全体が一まとまりをなして確定的な出来事 of 間の因果関係を述べ立てることが多く、叙述的な表現になりやすい。それに対して、非継起性の「ノデ、カ

ラ」文は、従属節と主節のテンス関係を、相対テンスでも絶対テンスでも、規定することができるので、二つの出来事が分断された関係にある。特に、絶対テンスのときには、従属節では、未来の出来事を理由にすることができるばかりでなく、話者の判定や未来指向の話者の心的態度の表出を理由にすることもできる。

- C：それに関連して、原因と結果を内容的に分断できない「タメニ」文は、主節に、話者の判断を含めて、未来指向のモダリティ形式が用いられない。それに対して、理由と結果、理由と主張を内容的に分断できる「ノデ、カラ」は、理由を基にして、結論を述べ立てることができるばかりでなく、理由の提起を基にして、話者の希望や決意の表出、聞き手に対する勧めや命令など、いずれも表現することができる。
- D：継起性と非継起性の対立は、出来事の動作性を基にして著しく現れるものである。従って、従属節が状態を表す場合は、出来事の「前後」の性格が表面に示されず、「タメニ」文と「ノデ、カラ」文の区別が不明確になる。しかし、「タメニ」文の主節に話者の心的態度を表す形やモダリティ形式を用いることができないという違いが依然として存在しているため、「ノデ、カラ」文との間に、継起性と非継起性、表現の叙述性と主張性という対立が機能していると考えられる。また、同じ動作動詞の「タ」形を用いるときは、継起性に基づく「タメニ」文では、動作の結果が原因になることを表し、非継起性の「ノデ、カラ」文では、過去の出来事を理由にすることを表しているので、両者の間には客体的表現と主体的表現の違いが感じられることになろう。ただし、従属節が既定事実や動作の繰り返しを表す場合は、動作としてではなく状態として出来事を描き出しているため、継起性と非継起性の対立が消えることになる。
- E：新聞やニュース報道に、原因を表す「タメニ」文がよく使われるのは、報道者の主体性からできるだけ離れて、継起的な発生に基づいて因果関係を表出することや表現の叙述性が求められているためである。「ノデ、カラ」文を用いると、話者が二つの出来事を主体的に因果的に取り結ぶ主体的表現になるので、報道者の意見を述べることをできるだけ避けようとするためであろう。

第二節 因果性表現に現れる根拠の客観性と主観性

－「ノデ」と「カラ」の相違について－

理由を表す「ノデ」と「カラ」の使い分けについては、これまで数多くの研究がある。にもかかわらず、依然として同じく「事態の理由／原因」を表す場合の「ノデ」と「カラ」の意味の違いや、「ノデ」でも丁寧形なら「モダリティ的態度の根拠」を表すことができる^{*1}という事実に対して、まだ一貫した説明が出来ていないように思われる。本節は、「ノデ」と「カラ」のいずれもが先行・後続という継起性にとらわれない、同じく話者が二つの出来事を因果的に結び付ける性格を有することから、主体的な理由表現^{*2}と位置づけ、両者の間に見られる客観性と主観性の相違について、理由提起の仕方の相違や、主節に対する従属節の理由づけの仕方の相違などの角度から、検討を加えることにする。本節での分析を通して、理由提起の仕方と理由づけの仕方に現れる客観性と主観性の相違を明確にし、主節のモダリティ形式の有無だけを論拠にする従来の分析や結論の不備を指摘し、次の二点を主張したい。

- I. 主節に対する従属節の素材内容をいかに位置づけるかという理由提起の仕方において、
「ノデ」は、理由とする出来事を、話者の認識から独立した外界の客観的存在（事実）としてとらえて、提起するものであるのに対して、「カラ」は、理由とする出来事を、話者の認識の中³の存在としてとらえて、提起することを特徴としている。
- II. このような理由提起の仕方の違いによって、両者には、理由と結論の関係づけの仕方にも違いが出てくる。「ノデ」は、理由となる客観的な出来事がまず存在し、そこから主節の出来事が因果的に導き出される⁴という意味を表すのに対して、「カラ」は、結論として主節の出来事に対する話者の主張がまずあって、その主節の出来事を引き起こしたり主張を正当化させたりすると考えられる複数の事柄の中から、話者が認定する一つを選び出し、因果的に関係づけて付け加える⁵という意味を表している。

^{*1} 「事態の原因／理由」と「モダリティ的態度の根拠」という言い方は、岩崎1995が、「カラ」を、行動の理由を表すものと、判断の根拠を表すものに区別したという分析に基づいて、名付けたものである。

^{*2} 従来の研究では、客観性と主観性の判断基準を基本的にモダリティ形式の有無に置いて、分類するものが多く、時間の前後関係を、最初から判断の基準からはずしているように思われる。非継起性という性格から、「ノデ」も「カラ」も因果性の主体的表現と考え、理由提起の仕方や理由づけの仕方に現れる客観性と主観性とを厳格に区別しなければならないと思う。継起性と非継起性の区別については、第一節で詳しく論じた。

客観的な理由づけとは、理由を外界の客観的な存在として位置づけるという理由提起の仕方と、結論が対象化された理由から導き出されるという理由づけの仕方を指し、主観的な理由づけとは、理由を話者の認識に基づくものであるという理由提起の仕方と、結論を正当化させるために、理由を付け加えるという理由づけの仕方を指すと考えことにする。このように、客観性と主観性の意味するところを、理由提起の仕方と、理由と結論の関係づけの仕方とに明確に規定して、表現における意味の相違とモダリティ形式の有無を厳格に区別する。そして、モダリティ形式の有無は、理由提起の仕方や理由づけの仕方の相違によってもたらされた結果であると位置づけ、同じく「事態の理由」を表す〔ノデ〕と〔カラ〕の違いや、丁寧形なら〔ノデ〕でも「モダリティ的態度の根拠」を表すことができるといった現象を、理由提起と理由づけの仕方の相違によって説明し、主体的表現の〔ノデ〕と〔カラ〕の違いをダイナミックにとらえることができると考える。

以下、この二点について、詳しく検討していく。

1. 先行研究

〔ノデ〕と〔カラ〕の使い分けに対する本格的な研究は、永野1952に始まったといっていよいであろう。永野1952では、主節に用いられるモダリティ形式の相違や、倒置用法の有無、真正モダリティ形式「ダロウ」に接続が可能か否かなどを手がかりにして、〔ノデ〕と〔カラ〕の違いを明確にしようと試みている。そして、「後件に推量、見解、意志、命令、依頼、質問の表現が来るとき、『カラ』を用いるのが普通で、『ノデ』は、丁寧形による拡張した用法を除いて、上記の表現が主節に来ると、不適格になる」というような違いを指摘し、その差違に基づいて、「『カラ』は、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付ける言い方で、『ノデ』は、前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を超えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描

写する言い方である」(p.38)と説明している*¹。その後、[カラ]にも客観的な用法があり、[ノデ]にも主観的な使い方があるといった批判や修正が出ているが*²、「ノデ」を客観的表現、「カラ」を主観的表現であるとする結論は基本的に受け継がれているように思われる。永野1988でも、批判を受けて分類の基準にいくらか修正を加えたものの、主節に推量、見解、意志、命令、依頼、質問などが基本的に用いられないというモダリティ形式の使用の有無の特徴をもって、「ノデ」を「事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方」と規定する姿勢が貫かれている。

しかし、このような議論の展開にはすでに、表現の客観／主観が主節のモダリティ形式の使用に規定されるという前提が立てられているように思われる。このような前提に対しては、次の問題がある。つまり、客観と主観は、従属節を内容とする理由提起の仕方を言っているのか、理由と結論の結び付け方について言っているのか、それとも主節に使用されるモダリティ形式の有無について言っているのか、という問題である。ここでは、因果性の理由・結論を表す複文において、[ノデ]と[カラ]の相違を根本的に決めているのは、理由提起の仕方、理由と結論を結合させる理由づけの仕方であって、主節のモダリティ形式の有無は、異なった理由提起の仕方や理由づけの仕方によってもたらされる結果であると考ええる。このように考えれば、

*¹ 永野1952、1988では、「ありのまま」「主観を交えずに」という結論は、主節に推量、見解、意志、命令、依頼、質問の表現が来ないことを論拠にしているようである。出来事発生の時間の前後関係は、視野に入っていないように思われる。なお、南1993では、[ノデ]と[カラ]の相違について、文の階層性から次のように説明している。

～ノデの句の構造は主文の判断段階の構造の一部となって、それ全体に確定の性格をもたらす。その結果、主文は意志や命令の表現にはなりえない。それに対して、～カラの句の方は、それ自身がすでに判断段階の処理を経た構造になっているので、主文の判断段階の一部になることができない。したがって、主文の判断段階の構造に影響を及ぼさない。～カラそれ自身は確定の特性を持っていますが、主文の意志あるいは命令の表現との共起が可能である（ように見える）のは、そのためである。(p.232、233)

*² 記述の妥当性に関する論文は、山田1986、趙1988、花井1990、渡辺1992などが挙げられる。また、奥田1987では、永野の分析と異なって、[ノデ]を「対象的理論」、[カラ]を「私の理論」と分類している。

対象的理論：対象の理論に従いながら、二つの出来事の間客観的な関係の描写に向けられるもの、

私の理論：話し手が自分の立場から、「私」の理論に従いながら、二つの出来事の間関係を取り結んでいるもの。

しかし、このような「論理の立て方」の相違があるものの、対象的理論と客観性、私の理論と主観性が、どこが、どのように違うか、明確に示されていないように思われる。

客観性と主観性は、まず第一に、両者の理由提起の仕方と、理由づけの仕方の相違を意味するものであって、主節のモダリティ形式の有無を意味するものではないのである。言い換えれば、理由提起の仕方と理由づけの仕方に現れる客観／主観の相違によって、主節に接続できるモダリティ形式が制限されるのであって、主節のモダリティ形式の有無によって、理由提起の仕方や理由づけの仕方が決められているのではないということである。

第一節では、非継起性の〔ノデ、カラ〕は、継起性に基づく客体的表現の〔タメニ〕に対して、話者が二つの出来事を因果的に結び付ける主体的な表現であることを論じた。それを踏まえた上で、言語表現に現れる客観性と主観性の違いを分析するのであれば、理由づけになる従属節の内容を如何に提起するかという理由提起の仕方、理由づけの従属節と結論の主節がどのように結び付けられるかという理由づけの仕方を分析しなければならないであろう。モダリティ形式の有無だけに判断の基準を置くと、その結果を生み出す理由提起の仕方と理由づけの仕方の相違という話者の主体性が無視されることになり、話者の捉え方を示す流動的な客観性と主観性の認定も固定化されてしまうことになる。その結果、重なった用法の場合の〔ノデ〕と〔カラ〕はどんな違いがあるのか、なぜ丁寧形なら〔ノデ〕が命令表現とも共起できるのか、というような問題を解決することができなくなる^{*1}。

岩崎1995では、〔カラ〕の用法にはB類に属するものと、C類に属するものがあるという田窪1987の指摘を引用し、「『主観／客観の問題』にはまず、今まで漠然と原因・理由と言われてきたものを『事態の原因／理由』（客観的？－筆者－）を表すものと、『モダリティ的態度の根拠』（主観的？－筆者－）を表すものに区別する必要がある、カラはその両方を表すことができるが、ノデは基本的に前者しか表すことができない」（p.512）と紹介し、その区別は「主観／客観の問題」、特に「主観／客観の現象の問題」の改善になると評価した上で、「しかし、これでも丁寧形では、ノデでも『モダリティ的態度の根拠』を表すことができるようになる事実についての説明と、同じ『事態の原因・理由』を表す場合のノデとカラはどう違ってくるのかの問題は未解決のまま残される」（p.512）と論じている。また、岩崎1995は、「ニュアンスの違いこそあれ、ノデはほぼすべてカラに言い換えが可能である、つまりノデは可能であるが、カラは不可能であるという文はない」（p.509）とも述べているが、次のような例では、〔カラ〕を使うと、許容度がかなり下がるようである。

^{*1} 客観性と主観性について、永野1952、1988には、明確な定義が示されていない。論文の流れから見て、モダリティ形式の有無を判断の基準にしていると思われる。しかし、モダリティに対する定義も決して明確なものではないため、客観性と主観性の基準が曖昧にならざるを得ない。

1) 杏子はお湯に入っていると、ふと青葉のにおいがわずかばかりしてきたので／??から、
たのしくそれをかいだ。

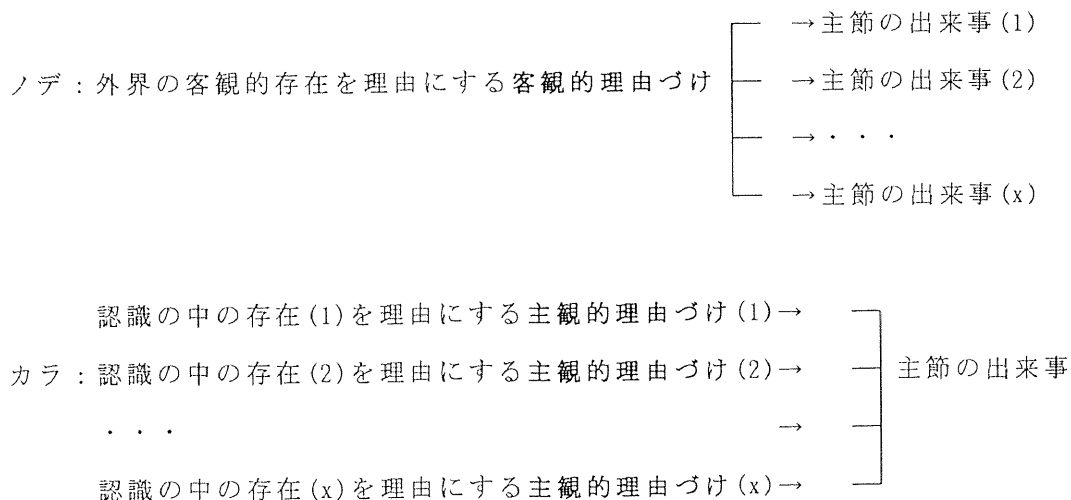
2) 私は、夜の勉強を始めようとして、なかなか気が乗らないまま、ウォークマンでパット・ベネターの歌を聴いていました。曲は彼女の大ヒット曲<シャドウズ・オブ・ザ・ナイト>に変わったところだったと思います。わたしはセクシーなパット・ベネターのファンなのです。

ドアが開いたので／??から、わたしはそっちに眼を向けました。眼をやらなくても俊彦だとわかっていました。
(不倫 p. 202)

2. [ノデ] と [カラ] の相違について

上では、理由を説明する場合の客観と主観との相違は、主節に接続できるモダリティ形式だけに限定するのではなく、理由提起の仕方、結論に対する理由づけの仕方の違いにあるとしなければならない。そして、客観とは、理由を表す従属節の出来事が話者の認識から独立する外界の客観的存在として位置づけられることを意味し、外界の客観的存在から主節の出来事を因果的に導き出すことを意味しなければならない。それに対して、主観とは、理由を表す従属節の出来事が話者の認識の中に存在するものとして位置づけられることを表し、主節の出来事を引き起こしたり、話者の主張を正当化させたりすると考えられる複数の事柄の中から、話者が認定する一つを選び出し、因果的に付け加えるということを意味すると述べた。主節におけるモダリティ形式の使用の相違は、このような理由提起の仕方、理由づけの仕方の違いに由来するものと考えられる。

異なる理由提起の仕方の違い、理由づけの仕方の違いによる表現の相違を図示すれば、次のようになる。



従属節に「ノデ」を接続すると、理由となる従属節の出来事は、話者の認識から離れて動かさない外界の客観的存在となり、話者の表現の選択は従属節から因果的に結論の主節を導き出すことになる。それに対して、従属節に「カラ」を接続すれば、理由となる従属節の出来事は、主節に示された帰結に対する話者の主張を因果的に関係づけたり（話者の判断、推量、見解、決意、願望など）、正当化させたり（聞き手に対する命令、要請、依頼など）するために付け加えられる話者の認識の中の存在となり、従属節と主節が内容的にもモダリティ的にも互いに独立しているため、主節に対して、どのように、どんなことを因果的に付け加えるかは、基本的に話者の主観の選択によることになる。ここで、「ノデ」を導き出し式の理由表現と呼び、「カラ」を付け加え式の理由表現と呼ぶ。導き出し式の理由表現は、外界の客観的存在がまず存在し、そこから帰結を導き出すものであり、付け加え式の理由表現は、逆に帰結や主張がまずあって、その帰結や主張を因果的に関係づけたり、正当化させたりするために、話者の認識の中にある理由を付け加えていくものである、ということになる^{*1}。

以下、理由提起の仕方、それに基づく理由づけの仕方という角度から、導き出し式の「ノデ」と付け加え式の「カラ」の相違を詳しく検討していく。

2.1. 理由提起の仕方、理由づけの仕方と主節のモダリティ形式について

「ノデ」と「カラ」の使い分けを明らかにするためには、まず従属節の出来事を外界の客観的存在として扱うか、話者の認識の中の存在として扱うかという理由提起の仕方の違い、そして、それに基づく理由づけの仕方の違いを明確にする必要がある。主節にどんなモダリティ形式が用いられるかは、その二つの性格によって決められているのである。

2.1.1. 理由提起の仕方について

理由提起の仕方は基本的には、話者の出来事に対する捉え方によるものであるが、内容的に外界の客観的存在として扱えるかどうか、構文的にそのような扱い方が適するかどうかという違いが存すると考えられる。まず、話者の心的態度しか表さない真正モダリティ形式が「ノデ」の従属節には接続できないことがよく指摘されているが、それはまさに、真正モダリティ形式は話者の心的態度しか表さないで、外界の客観的存在として位置づけることができないからであろう。

^{*1} 「カラ」は、理由に力点が置かれるので、主節に対して「単なる添え物にすぎない」という田淵1993の指摘がある。

3)これは難しいだろうから／＊ので、辞書を使ってもいい。

4)湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから／＊ので、この貼り札はおれのために特別に新調したのかもしれない。

外界の客観的存在として扱うことができない真正モダリティ形式を除けば、従属節の出来事は原則的に、外界の客観的存在として扱われるか、話者の認識の中の存在として扱われるか、両方が可能になる。その場合、理由提起の仕方は、形態上の相違が基本的に見られなくなり、話者の意識の問題となってくる。

仁田1989では、テンスの分化や否定の形を持つ形式を、客観的要素を含むものとして位置づけ、疑似モダリティ形式に分類している。それらの形式には、客観性の度合いの強弱の差があるが、基本的に〔ノデ〕に接続できることは、すでに今尾1991によっても指摘されている。

(用例はすべて、今尾1991 (p.79) からの引用。)

5)私は通訳になりたいから／ので、一生懸命勉強している。

6)雨が降りそうだから／なので、傘を持ってきた。

7)僕は体がしだいに悪くなったようだから／なので、最近は周期飲酒の原則に従っている。

8)それは課長の殺しの調査に出かけたらしいので／から、あるいは犯人の手に掛かったのかもしれないという心配もあります。

9)台風が来るそうだから／なので、明日の旅行を見合わせることにした。

10)台風が来るというから／ので、明日の旅行を見合わせることにした。

例5)～10)は、〔ノデ〕と〔カラ〕の両方が用いられ、客観的か、主観的かの区別は、文が積極的に示していない。このように考えれば、使い分けの基準は導き出し式か、付け加え式かという理由づけの仕方の相違に移り、その結果として、主節のモダリティ形式の有無にその差違が認められることになるのである。

ただし、外界の客観的存在として扱う可能性を完全に排除したものではないが、〔ノデ〕が使いにくいものが二つ指摘できるように思う。一つは、話者の判断を表す〔形式名詞+だ〕という形式の中で、外界の客観的存在として扱いにくいものである。次の例を見られたい。

11)いや、あの女はアーノルドの遺品をカバンにつめていた位だから／？なので、こういう嫌疑を受けることを、先回りして考え、防御線を張っておくことなどできなかったろう。

12) その間に速記を教えていただいて、先生も成績がいいからって褒めてくれたんですけど、お役所生活は堅苦しいし、あたしは性質が派手なもんですから／？なので、一年間で辞めちゃったんです。

(現代語p. 38, 39)

〔カラ〕文は、結論や主張を正当化するために、話者の認識の中にある理由を付け加えることを表す。11)12)が示すように、〔形式名詞ぐらい／もの＋だ〕の形が〔カラ〕による理由づけに用いられやすいのは、これらの形を取る従属節が明確に話者の判断を表しているので、外界の客観的存在としては扱われにくいからであろう。このように、〔形式名詞＋だ〕のような従属節には、「ハズ」、「バカリ」のように〔ノデ〕と〔カラ〕の両方が使えるもの、「ワケ」、「もの」のように〔カラ〕にしか付かないもの、「グライ」のように〔カラ〕に付きやすいもの、などの差が見られる。従って、同じ〔形式名詞＋だ〕の形でも、〔ノデ〕と〔カラ〕の接続の相違によって、両者の間に客観性と主観性の違いが観察されよう。

もう一つは、理由を表す従属節が、主格が欠けていて内容の完結性が弱いものである場合である。構文的に考えて、従属節の内容が不完全になれば、それだけ主節の内容に付け加えるという性格が強くなり、〔カラ〕が用いられやすくなるのではないかと考えられる。逆に言えば、それは、従属節の内容の完結性が高いほど、外界の客観的存在として位置づけられやすく、そこから主節のような結論を導き出す可能性が高くなるのである^{*1}。13)と15)では、〔ノデ〕を用いると、文が少し不自然になるが、14)と16)なら、両方とも自然な文が作れる。

13) そういう女だから／？なので、誘導されるか手厳しい調べに合えば、何を言い出すかわからない。

14) 彼女はそういう女なので／だから、誘導されるか手厳しい調べに合えば、何を言い出すかわからない。

15) 子供だから／？なので、許してください。

16) この子がまだ小さいので／から、許してください。

上記の二つは、疑似モダリティ形式と同様に、テンスの分化を持ち、否定することもできるため、いずれが用いられやすいかという傾向を示すものではあるが、従属節の内容を客観化する

^{*1} 漫画を5冊調べた。〔カラ〕の使用数が圧倒的に多い。理由から結論へという因果性表出より、帰結や行為に対する理由づけの場合が多いからであろう。また、従属節の内容が不完全になると、理由づけの仕方としては、付け加え的になりやすいという傾向が見られる。

ることができるかどうかという理由提起の仕方は、〔ノデ〕と〔カラ〕の使用に影響していることがあるのである。

2.1.2. 理由づけの仕方と主節のモダリティ形式との関わりについて

導き出し式の理由づけを表す〔ノデ〕は、外界の客観的存在とする出来事から因果的に主節の出来事を導き出すことを表しているため、因果関係の成立を確認する話者の判定を表す叙述的な表現が多く、相手への働きかけ性が強いほど、理由の客観性に対する依存から離れていき、表現が不自然に感じられるようになる。それに対して、付け加え式の理由づけを表す〔カラ〕は、因果関係にあると話者が認定すれば、主節の出来事を引き起こす理由として付け加えたり、話者の主張や相手への働きかけを因果的に正当化させたりするために用いることができる。話者の認識の中の存在を理由にして、帰結の主節に付け加えていくのであるから、基本的にどんな性格の形式でも使うことができる。例17)は命令表現で、18)は要求表現で、19)は勧誘表現である。

17) 時間がないから、早くしろ。 (命令)

18) 寒いから、窓を閉めてもらえませんか。 (要求)

19) せっかくだからですから、この辺で一杯やりませんか。 (勧め)

主節が働きかけ性の強い命令、依頼、勧めなどの表現になれば、外界の客観的存在を理由にする従属節から主節の話者の強い主張が導き出されるとは考えにくいので、付け加え式の主観的理由づけ方を表す〔カラ〕を用いるのが適切になる。ただ、話者の要請や願望、決意などを表す表現では、相手への働きかけ性が相対的に弱まっているため、外界の客観的存在から主節のような結果が導き出されるようにも、話者の主張を正当化するために理由として付け加えていくようにも、表現することができる(用例数は多くないが)。この場合、帰結を導き出す客観的な理由づけにするか、主張を正当化させるために付け加える主観的な理由づけにするかによって、意味表出に差が出てくる。つまり、〔ノデ〕を使えば、外界の客観的存在を理由にしているため、主節が表す要請や願望、決意などは、理由となる従属節からもたらされることを意味する表現になり、その分、話者の自己主張が弱められて、表現が軟らかく聞こえることになる。それに対して、〔カラ〕を使うと、話者の認定する理由を、話者の主張や相手への働きかけを正当化するために付け加えていくことを表す表現になり、そのため、話者の自己主張が強く感じられることになる。

20) 今度の電車は当駅止まりです。お乗りになることができませんから／ので、ご注意ください。
(丁寧な依頼)

21) 駆け込み乗車は危険ですから／ので、止めましょう。
(丁寧な呼びかけ)

22) 子供に水俣病を教えるのが難しいので／から、写真集を材料にしたい。
(願望)

23) 雨も止んでいるので／から、これからすぐ行きます。
(決意)

20)21)では、[カラ]を使えば、「乗りたい人」や「駆け込み乗車をしようとする乗客」に呼びかける話者にとって、理由づけになる従属節は、自分の主張（ここでは、相手に対する要請）を正当化するために付け加えているものになり、自分の認識の中にある理由になる。それに対して、[ノデ]を用いると、事実の提起をして、そこから要請や呼びかけを導き出している意味になり、この場合の要請や呼びかけは、如何にも話者の気持ちの訴えと直接に関わりなく、義務的に感じられることになる。同様なことは、22)23)についても言える。願望や決意の主張を強く出したければ、[カラ]を使うのが適切になり、願望や決意は理由からの帰結であるということを表したければ、[ノデ]を用いるのが適切になる。話者の主張を表す因果性表現に感じられる[ノデ]の使用による責任転嫁、[カラ]の使用による強い自己主張のニュアンスは、ほかでもなく、理由の外界の客観的存在化と理由の話者認識内の存在化によって生じてくるのである。

24) 電車が遅れたので、遅刻したのです。
(電車の遅れに遅刻の責任があり)

25) 気に入らないから、止めたのです。
(自己主張)

また、[ノデ]を使う要請や呼びかけの表現は、丁寧な形にする必要があるという指摘があるが（趙1988、永野1988など）、理由となる出来事を外界の客観的存在に据えることや、主節の結果が外界の客観的存在から導き出されていること、という特徴によって、話者の主張の強い表現と釣り合わず、儀礼的な丁寧な形を用いて、客観的な理由から来る要請であるという表現のバランスが取れるように求められているからであろう*¹。

このように考えれば、丁寧でない形を取る主節は、話者の主張を強く出すことになるため、主張を優先させる表現に変わり、従属節が付け加え的になることになることが分かる（主節が意志的な動作、動作の目的性が強くなるほど、[タメニ]の従属節が目的づけになりやすいと

*¹ 花井1990には、丁寧形以外の場合でも、[ノデ]を使うことがあるという指摘が見られる。

いう傾向と同様になる)。次の例では、〔ノデ〕を使うと不自然に感じるのはまさに、理由づけの仕方の変化に由来するものと考えられる。

26) ? やむなく急ブレーキをかけることもあるので、注意しろ。

27) ? タバコの吸い過ぎは体に悪いので、止めよう。

話者の推量や意見の述べ立てなどを表す文は、基本的に外界の客観的存在も話者の認識中の存在も、理由にして表現することができるが、導き出し式か付け加え式かという理由づけの仕方の相違は、次の例28)29)のように、表現のニュアンスの違いとしてはっきりと感じられている。

28) 軽い貧血なので／だから、二、三時間休めば治るでしょう。 (推量)

29) ゴルフはイギリス生まれのスポーツだが、あのハンディというのがセンチメンタルに見えるので／から、私は親しみを感ぜない。 (意見の陳述)

つまり、例28)29)が示すように、〔ノデ〕を使えば、推量や意見の陳述を示す主節の帰結が、外界の客観的存在としての従属節から因果的に導き出されたという意味を表すことになり、客観的な表現になる。〔カラ〕を用いると、主節に含まれる推量や意見の陳述という話者の主張があって、それを正当化させるために、従属節を因果的に付け加えていくという意味を表すことになり、そのために、表現が主観的になるのである。それが述べ立ての表現になると、〔ノデ〕と〔カラ〕の相違は、理由提起の仕方と、導き出し式か付け加え式かという理由づけの仕方に求めるしかないようになる。例30)31)32)のように、この場合、客観と主観の相違を感じさせているのは、話者の理由提起の仕方と理由づけの仕方という主体性の違いによると言わざるを得ない。

30) 山に近いので／から、昼間はとても寒い。

31) 快晴に恵まれたので／から、下界をよく見渡すことができた。

32) 先生も一緒に行くので／から、何も心配することはない。

「山に近いコト」や「快晴に恵まれたコト」、「先生が一緒に行くコト」といった外界の客観的存在とする出来事がある、その結果として、「昼間はとても寒いコト」や「下界をよく見渡すことができたコト」、「何も心配することがないコト」が因果的に導き出されるという意味を表すのが

〔ノデ〕である。それに対して、「昼間がとても寒いコト」や「下界をよく見渡すことができたコト」、「何も心配することがないコト」という話者の主張がまずあって、その理由を探せば、「山に近いコト」や「快晴に恵まれたコト」、「先生と一緒にいくコト」が挙げられるという意味を表すのが〔カラ〕である。述べ立ての表現では、理由から帰結を導き出すのか、帰結に対して話者の認定する理由を付け加えていくのかという理由づけの仕方の相違は、形の上では明確に区別することができない。両者の意味の違いは、従属節と主節をどのように関係づけるかによって示される。この意味で、〔ノデ〕文と〔カラ〕文の違いは、理由提起の仕方や理由づけの仕方の相違という話者の表現意図の相違にとどまって、表現ではニュアンスの違いとして現れてくるのである。

こうして、主節が「決意、見解、意志、命令、依頼、質問」になる場合は、主節が中心で、従属節が理由として付け加える性格が顕著になるが、願望や要請、推量や意見の陳述などを表す表現となると、（帰結に対する）話者の主張が弱いため、主張を正当化させるために〔カラ〕を付け加えるという機能が顕著でなくなり、導き出し式と付け加え式の相違が形の上では区別できなくなるのである。

2.2.理由を表さない〔カラ〕の用法について

白川1995では、「S1カラS2」文において、「S1」の内容を「どうして」で聞くことができない、理由を表さない〔カラ〕が存することを指摘している。

33)火曜日に返すから、ハンバーガーを買うお金、貸してくれよ。

ウインピー：ハンバーガーを買うお金、貸してくれよ。

パプインー：どうしてだい？

ウインピー：＊火曜日に返すから。 (pp. 189, 190)

白川1995では、こうした「どうして」で聞けない〔から〕文の特徴を、次のようにまとめている。

A：S2には、必ず命令、禁止、依頼、勧誘など聞き手に何らかの行為をするよう働きかける表現が来る、

B：S1には、聞き手に実行させること、i)可能にする情報（「お膳立て」用法、「段取り」用法）、もしくは、ii)促進する情報（「条件提示」用法）が来る。 (p. 199)

「どうして」で聞けない「カラ」文には、二つの出来事の間に推論的な（三段論法？）因果関連性が想像しにくいということは、白川の分析の通りである。しかし、かといって、理由を表していないと言えるかどうか、かなり疑問に思う。「カラ」は、話者の認識の中にある理由を表しているので、客観的な理由を聞くことができない場合もあるというのは、当然であるように思う。主節に、聞き手に対する何らかの働きかけ性が含まれる文における「カラ」節の理由づけは、話者がS1とS2の間に推論的な因果関連性が存すると判断するものではなく、聞き手にS2を実行させようと、その主張を正当化するために、話者の認識の中の存在を理由に選び当てて付け加えるものだからである。話者の意識においては、理由になっているはずである。言い換えれば、「カラ」は、話者の主張を正当化させるために、話者の認識の中に存在するものを理由にして因果的に付け加えていくという主観的な理由づけをしているからこそ、二つの出来事の間に推論的な因果関連性が認められなくても、理由づけをすることができるのである。つまり、例33)においては、「貸してくれ」という要求に対して、「どうして」で聞けるような「急用がある」や「お金が足りない」などが確かに理由になって働いているのであるが、「火曜日に返す」ことも、話者の要求達成のために話者の意識においては、理由として十分に働いているのである。

ところで、白川1995で取り上げた、理由を表さない「カラ」文は、「ノデ」に置き換えると非常に不自然になる。34)36)は、主節に命令形が使われているから、客観的表現の「ノデ」がダメという解釈が成り立つが、35)37)が示すように、主節末の形を丁寧な形に変えても、それほど許容度が上がらないように思われる。（用例は、白川1995のp. 190、191からの引用。）

34)すまないけど、書斎の机の上に辞書があるから／？ので、取ってきてくれ。

35)？すみませんが、書斎の机の上に辞書がありますので、取って来てください。

36)そこにソースがあるから／？ので、自由に取りってください。

37)？そこにソースがありますので、自由にお取りください。

つまり、外界の客観的存在を理由にする客観的な理由づけの「ノデ」は、従属節の出来事から因果的に主節の出来事を導き出すもので、意味的に推論的な因果関連性を通す必要があるであろう。その意味で、上の用法に現れた「ノデ」と「カラ」の使い分けには、導き出ししか付け加えかという理由づけの仕方の違いが存在することを裏付ける結果になっているということになる。

また、このような「カラ」文は、倒置文になると、一般的に「～カラダ」という因果関係判断の形を取ることができないという特徴が指摘できるように思う。これも、付け加え式が主観

的な理由づけを表すという特徴によるもので、導き出し式と付け加え式の理由づけの仕方の相違を表しているものと認められる。

38)先に始めてください。仕事を片付けてからすぐ行きますから。(??すぐ行くからです)

39)自分でやりなさい。お母さんは今忙しいですから。(??忙しいからです)

38)39)に展開されているのは、相手の動作を促すために付け加えられる話者の認識による理由づけである。「先に始めるコ」、「自分でやるコ」を勧めるために、「仕事を片付けてからすぐ行くコ」、「お母さんは今忙しいコ」を理由として付け加えて、相手に働きかけているのである。相手に行動を促す自分の行為を正当化させるための表現であろう。

〔ノデ〕にも倒置の用法があるという指摘があるが（渡辺1992など）、外界の客観的存在とする従属節から因果的に主節の出来事を導き出す理由づけの仕方は、表現として言い落としたり、不足だった内容を補ったりすることがあっても、決して主節に現れる話者の主張を正当化しようとして付け加えていくものではないと考える。ときには、こうした文にいいわけ的なニュアンスを感じ取ることがあるのはまさに、客観的な根拠を理由に責任転嫁や言い落とした内容に対する付け足し的な補いをしているためであろう。

40)どうもすみません。ちっとも知らなかったのです。

41)時間がなかったんです。実は国の両親が急に訪ねてきたので。

〔ノデ〕が内容的に補うという表現であることは、倒置の〔～ノデダ〕の言い方がないことから、支持される。これは、S1とS2をそれぞれ、文として独立させた上で、S2にS1を因果的に付け加えていくという構造の文を、〔ノデ〕がとれない証拠として解釈することができよう。

42)でも、あなたのおっしゃる時間には参れません。母や兄かが楽屋口まで迎えに参っているからです。(? 参っているのですの。) (現代語)

43)ヒトリズムやプロレタリア独裁の信奉者にとってこの書が面白くないことは当然であろう。それに対してこの書は鋭い一撃を食わせているからである。(? 食わせているのである。) (現代語)

2.3. 表現の焦点の当て方について

理由提起の仕方は情報の扱い方に繋がっていて、間接的に表現の焦点に影響しているように思われる。まず、外界の客観的存在を理由にして結論を導き出す〔ノデ〕文は、従属節が客観的な理由、主節が客観的な理由からの帰結を表すもので、焦点なしの叙述的表現になりやすい。

44) 頭が痛いので、会社を休んだ。

〔ノデ〕文に焦点が置かれる場合、理由の従属節に表現の焦点を置かれることはなく、基本的に帰結として導き出される主節に置かれることになる^{*1}。しかし、このような焦点の解釈はあくまでも、理由から導き出される帰結という理解を前提とするもので、焦点と言えるかどうかはかなり疑問に思われる。後に述べるように、これは、主節に「ノダ」を付けるときの焦点の解釈と非常に異なっている。（〔〕は焦点になる部分を指す。）

45) 頭が痛いので、〔会社を休んだ。〕

〔ノデ〕の従属節に焦点が置かれにくいのは、従属節に疑問詞を入れることができないことから、裏付けることができる。

46) ? 〔誰が来るので〕、慌てていますか？

47) ? 〔何が欲しいので〕、買い物に行きますか？

もし、従属節に焦点を置きたければ、主節に「ノダ」を付けて、スコープを文全体に広げる必要がある。この場合、解釈は、二通りになる。一つは、従属節に焦点を当てるもので、もう一つは、文全体が「ノダ」の中に埋め込まれるものである^{*2}。48)は、従属節に焦点が置かれた用例で、49)は、文全体が「ノダ」の中に収められる用例である。

48) 〔頭が痛いので〕、会社を休んだのだ。

^{*1} 会話のとき、イントネーションの助けを借りて、「〔頭が痛いので〕会社を休んだ」のように、従属節に表現焦点が置かれる用法も考えられるが、「ノダ」を付けないと、そのような解釈はやはり、少し不自然に感じる。

^{*2} 文全体に対する性格の変更は、「ノダ」の接続によって因果性表出から説明文に変わることを意味する。ここでは、因果性表現と説明の表現の違いには、深入りしないことにする。なお、〔ノダ〕文については、田野村1990に詳しい研究成果が述べられている。

49) [頭が痛いので、会社を休んだ] のだ。

[ノデ] の従属節に焦点が置かれるとき、主節に「ノダ」を接続する必要があるということは、例46)47)の主節に「ノダ」を付けると、表現が自然になるということからも支持されている。

50) [誰が来るので]、慌てているのですか。

51) [何が欲しいので]、買い物に行くのですか。

このように、焦点の角度から言えば、[ノデ] 文は基本的に、主節に表現の焦点を置く表現であると言えよう。従属節に焦点を置くときは、主節に「ノダ」を接続して、文全体にスコープを拡大しなければならない。それに対して、[カラ] 文は、話者の認識にある因果性を表すものであるため、[ノデ] 文のような叙述的な表現はなく、必ずどこかに焦点が置かれる表現になりやすい。[カラ] 文には、主節に焦点が置かれる用法と、主節に「ノダ」を接続して従属節に焦点を当てる用法の他に、従属節に[ノダカラ]を接続して焦点を当てるという用法も見られる。

A：表現の焦点を主節に当てる場合

働きかけ性の強い表現も含めて、主節の出来事に対する話者の主張を表すのが[カラ] 文の特徴であるので、主節に焦点を置くのは、付け加え式の[カラ] の最も一般的な用法である。この場合、従属節の出来事は、因果的に付け加えられる話者の意識の中にある主観的な理由づけを表しているため、それに焦点を置くことはない。

52) 午後から雨が降るから、[傘を持って行きなさい。]

53) 雪が凍っているから、[道が滑りやすいよ。]

B：主節に「ノダ」を付けて表現の焦点を従属節にシフトさせる場合

述べて表現の[カラ] 文は、主節に[ノダ]を接続すれば、従属節に焦点を当てることが

できる。「ノダ」の接続によって、焦点は主節からはずされ、従属節に移動されるのである^{*1}。この場合の「カラ」文は、主節に「ノダ」を接続した「ノデ」文と同様に、文全体を「ノダ」のスコープの中に収める表現と、従属節に焦点が置かれる表現との二つがある、「カラ」と「ノデ」の区別は、依然として話者の認識の中の存在であるか、外界の客観的な存在であるか、というところにあるようである。54)56)は、文全体にスコープを広げて、説明文の内容の中に収めると解釈される場合であり、55)57)は、従属節に焦点を置くと解釈される場合である。

54) [子供がいるから、油っこいものが多い] のです。

55) [子供がいるから]、油っこいものが多いのです。

56) [ほかにすでに先約があるから、断った] のだ。

57) [ほかにすでに先約があるから]、断ったのだ。

C：従属節に「ノダカラ」を接続する場合

話者の認識の中の存在ではあるが、聞き手も知っているように説明的に内容を提起して、さらにそれを理由にするときもある^{*2}。「ノダ」を接続した従属節は、すでに聞き手も知っているように説明の内容として扱われている。その上で、「カラ」を接続して、話者の認識の中の

^{*1} 従来の研究では、従属節に焦点を当てることができるのは、「ノダ」の接続によってスコープが拡大され、従属節がその中に収められているからだと説明するのが多い。于日平1988では、「ノダ」の機能は、話者が認定する事実を提出するものであると主張している。話者の認定する事実は、焦点になりえず、従って、焦点は主節から外され、従属節に移動されることになったのである。詳しくは、于日平1988を参照されたい。

^{*2} 佐治1991では、次のような例をあげて、こう説明している。(p. 229)

ところで、1月までに日本語を勉強しながら交流し合いたいために、ときどき日本学生寮に行った。「胡さん、もうすぐ帰国なさいますから、毎晩来てください」と、Aさんは二ヶ月前にちゃんと約束してくれたけど・・・。(留学生の作文)

上例の「胡さん、もうすぐ帰国なさいますから毎晩来てください」の中の「帰国なさいます」は、話し手の責任における判断・主張を含んでいる。「あなたは帰られます」というような言い方は、相手にそのことを求めているか、予言でもする時にしか使えない。ここは、話し手のAさんが、当の胡さんから聞いて「胡さんの帰国される」ことを知っているのだから、そのことの判断は話し手の責任以外の所で成り立っているものである。その事情を表すために「帰国なさるのですから」という形式が必要になるのである。

「帰国なさる」が判断であるかどうかは、議論を要するが、聞き手も知っている事柄として提起し、さらにそれを理由にする場合は、「ノダカラ」を接続する必要があると理解することができよう。

存在として主節に理由づけるのであるから、従属節の内容は、かなり客観的な事実に近い。つまり、内容は双方の了解済みの事実に近いが、理由づけの仕方は「付け加え式」のものである。話者の認識の中にある内容を、聞き手を含めての双方の了解済みの内容として扱うことができるが、外界の客観的存在として位置づけられた内容は、双方の了解済みの内容に変更することができない。従って、[ノデ]には「ノダ」は付かない^{*1}。

58) しかし、ホフマンと異なって、ブラウンは自ら日本に在留し、しかも、神奈川県や横浜に居住していたのであるから、江戸語に日常接する機会を多く持っていた。

59) 「子供じゃないんですから、もうちょっとちゃんとやってください。こんなことができないなんて信じられないわ」。

例58)59)において、「神奈川県や横浜に居住していたコト」や「子供じゃないコト」に[ノダカラ]を接続して、従属節の内容を、話者側だけでなく聞き手も知っているように双方の了解済みの説明の内容として扱う。そして、それを理由にすることによって、相手に対する話者の主張を正当化するニュアンスを一層強く打ち出そうとしているのである。つまり、相手に行動を促すためには、話者の意識の中にある内容として扱い、理由として提起するよりも、双方の了解済みの内容として扱い、理由として提起する方が、内容の客観性が増すだけに、聞き手に対する働きかけ性が一層強くなるのである。59)と比較すれば、次の例60)は明らかに、話者の認識の中にある内容を理由として付け加えるという内容の扱い方をしており、両者の差ははっきりと感じ取られるのであろう。

60) 「子供じゃないから、もうちょっとちゃんとやってください。こんなことができないなんて信じられないわ。

「ノダカラ」文には、主節が単なる事実の述べ立てでは不自然になり、話者の判断や決意、相手への勧め、依頼、要求、命令、質問の形を取るものが多い（白川1995など）のは、そのた

^{*1} 話者の認識の中の内容を、双方の了解済みの内容に変更することができるが、外界の客観的存在は、双方の了解済みの内容に変更することができないことは、主観→客観のような[接続助詞+接続詞]という理由づけの仕方の変更のみが存することからも、支持されることになる。

○頭が痛いから、それで、会社を休んだ。

？頭が痛いので、だから、会社を休んだ。

めであろう。

しかし、双方の了解済みの内容として扱うことは、外界の客観的存在として位置づけることとは異なるので、付け加え式の主観的理由づけの仕方を表す「カラ」の性格を変えることはない。というよりも、上記の分析で分かるように、従属節の内容を聞き手も知っているような説明的な内容にすることによって、聞き手への話者の働きかけを正当化させる機能をさらに強く出して、主観的な理由を付け加えるという性格を一層際立たせることになるのである。

3. まとめ

以上考察してきたことは、次のようにまとめることができる。

- A：客観的な理由表現の「ノデ」文の特徴は、理由を外界の客観的存在として提起し、外界の客観的存在とする理由から結論が導き出されるという理由づけの仕方にある。これに対して、主観的な理由表現の「カラ」文は、理由を話者の認識の中の存在にとどめ、理由と帰結の結びつきとして、話者の主張や結論に理由を付け加えていくという理由づけの仕方を特徴としている。
- B：理由の従属節から帰結の主節を因果的に導き出すという導き出し式の「ノデ」従属節は、結果的に話者の命令や依頼などの主張を表す主節と共起しにくいことになる。これに対して、付け加え式の「カラ」文は、結論や話者の主張を正当化するために、従属節を理由として主節に因果的に付け加えるという話者の主観的な理由づけをするものである。そのため、「カラ」従属節は、一般的な結論から話者の強い主張まで、すべての主節と共起することができる。
- C：導き出し式の「ノデ」文と付け加え式の「カラ」文は表現しうる範囲の中で、両者の用法が重なる場合がある。例えば、主節が丁寧な要請なら、「ノデ」も使うことができ、また、「ノデ」と「カラ」が置き換える述べ立て表現では、その使い分けも説明しなければならない。それらは、モダリティ形式の有無だけでは、いずれも解釈が不可能であり、理由提起の仕方、理由づけの仕方の相違に解決策を求めなければならない。
- D：導き出し式の「ノデ」は、従属節の出来事を外界の客観的存在に位置づけることができるかどうか、外界の客観的存在から帰結としての主節を因果的に導き出すことができるかどうか、という制限を受け、その範囲の中で表現の幅を持つことになる。これに対して、付け加え式の「カラ」は、理由の従属節と話者の主張や結論を表す主節との結合を、話者が主観的に認識する因果性によって行うため、付け加える従属節と主張する主節の間に、一切制限を受けることはない。従って、主節が丁寧な要請なら「ノデ」も使えるのは、外界の客観的存在から帰結としてそれを導き出すことができることを意味し、導

き出し式が表現しうる範囲の中にあることを意味すると考えられる。また、述べ立て表現における〔ノデ〕文と〔カラ〕文の相違は、外界の客観的存在から帰結を導き出すか、話者の結論や主張に話者の認識の中にある理由を付け加えていくか、という理由提起の仕方、理由づけの仕方の違いによると解釈できる。

E：結論的に〔ノデ〕文と〔カラ〕文の違いはすべて、理由提起の仕方と、理由から帰結を導き出すか結論や話者の主張に理由を付け加えるかという理由づけの仕方の相違に起因すると考えられる。この意味で、モダリティ形式使用の有無は、理由提起の仕方と理由づけの仕方の相違による結果の現れであると言えよう。

第三節 因果性の明示的表出と非明示的表出の相違について

ー [タメニ] と [テ] を中心にー

同じ因果関係の意味を表すにも、形態的に原因と結果を明確に示す表現と、二つの出来事の間
に存する因果関係が意味的な関連性によって表される表現とがある。[タメニ]は前者で、
[テ]は後者である。[テ]と[タメニ]とは、いずれも継起性をもとに、因果性を表す点で
共通している。従って、第一節で述べた[タメニ]の文法的特徴は、基本的に[テ]にも当て
はまる。しかし、一方、[テ]と[タメニ]は、因果性を形態的に明示するかどうかで異なっ
ており、[タメニ]が形態上、明示的であるのに対して、[テ]は、非明示的である。従来、
[テ]と[タメニ]は全く別に扱われているが、本節では、両者の共通性（継起性）と相違点
（明示的と非明示的）に注目し、主に後者の相違点について検討を加え、形態の機能の連続性
と表現の関係についても、考察していく。

1. [テ]の文法的機能について

[テ]の用法については、これまで多くの研究が行われている（成田1983、高橋1983、仁田
1995など）。ここでは仁田1995を取り上げて、因果性表現としての[テ]の位置づけを見るこ
とにする。

仁田1995では、二つの出来事が並ぶ時間の前後関係を手がかりに、[テ]の用法を次のよう
に図示している（用例はすべて、仁田1995からの引用。表はp.91にあり、用例はp.89にある）。

タイプ		シテ節の表す意味	生起時関係	主体
付帯状態		主たる事象の実現の仕方	同時	同一
継 起	時間的継起	時間的先行関係	継起	同一（異種）
	起因的継起	起因的事象	継起	同一（異種）
並列		共存並列する事象	同時（異時）	同一／異種

1) 痩せた男は腰を浮かしてドアを見つめていた。

2) 何百才かもしれないほどの高齢の、もの凄いの顔をした不思議な老婆が、～、黒いマント
を羽織ってじっと、こちらを見つめておったではありませんか。

3) 「よろしい、やがて執行です。」

娘はにこやかに言って、忙しそうに彼の前から立ち去った。

- 4) 手紙は、いかにも無造作にそこに捨ておかれた形だった。何気なくとりあげてひらいた。
- 5) 倉庫番が、背の高い男につつかれて喚いた。
- 6) 知子はひきこんでいた風がこじれて、発熱した。
- 7) 上の子が幼稚園に入って、下の娘がやっと歩き出した頃だった。
- 8) 巡航船には船員のほかに警乗兵が二名乗っていて、船首には一応機関銃が据えてある。

1)2)が<付帯状態>、3)4)が<時間的継起>、5)6)が<起因的継起>、7)8)が<並列>の例である。仁田1995が指摘しているように、各タイプごとに、プロトタイプとしての用法がある一方、文法的条件が変わるに従って、他の用法との繋がりを示す移行途中の用法も存在し、用法と用法が連続していて、その間に境界線を引くことは、必ずしも容易なことではない^{*1}。ここでは、付帯状態と並列も、連続性を持つものと見て考慮に入れながら、主に継起性を特徴とする「時間的継起」と「起因的継起」について、明示的と非明示的の相違と関連させながら、[タメニ]との比較を試みることにする。

2. 因果性表現に現れる[テ]と[タメニ]の相違について

[タメニ]文と[テ]文の相違は、構文的なものと表現的なものの二つに分けることができる。構文的には、両者とも継起性に基づく因果性表現であるため、主節に対して、従属節が以前に起きた状態か動作の結果状態を表す必要があり、従属節も主節も、確定した出来事を表さなければならないことを、第一章で述べた。しかし、明示的な[タメニ]は、意志動詞の[タ／テイル／テイタ]に接続して、積極的に動作の結果状態を作りだし、主節の原因にすることができるのに対して、非明示的な[テ]は、動作を結果状態にして原因を表すことができない。また、表現的には、[タメニ]は、因果性を表面に押し出して従属節と主節の役割の明晰化を重視する表現であるのに対して、[テ]は、継起性を表面に押し出して、因果関係は意味的関連性に頼る、という違いが存し、その相違は、直接に表現に影響することになる。

2.1. 原因になる従属節が状態と動作の結果状態を表す場合について

[テ]が因果性を表すことができるのは、出来事発生の先行・後続という継起性と、二つの出来事の間に因果性が認められるという意味的関連性が、認められる場合である。この意味的

^{*1} 仁田1995では、用法の連続性に働く文法的条件について、主体の異同、事象の性格（動きか状態か）時間の関係などの角度から、非常に細かく分類し、考察を加えている。ここでは、直接に本論文と関係がない所は、省略する。

関連性は、従属節が基本的に状態を表して、起因的継起として主節の出来事に先行するという構文の場合に現れてくる。そのため、〔テ〕の従属節は、形容詞や状態動詞、可能動詞、結果状態になる非意志動詞を用いる場合が多く、動作の結果状態を示さない意志動詞は使いにくい。それに対して、〔タメニ〕は、形態的に因果関係を明確に示すことができるため、結果を示さない意志動詞をも、積極的に動作の結果状態にすることができる。従って、因果性表出において、語彙レベルの制限を受けることはない。次に挙げる例の中で、それぞれ9)10)は形容詞、11)～14)は状態動詞、15)16)は可能動詞、17)～20)は結果状態になる非意志動詞の用法である。そして、21)22)は結果状態を表せない意志動詞の用例である。

9)金がなくて、行かれない。

10)金がないために、行かれない。

11)午後から大事な会議があって、勉強会には出られなかった。

12)午後から大事な会議があったために、勉強会には出られなかった。

13)西瓜を食べ過ぎて、お腹を壊してしまった。

14)西瓜を食べ過ぎたために、お腹を壊してしまった。

15)英語が上手に話せなくて、恥をかいた。

16)英語が上手に話せなかったために、恥をかいた。

17)風邪をひいて、会社を休んでいる。

18)風邪をひいたために、会社を休んでいる。

19)彼は、上司の不正に気づいて、巻き込まれるのを恐れて、辞表を出した。

20)彼は、上司の不正に気づいたために、巻き込まれるのを恐れて、辞表を出した。

21)彼が先に行って、私は後で行った。 (○時間的継起／？起因的継起)

22)彼が先に行ったために、私は後で行った。 (原因表現)

それでは、なぜ〔テ〕文は、従属節に結果状態を示さない意志動詞が用いられると、起因的継起を表しにくくなるのか。このような時間的継起から起因的継起に変わる意味的関連性は、語用論的ではなく、構文的にどんな特徴があるのであろうか。

第一章の第一節では、継起性に基づく因果性表現は、前因・後果的な関係を表し、従属節が意志的な動作である場合は、それを状態か結果状態にしなければならないと述べた。そして、〔タメニ〕文では、従属節の述語が意志動詞であるとき、相対テンスとして〔タ／テイル／テイタ〕形の使用が義務づけられていると指摘した。〔テ〕文は、従属節も主節も述語が意志動詞である場合、時間的継起か並立かの意味を表し、起因的継起を表すことができなくなる。つ

まり、原因を表す従属節は、意志的な動作ではなく、状態か結果状態かでなければ、従属節と主節の間に因果関係が読みとれにくいのである。

この従属節の状態化に様々な要素が関わっているが、それらを語彙的なものと構文的なものに二分することができる。まず、語彙的なものを観察する。

例9)～20)のように、従属節の述語が形容詞や状態動詞であれば、状態性を明らかに示しているので、問題はないが、「風邪をひく」や「上司の不正に気づく」など、非意志動詞でも、動作主が主体的にコントロールできる事柄ではないため、すでに動作性がなく、結果状態を作り出す働きをしているので、原因を表すことができる。これらの用法では、[テ]と[タメニ]とは、基本的に置き換えられる。ところが、意志動詞の多くは、人間の意志的に行う動作を示すが、結果状態は残らない*¹。結果状態が残らなければ、例えば、23)24)のように、起因的継起の例は作りにくい。これは、25)26)のように、従属節の意志動詞が「テイテ」の形を取ったとしても、同じように思われる。

23) 太郎は、お酒をたくさん飲んで、すぐ寝た。 (? 起因的継起)

24) 次郎が太郎の手紙を読んで、太郎は、次郎を怒っている。 (? 起因的継起)

25) 太郎は、お酒をたくさん飲んでいて、すぐ寝た。 (? 起因的継起)

26) 次郎が太郎の手紙を読んでいて、太郎は、次郎を怒っている。 (? 起因的継起)

このように、[テ]は、[タメニ]と異なって、意志的な動作を積極的に結果状態に変える手段を持たないため、従属節も主節も述語が意志的な動作動詞である場合には、時間的継起か並立の読みが優先して、起因的継起の意味に解釈されにくくなるのである。

また、構文的には、意志動詞の意志性を消すことによって、状態性を獲得することがある。ここでは、ヴォイスが状態性の獲得に関わっていることを指摘するにとどめるが、例27)と28)、29)と30)の間には、従属節が能動態なら、時間的継起か並立かの意味が強く、受動態になれば、

*¹ ここで言う「結果状態」は、語彙的なものとして原因となる結果状態のことであって、アスペクト的に、動作動詞によって動詞の継続と変化結果の継続が生じるという分析における結果の継続とは異なる。結果の継続については、詳しくは、金田一1950、奥田1978などを参照されたい。また、工藤1995では、動詞のアスペクト性から、動作動詞（工藤1995では、運動動詞と呼んでいる）に対して、内的限界動作と非内的限界動作の区別をし、内的限界動作（telic）は結果が残るが、非内的限界動作（atelic）は結果が残らないという指摘がある。

内的限界動詞： a) 殺す、切る c) 死ぬ、切れる

非内的限界動詞： b) 叩く、歩く (p. 57)

起因的継起に解釈されやすいという違いが見られる。

27) 太郎が花子を叩いて、花子は泣いている。

28) 花子は、太郎に叩かれて、泣いている。

29) 犯人が電話線を切って、田中は、外に連絡する別の方法を考えた。

30) 田中は、犯人に電話線を切られて、外に連絡する別の方法を考えた。

つまり、「花子を叩く」や「電話線を切る」というのは、太郎や犯人の意志動作であるため、「花子が泣く」や「田中が別の方法を考える」の原因に解釈されにくい。「太郎に叩かれる」や「犯人に電話線を切られる」というのは、花子や田中が自分の意志に関係なく他人の動作を受けることを表すので、花子や田中にとっては、動作による結果状態になっており、そのため、「花子が泣く」や「田中が別の方法を考える」という意志動作の原因に解釈されやすくなったものと考えられる。

さらに、従属節と主節の主語が一致するか一致しないかが、原因表現になるかどうかの目安になるという指摘があるが（奥津1986、仁田1995など）、主語が一致しなくても、意志動詞の場合は、継起的起因を表しにくいことについては、すでに例26)のところで述べている（例27)29)も同様）。〔テ〕は、従属節が状態である必要があるが、主節の主語（動作主？）の状態が異なった主語の状態かを表せばよいのである。それに対して、〔タメニ〕は、他人の意志的な動作でも、積極的に状態に変える形態的手段を持っているため、一切の制限を受けない。31)32)は、主節の主語の状態を表す例で、33)34)は、従属節が異なった主体の状態を表す例で、35)36)は、異なった主体であり、従属節が意志動詞の用例である。

31) 彼は、酔っぱらい運転をして、事故を起こしてしまった。

32) 彼は、酔っぱらい運転をしたために、事故を起こしてしまった。

33) 雨が強く降っていて、私は学校に行かなかった。

34) 雨が強く降っているために、私は学校に行かなかった。

35) ??彼は、両親がたくさんお金をくれて、高価な買い物をした。

36) 彼は、両親がたくさんお金をくれたために、高価な買い物をした。

上記のことから、従属節の状態化における〔タメニ〕と〔テ〕の違いを次のようにまとめることができよう。〔テ〕は本来、二つの出来事を同時発生か継起的発生かに並べるのが基本的な機能であり、それが起因的継起を表すことができるのは、継起的に発生する二つの出来事の

間に、因果関係が成立するという意味的関連性が認められる場合である。この因果関係の意味的関連性は、動作と動作の連続の場合は、時間的継起か並立の読みが優先しやすく、因果関係の成立が難しくなるが、状態／結果状態と動作の組み合わせの場合は、結果が残っているため、起因的継起の読みが相対的にしやすくなるのである*¹。それに対して、〔タメニ〕は、継起性の明示によって形態的に意志的な動作を結果状態に変えているので、意志動詞と意志動詞の組み合わせであっても、原因表現になることができる。このように、同じ継起性に基づく因果性表現と言っても、形態的に因果性を明確に示す明示的な〔タメニ〕と、因果性の読みが意味的関連性に委ねられる非明示的な〔テ〕は、結果状態を示さない意志動詞の従属節において、異なった様相を呈しているのである。

一方、〔タメニ〕は主節が話者の心的態度を強く表すと、目的を表しやすくなる（出来事発生の継起関係が逆になる）ということを、第一章で述べたが、〔テ〕も、主節が話者の心的態度を強く表すと、起因的継起としては成り立ちにくくなり、時間的継起か並立になりやすくなる。37)38)では、主節が勧めや命令を表すため、従属節を、起因的継起よりも時間的継起と解釈しやすくなっている。それは、主節が過去の出来事を叙述する形を取る場合、起因的継起と解釈されやすいと比較すれば、その違いは一層明確になるのである。

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 37)仕事を早く片付けて、早めに家に帰ろう。 | (○時間的継起／？起因的継起) |
| 38)頭を殴られて、死んでしまえ。 | (○時間的継起／？起因的継起) |
| 39)仕事を早く片付けて、早めに家に帰った。 | (○時間的継起／○起因的継起) |
| 40)頭を殴られて、死んでしまった。 | (○時間的継起／○起因的継起) |

2.2. 継起性重視と因果性重視の相違について

2.1では、因果性表出には、形態的に示されるか、意味的関連性に任せて因果関係が読みとら

*¹なぜ、従属節が意志的な動作になると、継起的起因に解釈されにくく、状態や結果状態になると、継起的起因に解釈されやすいのか、其の理由については次のように考えている。

A：原因になるためには、従属節の出来事が主節の出来事が発生するときに、すでに存在としてとどまっていなければならない。状態や結果状態はとどまるが、動作はとどまらないので、〔動作－動作〕は継起的になり、原因になりにくい。

B：相対テンスの角度から言えば、主節の出来事にとって、原因になる従属節の出来事は、持続的で、時間の幅を有するものを必要とする。

状態と動作の関係については、今後さらに検討して解明してみたいと思う。

れるかという違いがあることについて述べた。ここでは、明示的と非明示的との相違は、表現上、より起因的継起を重視するか、より原因・結果の関係を重視するかとしても現れてくることについて検討する。次の例を見られたい。

41) 久しぶりにお目にかかれて、たいへん嬉しい。

42) 大統領と直接に話ができて、本当に羨ましい。

43) もし医者が留守で、行ってすぐ手術の用意ができないと困ると思って、電話を先に掛けてもらうことを頼んだ。

44) あなたのためと考えて、彼に電話して来てもらった。(43)44)は仁田1995の用例)

41)42)は、主節が話者の気持ちを表す用例であり、43)44)は、従属節が話者の思考を表す用例である。確かに、上記の例はいずれも、従属節と主節の間に因果関係を認め得るので、絶対に「タメニ」を使えないというわけではないが、しかし、「タメニ」を用いると、あまりに因果性を強く表しすぎるために、表現がぎこちなくなる^{*1}。

45) ? 久しぶりにお目にかかれたため、たいへん嬉しい。

46) ? もし医者が留守で、行ってすぐ手術の用意ができないと困ると思ったために、電話を先に掛けてもらうことを頼んだ。

因果性表出の中でも、主節の話者の気持ちを生じさせるきっかけを作ったり、従属節が表す話者の思考をきっかけにして、主節の出来事を生じさせたりする場合は、因果性を強く明示するよりも、起因の継起性を示すだけの「テ」を用いる方が相応しいのである。それが、慣用句になって、使い方のパターンが定着するものさえ現れてくる。

47) 約束したのに、守られなくて困っている。

48) 雨降って、地固める。

このような例は、むしろ時間的継起か起因的継起か、明確に示していない表現として扱う方がよいだろう。時間的継起と起因的継起にまたがるところに、この種の表現の存在価値がある

^{*1} 主節に利益を表す語句が使われると、「タメニ」でも、表現の許容度が上がる。

○ (これから伺おうとするところ)、お目にかかれたため、(時間が省けて)助かった。

と考えられる。つまり、解釈次第で時間的継起にも起因的継起にもなり得る用例は、視点を変えれば、時間的継起でも起因的継起でもよい表現であり、どちらかに決めなければならないものではないのである。きっかけを示す起因的継起のような因果性表出に「テ」が頻用されるのは、まさに時間的継起と起因的継起とが連続していて境界が不明確なこと、不明確さによる意味の曖昧さ、不明確さによる表現の軟らかさが好まれているからではないかと考えられる。

このような連続していて不明確なところのある表現の選択は、原因と目的の両方を表す「タメニ」にも当てはまるように思われる。つまり、原因にも目的にもなる「タメニ」の中間的用法は、表現の曖昧さが意図的に図られる手段として選択、使用され、その結果、明確に原因か目的かの意味を表すのを避けることになるのである^{*1}。こうなれば、形態機能の連続性は、意味表出の手段として利用され、表現の選択に密接に関わってくることになるのである。

3. まとめ

「タメニ」文と「テ」文の相違を、次のようにまとめることができる。

- A：同じく継起性に基づく因果性表現の「タメニ」文と「テ」文は、前因・後果的な関係を表す点で共通しているが、「タメニ」文が形態的に因果性を明確に示すものであるのに対して、「テ」文は、因果性の表出が従属節と主節の意味的関連性に委ねられるものであるという点で異なっている。
- B：「テ」文の起因的継起の表現は、原因を表す従属節が状態性を持つ事柄を表すのが一般的である。そのため、意志動詞を使うと、動作を結果状態にして原因を表す積極的な手段が欠けるため、時間的継起か並立の意味が優先し、原因表現として解釈されにくくなる。それに対して、「タメニ」文の原因表現は、形態的に因果性を明確に示すことができるので、従属節が意志動詞でも、動作を積極的に結果状態に作り変えて原因を表すことができ、語彙レベルの制限を受けることはない。
- C：主節が話者の気持ちを表したり、従属節が話者の考えを表したりする場合、継起性によるきっかけを重視し、因果性を明確に示す必要はない。そのため、時間的継起と起因的継起の連続性を持つ「テ」が好まれ、因果性を明記する「タメニ」を避ける傾向があるように思われる。継起性重視と因果性重視は、まさに表現として選択されているのである。

^{*1} この点については、第一章でもすこし触れたが、中間的用法に対する位置づけに密接に関わってくるので、いまのところ、まだはっきりした考えを持っていない。表現の連続性や流動性を考えれば、プロトタイプは、ある形態が果たし得る機能の範囲を表すものであるといえるかもしれない。

第四節 客体的因果関係（原因）と主体的因果関係（理由）

についての補足

－ [名詞の＋タメニ] と [名詞＋なノデ／だカラ] を中心に－

第一章の第二節 [名詞の＋タメニ] において、主節に対する従属節のあり方から、原因・理由・目的を動機づけとして一つにまとめることができることを述べた。テンスを表す形態を持つ [用言＋タメニ] と [用言＋ノデ、カラ] では、テンスの角度から従属節の役割を見れば、両者は、二つの出来事発生が継起的か（相対テンス解釈）非継起的か（絶対テンス解釈）に分かれることになる。つまり、継起性に基づく前因・後果型の [タメニ] 文は、相対テンスの解釈を受けることになり*¹、継起性にとらわれない非前因・後果型の [ノデ、カラ] 文は、相対テンスとしても絶対テンスとしても、解釈することができるのである。両者の違いは、下記の図のように示すことができる。

従属節のテンスの性格：

[タメニ]	原因：以前／同時	過去／以前
	目的：以後	未来／以後
[ノデ、カラ]		理由：現在／同時

しかし、主節の出来事に対して、相対的にそれより以前か以後かを示さないテンス・フリーの [名詞の＋タメニ] 従属節は、主節との継起性を形態的に表さないため、原因と目的を明確に表さない。言い換えれば、原因も目的も、主節に対して従属節を以前か以後かに位置づける問題となり、従属節と主節の関係づけ方（特に主節の意味内容に負うところが大きい）によって、原因になったり、目的になったりして働いているということができる。それに対して、[名詞＋なノデ、だカラ] の従属節は、出来事発生の前後関係に関係なく、主体的に二つの出来事を因果的に結び付けているので、依然として理由を表すということになるのである。

それでは、テンス性を持たない [名詞の＋タメニ] と [名詞＋なノデ／だカラ] では、どの

*¹ 相対テンスで解釈するというのは、二つの出来事の間継起関係が存在し、それをもとにして主節より以前か、主節と同時に起きることを意味する。継起関係の介在がなければ、相対テンスによる解釈の保証はない。相対テンスだけによる解釈の不合理性、継起性概念の有効性については、序章ですでに述べた。

ように継起性と非継起性、客体的と主体的の区別を示しているのであろうか。

二つの出来事を並べて因果的に表現するのは、話者がその間に因果関係が成立していると考えているからである。しかし、すでに第二節で指摘したように、その関係に対するとらえ方、関係づけの仕方には、客体的と主体的という異なった二つのタイプが存在する。

第一節では、因果性表現に対して、基本的に継起性と非継起性を基準にして、原因と理由を分けることについて述べた。繰り返すが、継起性に基づく「タメニ」文は、話者が観察の立場に立って、出来事発生の前後関係を手がかりにして、二つの出来事を前因・後果的に把握して表現しようとするもので、客体的表現である。一方、非継起性を特徴とする「ノデ、カラ」文は、話者が、二つの出来事を因果的に結び付けたもので、主体的表現である。このように、因果性表現に現れる原因の客体的と理由の主体性の相違は、話者が因果関係に対する把握や関係づけのときに従う継起性と非継起性に起因し、また、表現においては、叙述性と主張性として現れてくると考える。

この節では、一見、継起性と非継起性に無関係に見える「名詞の＋タメニ」と「名詞＋なノデ／だカラ」の違い、題－述構文に現れる「タメダ」と「カラダ」の違いについて考察する。この節での考察を通して、従属節がテンス性を持たないため、継起性と非継起性の対立が明確でない場合、客体的な原因づけと主体的な理由づけなどは、どのように機能し、表現にどのような違いをもたらしているかを明らかにしたい。

1. 「名詞の＋タメニ」と「名詞＋なノデ／だカラ」の相違について^{*1}

テンスと関係しない「名詞の＋タメニ」従属節は、継起性に基づく原因づけが形態的に明示されないし、「名詞＋なノデ／だカラ」従属節は、もともと継起性とは無関係であるから、因果関係の違いは、主に主節の叙述性と主張性の違いによって決定されることになる。まず、1)

^{*1} 「名詞＋デ」も、因果性表現において、客体的に原因と結果の関係を表していると言える。これは、主節が意志的な動作を表すと、「名詞＋デ」が道具や手段を示すように機能し、主節が状態性を持つと、「名詞＋デ」が原因づけとして機能するようになる、ということからも、裏付けられている。

1) 風邪で会社を休もう。 (手段)

2) ??自殺で電車が止まった。 (理由づけ)

3) 人身事故で電車が止まった。 (原因づけ)

例1)の「風邪で」は、「風邪を手段にして」という意味になる。また、例2)が不自然に感じられるのは、「自殺」が意志的な動作であるため、理由づけにはなるが、原因づけになりにくいいため、「デ」の用法になじまないからであろう。例3)の「人身事故で」なら、原因づけに自然になるので、自然な表現になるのである。

と2)、3)と4)の間には、明確な違いが存することが確認されよう。

1)??非常に神経質なため、一度医者に診てもらおう。

2)非常に神経質なので／だから、一度医者に診てもらおう。

3)つまりは、怒りのために彼女はありったけの力を振り絞って体を動かそうとした。

(家p. 66)

4)??つまりは、怒りなので／だから、彼女はありったけの力を振り絞って体を動かそうとした。

1)と2)の違いについては、主節に話者の主張が明示されれば、継起性に基づく叙述性の「タメニ」が不自然になり、非継起性を特徴とする「ノデ、カラ」が自然になる、ということで説明ができる。この点については、すでに第二章の第二節で述べた。しかし、主節が過去の出来事を表す3)と4)の違いについて、どのように説明したらよいのであろうか。

例3)が自然なのは、「怒りのために」は「体を動かそうとした」結果をもたらす直接の原因を表しているためであり、例4)が不自然なのは、「体を動かそうとした」結論に対して、話者が認定した「怒りだ」という理由をもって結論を理由づけようとするからである。ここでは、「原因／前因－帰結」を表す「タメニ」文を、「なんのために型」と呼び、「理由－結論／主張」を表す「ノデ、カラ」文を、「なぜ型」と呼ぶことにする。4)の不自然さは、「なんのために型」のような原因／前因を使うべき所に、「なぜ型」のような話者の理由づけを使っている、という所に由来すると考えられる。従って、次のように原因／前因を話者の理由づけに変更すれば、自然な文になる。

5)怒っているので／から、彼女はありったけの力を振り絞って体を動かそうとした。

このように、「名詞の＋タメニ」と「名詞＋なノデ／だカラ」の違いは、帰結の前因を問題にする客体的な原因づけと、結論への話者の理由づけを問題にする主体的な理由づけとして顕著に現れてくるのである。次に挙げる6)と7)、8)と9)の違いはいずれも、主節に対して、前因が求められているか、理由づけが求められているかによると説明することができる。

6)「娘はまだ二つだったが、あの顔の左半分のひどい傷は生涯、消えるものじゃあない。

女だけに、顔の傷のために不幸な目に合っているじゃろう。」 (花嫁p. 63)

7)??「～。女だけに、顔の傷なので／だから、不幸な目に合っているじゃろう。

8)??幼い子供のために、許してあげた。

9)幼い子供なので／だから、許してあげた。

6)の「タメニ」が自然なのは、「顔の傷」が直接の原因になって「不幸な目に合っている」帰結をもたらしていることを表しているためであり、7)の「ノデ、カラ」に置き換えると不自然に感じるのは、「不幸な目に合っている」結論に対して、「（足の傷ではなく）顔の傷なので／だから」という話者の理由づけを求めようとしているのではないからである。8)と9)も同じである。ここで問題にするのは、なぜ「許してあげた」という理由づけを言わなければならないのであり、何のために「許して挙げた」という直接の原因／前因を求めているのではないのである^{*1}。

しかし、このような客体的な原因づけと主体的な理由づけの相違は、多くの場合は、因果性に対する話者の捉え方や関係づけ方の相違として現れてくる。そのため、両者は、置き換えることができる場合が多く、10)と11)、12)と13)のように、その相違も、表現に感じられる叙述性と話者の主張性の違いにとどまることになる。

10)大雨のために、橋や家が流された。

11)大雨なので／だから、橋や家が流された。

12)最初に由美子の精神状態について、信之が相談した相手は安積のため、患者についての連絡は着実にとられていた。

13)最初に由美子の精神状態について、信之が相談した相手は安積なので／だから、患者についての連絡は着実にとられていた。

10)12)と11)13)の間に感じられる違いは、基本的に話者が観察の立場に立って前因・後果的に叙述するか、それとも、因果的に結び付けて話者の主張を述べ立てるか、という話者の捉え方や関係づけ方の違いによるものであると言える。つまり、10)12)では、「大雨」や「最初に由美子の精神状態について、信之が相談した相手は安積」が直接に、「橋や家が流された」や「患者についての連絡は着実にとられていた」という結果を起因させた前因として位置づけられ、客体的表現となっている。それに対して、11)13)では、「橋や家が流された」や「患者についての

^{*1} 「幼い子供のために、許して挙げた」を、原因ではなく、目的に解釈すれば、自然な文になる。しかし、目的の表現では、「許して挙げた」のは、幼い子供ではなく、別の人でなければならない。

○幼い子供のために、（万引きをした）母親を許して挙げた。

連絡は確実にとられていた」という結果は、「大雨」や「最初に由美子の精神状態について、信之が相談したのは安積だ」という理由があって生じたものであることを述べており、結果に対する話者の強い理由の主張を示す主体的表現になっている。

また、〔名詞の＋タメニ〕と〔名詞＋なノデ／だカラ〕に現れるこのような客体的な原因づけと主体的な理由づけの違いは、〔なノデ〕の〔な〕や〔だカラ〕の〔だ〕が話者の判断を表すコピュラであることから、裏付けられるように思われる。つまり、話者の判断があれば、判断から結論を導き出したり、結論に判断の内容を付け加えたりするのが一般的で、そのため話者が二つの出来事を因果的に結び付ける主体的表現になっているのである。

表現に現れる因果性の関係づけ方の相違は、言語活動が人間の認識活動に基づくものである以上、関係把握における客体性と主体性の違いとして、必ず存在するものであろう。出来事発生の継起関係を明確に示さない「名詞の＋タメニ」と〔名詞＋なノデ／だカラ〕において、話者の判断を表す〔だ〕の有無によって示されるように、関係づけ方に現れる客体性と主体性の違いは、表現の叙述性と主張性の相違、起因的継起と導き出し式／付け加え式という関係づけ方の相違として現れてくるのである。これは、例3)と4)、6)と7)、8)と9)のように、両者の置き換えができない場合もあれば、また、10)と11)、12)と13)のように、話者の捉え方の違い、関係づけ方の違いによる表現の相違として表れてくる場合もある。しかし、置き換えができる場合でも、話者の捉え方や関係づけ方の違いは依然として存在し、客体的な原因づけと主体的な理由づけの違いは、表現の叙述性と話者の主張性の相違を根本から支えているのである。

2. 〔タメダ〕と〔カラダ〕の相違について

〔ノデダ〕という用法がないので、ここでは、〔タメダ〕と〔カラダ〕を比較してみることにする。

まず、〔タメダ〕文と〔カラダ〕文は、文の構造上、従属節と主節の対置関係から、題－述という構造に変わっていることを確認する。つまり、〔～ハ～タメダ〕と〔～ハ～カラダ〕という文構造は、題＝説明される部分と、述＝説明する部分という構造になっている。そのため、結論は「題」の内容になり、原因と目的や理由は「述」の内容になるというふうに、原因と帰結、目的と動作、理由と結論／主張などの関係は、それぞれが「題－述」構造の中で題になったり、述になったりして、説明文の中に解体されているのである。

〔タメニ〕は、原因と目的の両方を表すことができるが、例14)と15)、16)と17)が示すように、説明文の構造の中においては、それぞれが原因なり目的なりを説明する説明の内容になって働いており、いずれも「題－述」構造を形成しているのである。

- 14) 風邪をひいたため、会社を休んだ。
- 15) 会社を休んだのは、風邪をひいたためだ。
- 16) 日本語を勉強するために、日本に来た。
- 17) 日本に来たのは、日本語を勉強するためである。

それに対して、理由づけを表す「カラ」には、結論に対しての理由づけと、聞き手の動作への要請を正当化させるための理由づけという二つがあって、前者は、論理的な判断を表すもので、後者は、非論理的なものである。従って、18)19)のように、論理的な判断を表す理由づけの「カラ」は、「題－述」の「カラダ」文になるが、20)と21)のように、非論理的な理由づけの「カラ」は、「カラダ」文になることができなく、倒置文になれるだけである。

- 18) 大雨が降ったから、橋が流された。
- 19) 橋が流されたのは、大雨が降ったからだ。
- 20) 子供が寝ているから、テレビの音を小さくしてください。
- 21) テレビの音を小さくしてください。子供が寝ているから。（＊子供が寝ているからだ。）

「タメダ」文と「カラダ」文は、「題－述」構造を形成し、説明されるものと説明するものという関係づけに変わっているが、「タメニ」が表す「原因－帰結」と「目的－動作」、「カラ」が表す「理由－結論／主張」といった区別は依然として残っている。原因の「タメダ」文と理由の「カラダ」文は、例22)23)と24)25)のように、両者の意味が近く、多くの場合は、置き換えができるが、原因をもって説明するか、理由をもって説明するかというニュアンスの違いが感じられる。

- 22) 二人が教授の殺害を計画したのは、卒業試験の問題を盗んだことを教授に知られたためである。(TV)
- 23) 二人が教授の殺害を計画したのは、卒業試験の問題を盗んだことを教授に知られたからである。
- 24) 父が亡くなったのは、癌のためである。
- 25) 父が亡くなったのは、癌だからである。

しかし、目的としての出来事は、説明の内容にはなるが、理由にはなれないため、「カラダ」と置き換えることはできない。

26) 万全なチェック措置を取るのは、品質の低下を防ぐためである。

27) ? 万全なチェック措置を取るのは、品質の低下を防ぐからである。

28) クライブが上流の令嬢と結婚したのは、出世のためである。 (TV)

29) ? クライブが上流の令嬢と結婚したのは、出世だからである。

このように、文が説明文に変わっても、原因表現、理由表現、目的表現という意味関係が依然として機能していると考えられる。

3. 結論

上に述べたことを、次のようにまとめることができる。

A : 原因表現は、話者が観察の立場に立って、継起的に起きる二つの出来事を因果的に把握したもので、因果性の成立は客体性に基づく表現である。理由表現は、二つの出来事を話者が因果的に結び付けるもので、因果性の成立は話者の認識にある主体性に基づく表現である。この客体性と主体性の相違は、[名詞の+タメニ]と[名詞+なノデ/だカラ]文においても、基本的に守られていると考えられる。

B : [~ハ~タメダ]文と[~ハ~カラダ]文は、因果性表現から「題-述」という説明の表現に変わることを意味する。しかし、構文的に説明文に変わっていても、もとになる原因づけ、理由づけ、目的づけという関係づけの仕方は変わらない。従って、従属節と主節の前後関係によって[タメニ]従属節が原因と目的を表し分けること、前後関係にとらわれない[カラ]従属節が理由を表すこと、という継起性と非継起性の違いも、依然として生きているのである。

第三章 動作目的表現と結果目的表現の共通性と相違点

ー [タメニ] と [ヨウニ] を中心にー

目的表現は、有情のものがあつる行為を行うことを通じて、期待することを実現させようとするものである。目的表現になるには、次の三つの条件が必要となる。

- A) 主節が意志的に行う動作を表す
- B) 目的になる従属節^{*1}の出来事は、主文の意志的な動作の後に発生する
- C) 主節の意志的な動作が、何かの目的性を持って行われている

目的表現は、大きく分けて二つのタイプがあるように思う。一つは、格体制の中にある目的表現であり、もう一つは、従属節と主節のような対置関係をなす目的表現である。前者には、さらに「名詞＋ニ」の形をとるものと、「動作性名詞＋ニ」の形をとるものとがあり^{*2}、後者は、さらに、従属節の動作を引き起こすための動作目的表現の「タメニ」と、従属節の結果状態をもたらすための結果目的表現の「ヨウニ」とに別れている^{*3}。次に挙げる例では、1)は、「準名詞＋ニ」と、目的格を必要とする述語の組み合わせで、2)は、「動作性名詞＋ニ」と移

^{*1} 「名詞の＋タメニ」は、従属句と呼んで、「用言＋タメニ」の従属節と区別している。この節では、目的表現の相違を考察するものなので、「名詞の＋タメニ」と「用言＋タメニ」を一括して、従属節と呼ぶことにする。

^{*2} 動作性名詞とは、動作を表しながら、名詞のような役割をしているものをいう。英文法用語の「動名詞」に近い。ここでは、文の中で、名詞の役割（直接に格助詞に接続して、格成分として述語に係る）を果たしながら、自らも格成分を従えているという意味で、動作性名詞と呼ぶことにする。

^{*3} 仁田1995では、「テ」にも、「目的起因」の用法があり、「通例の＜起因的継起＞が有している時間的関係のあり方と異なつて「C1」本体の生起が「C2」の生起に後続する、といったものである。スルタメニ節で置換可能なものである」（p.118）と指摘している。

○人形が夜歩いた、と見せかけようとして、スリッパに土を付けて人形にはかせ、それを庭の上に投げ出しておいたのです。

「～ヨウトスル」は将然形と言われるもので、主節の行為の目的（「人形が歩いた」という結果目的）に解釈するか、主節の行為を起因させる原因（「見せかけようとする」という動作主の気持ち）に解釈するかによって、目的か原因かに分かれる。また、将然形は、ひとまとまりと見るべきで、「テ」に接続して相対的に以後を表すとは異なつていると思う。

動動詞の結合である。そして、3)は、動作目的表現の用例で、4)は、結果目的表現の用例である。

- 1) この教科書は、アメリカへ留学するのに役立つ
- 2) 映画を見に行く。
- 3) 学位を取るために、日本に来た。
- 4) 雨が降るように、神社へ行って雨乞いをした。

1)と2)では、「留学する」や「見る」という動詞が自ら格成分を従えながら、格助詞の「ニ」に接続して、述語動詞の「役立つ」や「行く」の格体制の中におさまって、目的を表しているのである^{*1}。これらの用例で重要なのは、使われる述語が格助詞「ニ」を必要とすることであって、「動作性名詞」がさらに、格成分を従えるかどうかということではない。両者の違いは、本来〔名詞＋ニ〕の構造が〔(名詞に準ずる)句＋ニ〕に拡大されていることである。そして、その句の構成の仕方には、「ノ」を接続して名詞化し、それから格助詞の「ニ」に接続するもの(例1))と、動作性名詞に直接「ニ」を接続するもの(例2))とがあるが、これは、格成分の構成において、名詞から名詞句へと一つの連続体をなしていると見ることができよう。従って、下記の5)6)7)と8)9)10)では、「ニ」格は、述語動詞にとって同じ機能を果たしていると考えてよいのである。

- 5) この教科書は、留学に役立つ。
- 6) この教科書は、留学するのに役立つ。
- 7) この教科書は、アメリカへ留学するのに役立つ。
- 8) 私は、明日映画に行く。
- 9) 私は、明日見に行く。
- 10) 私は、明日映画を見に行く。

^{*1} 「映画を見に行く」にある〔ニ〕は、格助詞と見るか、〔ダ〕の連用形とみるか、議論の分かれる所である。

ここでは、目的を表す〔ニ〕の部分は、述語が必要とする文の成分と見て、格体制の中に置かれるものと考えらる。従って、次の例に示される場所や相手、対象を表す〔ニ〕格と同じく扱うことにする。

- 映画館に、映画を見に行く。 (〔場所ニ〕＋〔目的ニ〕＋〔移動を表す述語動詞〕)
- 友達に、本を渡す。 (〔相手ニ〕＋〔物ヲ〕＋〔動詞〕)
- 友達に本を渡しに行く。 (〔目的ニ〕＋〔移動を表す述語動詞〕)

3)と4)では、主節に使われる述語には制限がない。両者の違いは、従属節の動作の遂行を目的に立てて、主節の意志的な動作を行うか、従属節の結果状態の実現を目的に立てて、主節の意志的な動作を行うか、ということである。

この章では、従属節と主節が対置関係を構成する複文について検討することにする。動作目的表現の「タメニ」と、結果目的表現の「ヨウニ」を取り上げて、上に挙げた共通した条件を踏まえながら、主節の意志的な動作が何を目的に立てて行うのかという目的性の相違から、両者の共通点と相違点を考察していく。

1. 主節が意志的な動作を表すことについて

目的表現の成立は、主節が意志的に行う動作を前提としている。これは、有情のものだけが、予め目的を立てて行動を起こすことができるという常識によるのである（寓話や神話などを除く）。従って、11)12)のように、主節が有情のものの動作を表さないで、目的表現は成立しにくい。

11)*稲をよく育てるために、雨がたくさん降っている。

12)*生活が便利になるために、車が定刻に走っている。

「雨」や「車」は、「稲をよく育てる」や「生活が便利になる」という目的のために、「降る」や「走る」という行動を意図的に起こすものではない。つまり、「雨」や「車」などは、目的を立てて、意志的な動作を行うことのできない「無生物」である。意図的に動作を行うことができるかどうかの判断は、語彙的な意味による場合が多いが、複文において、従属節と主節の相互影響によって変わる場合もあるということについては、すでに第一章の第一節で詳しく述べた^{*1}。

2. 主節の意志的な動作が従属節の出来事発生に先行する必要があるについて

目的表現になるには、主節の意志的な動作が時間的に、従属節の出来事発生より先行しなければならない。つまり、二つの出来事の間に、先行・後続という時間的なずれが必要である。このような発生前後の時間のずれ方には、基本的に「タメニ」のように動作と動作とが継起的に発生する場合と、「ヨウニ」のように動作と結果状態とが非継起的に発生する場合の二つがあ

^{*1} 詳しくは、第一章・第一節の2「動作の意志性と意志的な動作の目的性の有無について」を参照されたい。

る。継起的発生を特徴とする〔タメニ〕文では、13)のように、従属節が先行、主節が後続という前後関係を構成すれば、原因表現になり、14)のように、従属節が後続、主節が先行という前後関係を構成すれば、動作目的表現になる。それに対して、非継起的発生を特徴とする〔ヨウニ〕文は、同時の関係を表す場合と、前後の関係を表す場合との二つがあり、15)のように、従属節が主節と同時になれば、様態を表す連用修飾になり、16)のように、従属節が後続、主節が先行という前後関係を構成すれば、結果目的表現になるのである。

13) 風邪をひいたために、会社を休んだ。

14) 風邪をひくために、わざと薄着をしている。

15) 今までの不信や不安が吹き飛ばされたように、気持ちが晴れ晴れした。

16) 雨が降るように、神社へ行って祈った。

従属節が動詞の「テイル」形をとる〔タメニ〕文は、基本的に動作の持続状態を表す場合が多く、時間的に主節より以前に発生するので、原因表現になりやすい。17)18)は、従属節が「テイル」形で、原因を表す用例である。

17) 足に怪我をしているため、早く歩けない。

18) お酒を相当飲んでいるため、運転を止めて、代行を頼んだ。

しかし、意図的に状態の維持を図るという意味で、〔動詞テイル+タメニ〕従属節でも、目的を表す場合もある^{*1}。相対テンスから見れば、「テイル」形は、基本的に主節より以前か同時を表すため、原因になるが、目的になる動作の持続状態は、主節の意志的な動作より以後に表れるもので、かつ意図的にその維持が図られるものでなければならない。従って、「テイル」形に接続する〔タメニ〕従属節が目的を表すためには、テンス的に従属節の出来事が主節の動作より以後に発生することを明確に示す文脈が必要になるのである。19)21)は、従属節が主節より後続することを示す文の成分（下線のある部分）がない用例で、20)22)は、それを示す文の成分のある用例である。

19) ? 生きているために、食べ物に気を使っている。

^{*1} 意図的に状態の維持を図るという〔タメニ〕の動作目的表現の用法については、第1章の第1節で詳しく述べてある。

20) 百歳になっても、元気に生きているために、食べ物に気を使っている。

21) ? このポストに坐っているために、いろんな工作をやった。

22) 引き続きこのポストに坐っているために、いろんな工作をやった。

19)21)では、主節より以後に発生することを示す文の成分がないので、目的表現に解釈されにくい。それに対して、20)22)のように、「食べ物に気を使っている」や「工作をやる」時点より以後に、「生きている」や「このポストに坐っている」状態が発生し、その状態の維持がそれ以後にも意図的に図られることを明確に示す文の成分―「百歳になっても」や「引き続き」があるので、目的表現に解釈されているのである。

従属節が動詞の「テイル」形をとる〔ヨウニ〕は、同時性の性格が強いため、基本的に、様態を表して動作を修飾する連用修飾になる。

23) 他人のことを聞いているように、ウンウンと言うだけで、何も言ってくれない。

24) 子供が一流大學に合格しているように、嘘を言って、見栄を張っている。

しかし、従属節の出来事が主節より以後に発生することを示す文脈の助けがあれば、結果目的表現になる場合もある。次に挙げる例26)28)は、「お客さんが来るときに」や「明日起きたら」という文の成分が、従属節が主節より後続することを保証しているので、結果目的表現と解釈されるのである。

25) ? 水がちゃんと流れているように、巧みな仕掛けを作っている。

26) お客さんが来るときに、水がちゃんと流れているように、巧みな仕掛けを作っている。

27) ? 雨が降っているように、一生懸命祈った。

28) 明日起きたら、雨が降っているように、一生懸命祈った。

タ形に接続する〔ヨウニ〕の従属節は、基本的に様態を表す連用修飾になるが、ル形に接続する〔ヨウニ〕の従属節は、目的の他に、様態を表す場合もある。

29) 彼は、相手を馬鹿にするように、怪蔑の口振りで、こう言った。

従って、〔ヨウニ〕文の場合は、従属節がル形をとれば、必ずしも主節より以後を示すわけではなく、相対テンスの関係のあり方によって、結果目的になったり、様態を表す連用修飾に

なったりするのである*¹。

このように、動作目的の「タメニ」と結果目的の「ヨウニ」は、従属節に基本的に「ル」形を用いるが、文脈の助けを受けて、「テイル」形を使うこともできる。

3. 主節の意志的な動作による目的性について

主節が意志的な動作を表すことと、従属節と主節の間に、出来事発生の時間的ずれがあることは、すべての目的表現に共通して見られる条件である。従って、目的表現の「タメニ」文と「ヨウニ」文の相違は、結局何を目的に立てるかという目的性の違いにあるということになる。3では、目的性の相違から、両者の使い分けを検討していく。

3.1. 先行研究

目的表現の「タメニ」文と「ヨウニ」文の相違については、従属節のコントロール性、従属節と主節の動作主の異同という角度から、論ずる研究が多い。石川1988では、自他動詞、可能動詞と可能形、他者の意志的な動作・行為という三つの面から、意志性・コントロール性と目的表現の関係を取り上げ、例を挙げて次のように説明している。

30) 私は病気を治すために／??ように、薬を飲んでいる。

31) 私は病気が治るように／??ために、薬を飲んでいる。 (自他動詞の別)

32) 私は、早く泳げるように／??ために、毎日練習している。 (可能動詞か否か)

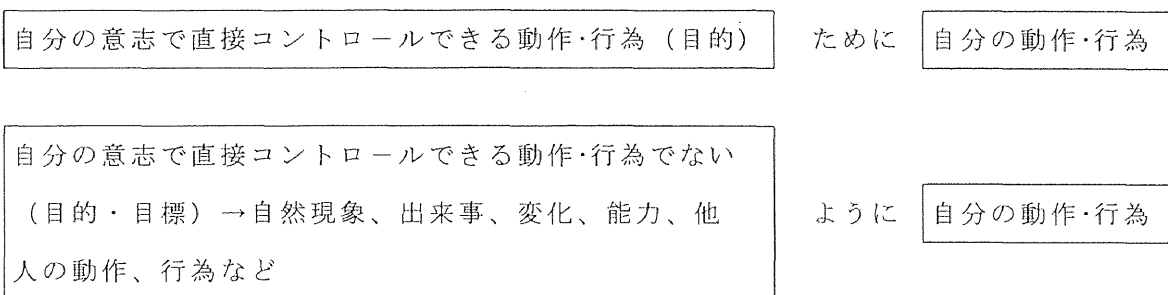
33) 私は、子供が食べるように／??ために、夜食を作った。 (動作主の異同)

「タメニ」というのは、「自分の意志で直接コントロールできる目的」を表し、「ヨウニ」は、「自分の意志で直接コントロールできない目的」を表すと考えることができる。(p-19)

さらにそれを図示して、「タメニ」と「ヨウニ」の相違を次のようにまとめている。

*¹ ル形をとる「ヨウニ」従属節が、結果目的になったり、様態修飾になったりすることができるのは、従属節と主節の表す出来事の時間的關係によって決められる。動詞の語彙的な特徴は、相対テンスのあり方に、要素として加わっていく。様態修飾が結果目的かを表す「ヨウニ」従属節のテンス特徴については、今後の研究に譲りたい。

図① [タメニ] 従属節と [ヨウニ] 従属節の相違：



また、前田1992では、様態と目的の連続性という角度から [ヨウニ] を捉え直し、「目的用法は様態用法と連続しており、主節動作に同時に付随する事態を差し出す『様態』のヨウニが主節動作から時間的に後に生じる結果的な事態、いわば『結果的な様態』を表す場合に、『目的』の意味を表すこと」になると位置づけ、「形式名詞として『目的』の意味をすでに持つタメニとは異なって」（p. 102）いると述べている^{*1}。そして、その目的を表す「結果的な様態」の特徴として、従属節が主節と「関連のない動作である」ことと、話者のコントロール不可能な「非意志的・状態的述語」を使うこと、などを挙げている。（p. 107～108）

[タメニ] 文と [ヨウニ] 文に現れる自動詞と他動詞の区別、コントロール性、動作主の一致不一致などの相違は、すべて従属節が動作を表すか、結果状態を表すかによると考える。以下、石川1988と前田1992の分析を踏まえながら、動作目的か、結果目的か、という主節の意志的な動作による目的性の相違について検討することにする。

3.2. 動作目的の [タメニ] と結果目的の [ヨウニ]

[タメニ] 文と [ヨウニ] 文の違いは基本的に、従属節が動作を表すか、結果状態を表すかにあると考える。継起性を特徴とする [タメニ] 文は、従属節の動作を引き起こすことを目的にする動作目的表現で、動作から動作へという「動作→動作」の連続を表している。つまり、主節の意志的な動作の目的は、従属節の動作の遂行を可能にするきっかけを作り出すことにあるのである。それに対して、[ヨウニ] 文は、二つの出来事発生の時間の前後関係に支えられて、「様態」を表す従属節の本来の意味が、目的の結果状態を表すようになり、動作から結果状態という「動作→結果状態」の関係を表している。言い換えれば、主節の意志的な動作の目

^{*1} 形式名詞の「タメニ」（？）がすでに「目的」の意味を持つとする前田の解釈は、語彙レベルで両者の使い分けを説明しようとするものと理解される。本論文では、[タメニ] 文は、従属節と主節の対置関係を形成し、原因と目的の両方を表すという事実を踏まえて、[タメニ] 従属節をひとまとまりとして、その意味役割を分析し、[（形式名詞+タメ）+ニ] のように分解しない。

的は、従属節が表す結果状態を作り出すために、働きかけているのである。このように、「動作→動作」の継起的把握と、「動作→結果状態」の非継起的把握の相違は、従属節が動作の表出か、結果状態の表出か、という「動作性⇔状態性」の相違を起因させ、従属節の動作の意志性、コントロール性、動作主の異同という違いをもたらしているのである。

それでは、従属節の動作を引き起こす動作連続の継起性と、結果状態を招来する「動作→結果状態」の被継起性という相違は、具体的に「タメニ」と「ヨウニ」の使い方にどのような違いをもたらしているのであるか。

3.3. 継起性に基づく動作連続の「タメニ」

二つの動作の継起的発生を特徴とする「タメニ」文は、動作発生の先行・後続の関係によって、原因を表したり、目的を表したりすることは、すでに第一章で述べた。継起性に基づく目的表現の「タメニ」文は、従属節の行為を可能にするきっかけを作るもので、行為を引き起こすのを目的とする表現である。継起的に発生する動作で、しかも、従属節の動作の遂行を目的とするため、まず、従属節と主節の動作主が一致する場合が多い。このような文では、従属節に現れる動作性と意志性は、動作主のコントロール性と一致することになる。

34) 私は、相手の意図を探るために、慎重に言葉を選びながら話を続けた。

しかし、異なる動作主の動作を引き起こすことを目的にすることも、不可能というわけではない。主節の行為が従属節の行為を可能にするきっかけ→目的が明確であれば、35)36)のように、動作主が一致しなくても、「タメニ」を使うことができる。この場合、従属節に対する動作主のコントロール性がなくなるが、主節の動作によって引き起こされる「動作→動作」の継起性、動作の遂行を実現させる目的が依然として存在していると考えられる。

35) 赤組が勝つために、私達は一生懸命応援しよう。

36) 息子がたくさん食べるために、母親は料理に工夫している。

35)36)で、「タメニ」が使われるのは、「赤組が勝つ」「息子がたくさん食べる」という赤組や息子の行為の遂行が主節の意志的な動作によって可能になるということである。つまり、主節の行為の目的は、「赤組」に「勝つ」行為を、「息子」に「たくさん食べる」行為を行わせようとするのである。

また、動作を引き起こすことを目的とする「タメニ」文は、動作の連続であるため、動作主

が明記されなくても、動作性が認められればよい。従属節の行為と主節の行為の間に継起性が存在し、それが作り出すきっかけ→目的が、動作目的表現を支えていることになっているのである。37)は、主節が受け身形を用いる用例で、38)は、従属節に受け身形が使われる用例であるが、誰かの動作と認められるので、動作目的表現になっているのである。

37) 作中人物の知覚性を明示するために、直接引用という形式が使用されている。

38) 第2の行動が行われるために、第1の行動を遂行する。

37)38)が示すように、これらの用例では、誰が直接引用をするか、第2の行動をするのが誰か、という動作主は問題にされていない。つまり、ここでは、従属節と主節が同じ動作主のする動作か否か、動作をコントロールできるか否か、ということは、動作目的表現には関係しなくなるのである。これらの用例で問題にするのは、「作中人物の知覚性を明示する」動作の遂行を可能にするきっかけ、「第2の行動を行う」動作の遂行を可能にするきっかけが、主節の行為によって作り出されるということである。従って、ここにあるのは、動作の意志性と、動作の遂行を目的に立てる目的性であるということができる。

このような動作へのきっかけ性、目的性は、対象語を主題にする「題一述」構文の目的表現になると、動作主が現れないため、一層重要になってくる。

39) 運動は、健康を維持するために、適度にすべきである。

40) 法律は、社会の秩序を守るために、作られる。

39)40)が意味するのは、「運動をするコト」や「法律を作るコト」の目的が、「健康を維持するコト」や「社会の秩序を守るコト」という所にある、ということである。ここでは、動作をする具体的な「誰」が問題にされていない。従って、これらの用例では、動作遂行の目的を明確に示せばよく、動作主の一致や動作のコントロール性などは、問題にならないのである。

さらに、動作目的の場合ほど多くはないが、状態存在の目的を表す用法もある。次の例を見られたい。

41) 子供のために、部屋が作ってある。

42) 法律は、社会の秩序を守るために、ある。

「作ってある」や「ある」は、動作主は明確にされていないが、誰かの動作によって生じた

存在であると考えられる。（第一章では、「アル」を動的存在と呼んでいる。また、「～テアル」の解釈については、第一章第二節の5で、言及がある。）受け身と同様に、動作的に解釈されているので、[タメニ]が使われたと見る。

上記のことをまとめれば、次のようになる。動作目的表現の[タメニ]文は、従属節の行為を引き起こすことを目的とし、主節の意志的な動作によって従属節の動作の遂行を可能にする目的表現である。そのため、従属節と主節は、「動作→動作」の連続を構成し、動作の継起的発生を基本的な特徴としているのである。

3.4. 結果状態の生起を目的とする[ヨウニ]

前田1992では、様態を表す[ヨウニ]が目的を表すことができるのは、従属節の出来事が時間的に、主節のそれより後から発生する「結果的な様態」を表しているという、先行・後続の時間関係が成立するときであると指摘している。従属節の出来事が後続して発生し、結果的な様態を示すということは、主節の意志的な動作を様態的に修飾する同時成立の従属節が、主節より発生が以後になるという時間のずれによって、主節の意志的な動作によって実現される結果状態^{*1}を意味することになるのだと理解する。言い換えれば、二つの出来事の同時発生（同時性）による連用修飾の様態が、出来事発生の先行・後続に支えられて、従属節が主節の働きかけを受けて生じた結果状態を表し、目的として機能するようになるのである。こうして、相対テンスの角度から、[ヨウニ]の従属節の機能は、「同時性＝連用修飾様態」、「発生の前後性＝結果状態」を表すということで、一致することになるのである。43)は、同時性による連用修飾の例で、44)は、発生に前後のずれが生じる結果状態の目的表現である。

43) 逃げるように、二人が駆け込んできて、戸口を開めた。

44) 患者が静かになるように、医者は鎮静剤を注射した。

2で、ル形に接続する[ヨウニ]従属節は、相対テンスとして同時と前後の両方に解釈することができる」と述べた。従って、同時性による様態修飾関係であるか、前後性による結果状態目的づけの関係であるかは、ル形をとるか否かだけでは、判断は難しく、意味的に曖昧になることがある。

45)そして、コーヒーカップを持ったまま、ポーカー・テーブルに腰を下ろすと、催促する

^{*1} 前田1992では、それを「時間的にあとから発生する様態」と言っている。（p. 108）

一般的に「催促する」と「皆を眺める」には前後の関係があるとは考えられないので、目的より様態と解釈されやすい。しかし、これは、あくまでも「催促する」は、「皆を眺める」と同時に成立しているという意味解釈を前提にして得られた理解である。「催促する」と「皆を眺める」の間に、発生時間に前後性を持たせることになれば、「催促するために皆を眺める」という目的としての結果状態の読みへの可能性が高くなるであろう。例えば、例46)のように、「催促する」を「始める」のような動詞に変えて相手の動作にしたり、或いは例47)のように、「催促する」の動作主を主節の動作主と異なるものにしたりすれば、文は目的表現に近づくことになる。

46)そして、コーヒーカップを持ったまま、ポーカー・テーブルに腰を下ろすと、ゲームをすぐ始めるように、皆を見つめた。 *¹

47)そして、コーヒーカップを持ったまま、ポーカー・テーブルに腰を下ろすと、ゲームを始めることを(ボーイが)皆に催促するように、(田中は)ボーイを見つめた。

前田1992では、従属節が主節と「関連のない動作である」と、目的に解釈されるという指摘がある。他人の動作もコントロールできない動作も、目的を立てて意志的な動作を行う動作主側にしてみれば、動作ではなくなって、意図的な動作によって実現させる結果状態になっていると理解される。言い換えれば、結果状態の表出であるからこそ、主節の意志的な動作との間に、出来事発生の前後性を持たせることができ、その結果、従属節が同時性による連用修飾の性格をなくして、目的として働くようになると考える。

結果状態を表す[ヨウニ]文は、従属節が意志的な動作で、かつ同じ動作主(前田1992の言う関連のある動作?)になると、動作性が顕著に現れて、結果状態を表すことができなくなるため、表現が不自然になる。例48)は、従属節も主節も「私」の行為であり、例49)は、「彼」の行為である。

48)*私は、日本語を勉強するように、日本に来た。

49)*彼は、泳ぎを習うように、毎日プールに通っている。

*¹「眺める」が連用修飾を取る傾向が強いので、出来事発生の前後関係を明確に示すために、「見つめる」に変えた。

意志的な動作をすることによって生起する結果状態は、動作主のコントロールの外にあるのである。従って、結果状態を目的とする「ヨウニ」文は、従属節から動作の意志性を無くする必要があるため、従属節を状態化しなければならない。動作主のコントロール不可能な可能状態や自動詞の使用、動作主の不一致などは、ほかでもなく従属節の出来事をその動作主の意志的な動作から解放して、結果状態としての出来事（イベント性）へと性格を変えたことを意味する。次に挙げる例は、いずれも従属節が動作主のコントロールできない事柄を表しているが、例50)51)は、可能動詞と自動詞の用例で、例52)53)は、動作主の異なる用例である。

50)私は、(私が)泳げるように、毎日練習している。

51)私は、病気が治るように、きちんと薬を飲んでいる。

52)息子が真面目に勉強するように、両親は勉強部屋を改築した。

53)息子が真面目に勉強できるように、両親は勉強部屋を改築した。

50)～53)では、いずれも主節の行為によって従属節のような結果状態がもたらされることを表している。これらの用例では、従属節に動作性・意志性が消えてなくなり、全体として主節の意志的な動作によって生ずる結果状態が表されていると考えられる。

このように考えると、日本語表現においては、コントロール性と動作性、非コントロール性と結果状態性が結びついているように思われる。コントロール不可能な動作は、主節の動作主の立場に立てば、動作というより、状態に近い。そのため、動作目的づけとコントロール不可能な出来事との結合は、よほど動作を引き起こす「動作→動作」の継起性を強調しない限り、一般的には使われないようになるのである。

54)??私は、早く泳げるために、毎日練習している。

55)??息子が真面目に勉強できるために、両親は勉強部屋を改築した。

56)? 友達が日本留学に来られるために、私は、経済保証人と身元保証人になって、必要な書類を全部、入国管理局へ提出した。

56)が相対的に許容度が上がるのは、「友達が日本留学に来られる」ことを、結果状態としてではなく、「友達が来る」という動作としてとらえているためであると考えられる。

以上の分析で分かるように、発生時間の前後によって支えられる結果目的表現の「ヨウニ」文は、従属節が全体として一つの出来事を構成して、主節の意志的な動作によってもたらされ

る結果状態を表す。結果状態は、動作と共存しないため、従属節が意志的な動作で、かつ主節と従属節の動作主が同じものになると、動作性が優先し、結果状態性の表出ができなくなるのである。そのために、[ヨウニ]の従属節は基本的に、コントロール不可能な出来事になるのではないかと考えられる。その意味で、動作主の不一致も、従属節を出来事化して結果状態性を持たせるために機能しているのである。

3.5. 動作目的表現と結果目的表現の関連について

3.3と3.4で、動作目的表現の[タメニ]と結果目的表現の[ヨウニ]の特徴を分析し、両者が動作の遂行を目的にするか、結果状態を目的にするかという目的性において、異なっていることを明らかにした。しかし、動作か結果状態かの区別は、発生時間の解釈が揺れるにつれて、意味が曖昧になる場合もある。ここで、両者の意味の違いについて、検討してみる。

まず、従属節の動作が主節の動作と連続することができて、結果状態を表すことができない場合は、継起性に基づく[タメニ]文は、目的表現になるが、[ヨウニ]文は、同時性による様態表現にしかねなくなる。57)は、動作目的表現で、58)は様態表現の用例である。

57) 医者は患者を慰めるために、「大丈夫、すぐ治る」と言った。

58) 医者は患者を慰めるように、「大丈夫、すぐ治る」と言った。

58)では、「医者が言う」という行為によって、「患者を慰める」という結果がもたらされたとは考えにくいので、従属節が主節の働きかけを受けて生じた結果状態を表すことができない。従って、同時性による動作への修飾と解釈されることになる。58)の従属節に結果状態性を持たせるためには、「患者を慰める_ト」を医者が直接に関わらない動作にして、主節の動作主の動作から切り離し、従属節と主節の間に、「動作→結果状態」のように、発生時間のずれを作り出さなければならない。次の例を見られたい。

59) 医者は、患者がすぐ入院できるように、関係部門に直接に電話して、協力を求めた。

60) 医者は、患者が安心するように、「大丈夫、すぐ治る」と言った。

61) 医者は、患者が病院の規則を守るように、直接に説明して協力を求めた。

可能動詞や自動詞になったり、主節と異なる動作主になったりすると、結果状態に解釈されやすくなるのは、従属節から動作性・意志性が消えて、出来事としての状態性を獲得し、発生時間のずれに助けられて、結果目的表現になるからだと考えられる。

また、意志動詞には、動作性を持つ動作も、動作性を持たない結果も、表すことができるものがある。このような動詞を使うと、動作を目的にするか、結果状態を目的にするかは、[タメニ]と[ヨウニ]を選択する基準になる。次の例は、[タメニ]も[ヨウニ]も使えるが、選択によって、表現には、動作目的か結果目的かという相違が出てくる^{*1}。

62) 奈美子は、気を落ち着けるために、タバコを取り出して吸った。

63) 奈美子は、気を落ち着けるように、タバコを取り出して吸った。

64) 久恒は、自分の興奮を同僚に見られないために、そっと刑事部屋を抜け出て中庭に出た。

(けものp. 309)

65) 久恒は、自分の興奮を同僚に見られないように、そっと刑事部屋を抜け出て中庭に出た。

「気を落ち着ける」や「同僚に見られない」は、動作とも結果状態とも解釈され得る。62)と63)、64)と65)を比較して分かるように、主節の「タバコを吸う」や「刑事部屋を抜け出て中庭に出た」の意志的な動作に対して、「気を落ち着ける」や「同僚に見られない」を動作として目的に立てて表現しているのが[タメニ]文であり、「気を落ち着ける」や「同僚に見られない」を結果状態として目的に立てて表現しているのが[ヨウニ]文である。ここで、両者の使い分けの基準は、コントロール可能か不可能かというより、動作か結果状態かにあると考えられる。

さらに、66)67)のように、動作主が一致しない場合でも、従属節が、動作性・意志性が強いのか結果状態性(出来事性)が強いかにによって、両者に次のような相違が見られる。

66) 息子が真面目に勉強するために、両親は勉強部屋を改築した。

67) 息子が真面目に勉強するように、両親は勉強部屋を改築した。

66)のように、「息子が真面目に勉強する」を、息子がする意志的な動作として位置づけ、その動作を引き起こすことを目的として主節の動作を行うとすれば、[タメニ]が使われるが、「息子が真面目に勉強する」を一つの出来事として受け止め、その結果状態をもたらすことを目的にして主節の動作を行うとすれば、67)のように、[ヨウニ]が選択されることになる。

このように、従属節が動作であるか、結果状態であるかは、両者の連続するところでもあり、相違するところでもある。動作目的表現の[タメニ]文では、主節の意志動作の目的が従属節

^{*1} 前田1992では、両者の違いを「明確な意図性を持つもの」と「外から観察すると・・・もの」と説明している。

(p. 107)。

の動作を遂行することを基本的な特徴とするのに対して、結果目的表現の「ヨウニ」文は、主節の意志動作の目的が従属節の結果状態を実現することを基本的な特徴とするということになる。コントロール性や動作主の一致などは、述語の語彙的な意味から、または従属節の構文の角度から^{*1}、動作の意味になるか結果状態の意味になるかを決定するのに寄与しているが、置き換えのできる例が存在することからも示されるように、「タメニ」文と「ヨウニ」文の相違は基本的に、動作を目的にするか、結果状態を目的にするか、従属節と主節が、「動作→動作」のような継起的発生の関係にあるととらえるか、「動作→結果状態」のような非継起的発生の関係ととらえるかによって決定されるものであると考えられる。言い換えれば、コントロール性や動作主の異同に現れる相違は、いずれも誰かがする動作性と何かになる結果状態性を明確にするものとして、機能しているのである。

4. まとめ

上記の分析を次のようにまとめることができる。

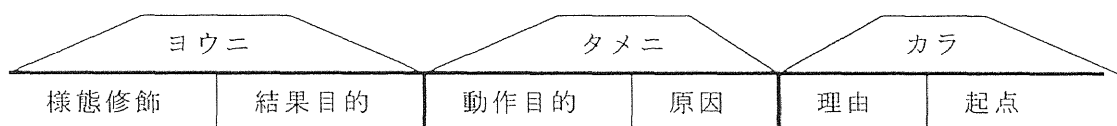
- A：「タメニ」文は、「動作→動作」の継起的発生を特徴とする動作目的を表し、主節の意志的な動作を通じて、従属節の行為を引き起こすきっかけを作り出すことを意味する。それに対して、「ヨウニ」文は、「動作→結果状態」のように、主節の意志的な動作によって、従属節のような結果状態がもたらされることを意味する。
- B：動作の継起的発生の上に成り立つ「タメニ」文は、出来事発生の前後関係を逆にして、原因と動作目的を表し分けるのに対して、「動作→結果状態」のような非継起的関係にある「ヨウニ」文は、「同時性＝様態表現」、「前後性＝結果状態目的表現」というふうに使い分けられている。
- C：動作の意志性やコントロール性、動作主の異同などに現れる「タメニ」文と「ヨウニ」文の違いはすべて、動作を引き起こすことを目的にするか、結果状態を生起させることを目的にするか、に由来するものと考えられる。

^{*1} 従属節と主節が動作を表すか、状態を表すかが、目的表現になるか否かに関わっていることは、第一章の第一節で詳しく論じた。また、複文において、動作性・意志性の有無の決定は、従属節と主節の相互影響によって変わるということも、述べた。詳しくは、第一章の第一節を参照されたい。

終 章

形式化している〔タメニ〕は、単語の本来の語彙的な意味を存しながら、原因から目的までの意味表出の範囲を持ち、その範囲の中で、機能の連続性を有している。そして、具体的な表現においては、条件によって、「原因→中間的用法→目的」と、相違点を明確にして様々な意味を表している。ここで、形態が機能しうる意味表出の範囲のことを意味表出の輪と呼んでおく。〔タメニ〕が果たす機能は、「原因→中間的用法→目的」という意味表出の輪を持ちながら、条件によって、つねに機能連続の線上の一点に位置づけられて、具体的な意味を表すという動的状態にあるのである。一方、〔タメニ〕は、同じ因果性表現の〔ノデ、カラ〕と、原因か理由かの点で区別し、同じ目的表現の〔ヨウニ〕と、動作目的か結果目的かの点で異なっている。この意味で、〔タメニ〕文は、自分が受け持つ意味表出の輪を形成しながら、輪の一点で他の形態と対立して、類義表現と呼ばれる相補分布的な表現システムを形作っているのである。比較されるとき〔タメニ〕の機能は、静的状態に置かれるもので、他の類義表現との対立関係を作り出す特定の側面を示しているのである。このような形態と表現の関係は、分析に当たり、ある形態を中心にする機能の連続性の角度からと、他の類義表現との使い分けを中心とする相違性の角度から、という二つの角度からとらえていくことができる。このような異なった角度からの分析を図示すれば、次のようになるのではないかと考える。

図①一形態を中心に見る意味表出の輪



図②他の類義表現との使い分けを中心に見る形態と形態の関係

〔テ〕	非明示的	客観性	〔ノデ〕
	原因（継起性）		
〔タメニ〕	明示的	主観性	〔カラ〕
	理由（非継起性）		

従来は、分析に当たり、一形態の機能を中心に、動的に表現の連続と区別を見るか、類義表現を構成する様々な形態を視野に入れて、形態と形態の対立関係を中心に、静的に各表現の共

通点と相違点を見るか、いずれかに重点を置いて検討するものが多かったが、形態機能の動的状态と静的状態は、有機的に統一されるべき両側面であり、両者を切り離さずに、両方に注意を配りながら分析を進めなければならない。というよりも、むしろ、形態が自ら意味表出の輪を持つ以上、まず意味表出の連続（動的状态）を可能にする条件を抽出して、それを、この形態の特徴を根本から支える基本的な条件と位置づけ、表出する意味の違いによって変わる他の条件を副次的な条件として、両者を区別しなければならないのである。というのは、類義表現における他の形態との使い分けは、基本的な条件を中心に、他の条件が総合的に関わって実現される具体的な一つの用法に過ぎないからである。

本研究では、継起性と非継起性の対立を中心に、原因表現、理由表現、目的表現の連続性と相違点を分析してきた。

第一章では、継起性を特徴とする〔タメニ〕文について、原因表現と動作目的表現の連続と区別、「意志的な動作⇔動作の持続・結果状態⇔純粋な状態」と「原因→中間的用法→目的」の意味表出の関わりなどを取り上げた。主に、動作の継起的発生に現れる前後の可逆性、継起性に基づく因果性表出の客体性、そして、その他の様々な条件に規定される従属節と主節の節の性格と、その性格づけを受けた従属節と主節の組み合わせによる相互影響、という角度から、〔タメニ〕文が表す表現の連続と区別に考察を加えた。

第二章では、同じ因果性表現の〔タメニ〕〔テ〕〔ノデ〕〔カラ〕の相違について、継起性に基づく因果関係の客体的把握と、非継起性を特徴とする因果関係の主体的把握という角度から、原因と理由を区別し、テンスやモダリティ形式などを手がかりにして、それぞれの共通点と相違点を明らかにした。また、継起性と非継起性の対立を前提にして、〔タメニ〕と〔テ〕が明示的と非明示的の点で異なり、〔ノデ〕と〔カラ〕が理由提起の仕方や理由づけの仕方の相違として、導き出し式と付け加え式の点で区別されることを考えた。

第三章では、目的表現の〔タメニ〕と〔ヨウニ〕の相違について、継起性に基づいて従属節の動作の遂行を目的に立てる動作の連続と、非継起性を特徴として従属節の結果状態の実現を目的に立てる「動作→結果状態」という角度から、主節の意志的な動作による目的性の違いを検討した。

本研究を通じて、原因表現、理由表現、目的表現に見られる表現の連続と相違はいずれも、継起性と非継起性の対立、その対立に規定される客体性と主体性、「動作→動作」の継起的把握と「結果状態→動作」のような非継起的把握という区別に由来するものであることが明らかになった。

ところが、一形態を中心にして意味表出の連続性を見るにせよ、類義表現を中心にして各形態の相違性を見るにせよ、いずれにしても具体的な条件を究明することになってくる。従って、

条件を如何に抽出するかが、分析を大きく左右することになる。複文に限って言えば、対置関係を構成しているため、従属節と主節が直接に、意味表出の連続と区別に関わり、節と節の関係の仕方を決定する条件は基本的なものとしなければならない。副次的な条件は、節の性格づけに寄与してはいるが、直接には意味表出に関わらないのである。このように節の性格づけから、副次的な条件を総合的に考えれば、様々に取り上げられる条件というものは案外、単純にまとめられるかもしれない。語彙的な意味を始め、テンス・アスペクト・ヴォイス・モダリティ形式などを巻き込んで総合的に性格づけられた節の性格は、例えば、[タメニ]文のように、「動作性⇔状態性」、「意志性⇔非意志性」といった意味的な対立関係を形成し、「継起性⇔非継起性」という基本的な条件に従って、意味表出を明らかにしていくのであろう。その意味で、基本的な条件の抽出は、分析の出発点であり、すべての用法を統一した基準で説明するのに不可欠な作業である。

本研究は、それを視野に入れながら、[タメニ]文を中心に、原因表現と動作目的表現の連続と区別、原因表現と理由表現の相違、動作目的表現と結果目的表現の相違を検討したものである。[タメニ]文については、全体的な考察をしたが、比較になる[テ][ノデ][カラ][ヨウニ]などの文については、比較になる使い方だけを問題にし、全体的な分析は行わなかった。しかし、[タメニ]文と同様に、[テ][ノデ][カラ]や[ヨウニ]などの文も、意味表出の輪を有し、機能の連続をなしており、条件によって様々な意味を表し分けているものと思われる。これら関連する文との相違についても、[タメニ]文の角度からのアプローチが主眼になっており、視点を変えれば、変わった立場からのアプローチもでき、新しい帰結が得られるかもしれない。

また、本研究では、複文を中心に分析を進めてきたので、単文と複文の関わり、特に従属節と従属句、従属句と格成分の相違について、つっこんだ論議ができなかった。そのため、単文と複文をダイナミックにとらえることができず、特に、名詞に接続する場合の扱いや分析は十分にできなかったと言わざるを得ない。

いずれも、今後の課題としたい。

参考文献：

- 石川 守(1988) 「目的の「ために」と「ように」、及び既定条件の「たら」と「て」における自己の意志の問題」『Language. Studies』季刊語学研究54号 拓殖大学語学研究所
- 井島正博(1991) 「可能文の多層的分析」『日本語のヴォイスと他動性』仁田義雄編 くろしお出版
- 岩崎 卓(1994) 「ノデ節、カラ節のテンスについて」国語学179
- (1995) 「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編 くろしお出版
- 今尾ゆき子(1991) 「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐってー」『日本語学』12
- 于日平(1985) 「『うちけしのたずね文』から『働きかける文』への移行について」『語学教育研究論』第1号（大東文化大学語学教育研究所）
- (1988) 「提問形式的各種類型－關於「述語＋のか」と「述語＋か」的異同」『日本語学習』第6号 商務印書館
- (1992) 「構文におけるテンスとムードの関係」『中国語教育研究文集4』吉林教育出版社
- (1996) 「「タメニ」の意味表出と構文的特徴－複文に見られる時間関係と意志性についてー」『日本語と日本文学』第22号 筑波大学国語国文学会
- (1996) 「因果性表出に現れる根拠扱いの客観性と主観性－「ノデ」と「カラ」の相違についてー」『筑波日本語研究・創刊号』「筑波大学文芸・言語研究科 日本語學研究室」
- (1996) 「理由／原因を表す複文に於ける時間と表現の関係－「タメニ」と「ノデ、カラ」の相違を中心にー」『日本學研究6』北京日本學研究中心 科学技術文献出版社（1997.6に出版予定）
- 奥津敬一郎(1975) 「形式副詞論序説」都立大人文学報
- (1986) 「第一章・形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 奥田靖雄(1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文ーその体系性をめぐってー」『教育国語』86
- (1988) 「文の意味的なタイプーその対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい」『教育国語』92
- 尾方恵理(1993) 「「から」と「ので」の使い分け」松村明先生喜寿記念会（編）『国語研究』明治書院

- 上林洋二(1994) 「条件表現各論－カラ／ノデー」『日本語学』13
- 影浦慎太郎(1996) 「後置詞「ために」」日本文学研究第35号・大東文化大学日本文学会
- カトリース・ガルニエ(1994) 『日本語の複文構造』細川英雄・小出美河子訳 ひつじ書店
- 北原保雄(1981) 『日本語助動詞の研究』大修館書店
- (1981) 『日本語の世界6』中央公論
- 北原保雄など昭和56年 『日本文法事典』有精堂
- 久野 章(1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 草薙 裕(1983) 「テンス・アスペクトの文法と意味」『朝倉日本語新講座4・文法と意味1』草薙 裕・南不二男・中野 洋・吉田夏彦著 朝倉書店
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
- 言語学研究会・構文論グループ(1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(二)－その2・原因的なつきそい・あわせ文－」『教育国語』86
- 小矢野哲夫(1995) 「格くずれ－ひとえ文とあわせ文とのあいだ－」『複文の研究(上)』仁田義雄編 くろしお出版
- 甲田直美(1994) 「情報把握からみた日本語の接続詞」『日本語学』9
- 国語学会編(1981) 『国語大辞典』東京堂出版
- 国語学会編(1996) 『言語学大辞典』第6巻「術語編」三省堂
- 国立国語研究所(1951) 『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』
- 佐治圭三(1984) 「類義表現分析の一方法－目的を表す言い方を例として－」『金田一春彦博士古稀記念論文集第2巻・言語学編』三省堂
- (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書店
- 塩入すみ(1995) 「スルタメニとスルタメニハ－目的を表す従属節の主題化形式と非主題化形式－」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編 くろしお出版
- 白川博之(1995) 「理由を表さない「から」」『複文の研究(上)』仁田義雄編 くろしお出版
- 鈴木重幸(1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 田窪行則(1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』5
- 高山善行(1987) 「従属節におけるムード形式の実現について」『日本語学』12
- 高橋太郎(1983) 「構造と機能と意味－動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって－」『日本語学』12

- 田中章夫(1977) 「7助詞(3)」『岩波講座・日本語7・文法』岩波書店
- 田野村忠温(1990) 『現代日本語の文法－「のだ」の意味と用法－』和泉書院
- 趙 順文(1988) 「「から」と「ので」－永野説を改釈する－」『日本語学』7
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 永野 賢(1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』2月号
- (1988) 「再説・「から」と「ので」とはどう違うか－趙順文氏への反批判を踏まえて－」『日本語学』12
- 成田徹男(1983) 「動詞の「て」形の副詞用法－「様態動詞を中心に」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院
- 仁田義雄(1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』6
- (1991) 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- (1991) 「ヴォイス的表現と自己制御性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- (1995) 「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』4
- (1995) 「シテ形接続をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版
- 野田尚史(1995) 「文の階層構造から見た主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』益岡隆志・野田尚史・沼田善子編 くろしお出版
- 野田春美(1995) 「「のだから」の特異性」『複文の研究(上)』仁田義雄編くろしお出版
- 花井 裕(1990.3) 「「ので」の情報領域－「から」の対話性と比較して－」『阪大日本語研究』2
- 前田直子(1992) 「「目的」を表す従属節「～するように」の意味・用法－様態用法から結果目的用法へ－」『日本語教育』79号
- (1995) 「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ－目的を現す表現－」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編 くろしお出版
- (1996) 「日本語の複文の記述的研究－論理文を中心に－」学位申請論文・未刊
- 益岡隆志(1995) 「時の特定・時の設定」『複文の研究(上)』仁田義雄編 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 「第二章・副詞節」『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
- 三上 章(1972) 『現代語法新説』くろしお出版
- 南不二男(1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 森田良行(1988) 『日本語表現文法』アルク出版社

- 森山卓郎(昭和63) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 望月通子(1990) 「条件づけをめぐってー理由の「シテ」と「カラ」」『日本学報』9大阪
大学文学部日本語研究室
- 矢沢真人(1992) 「格の階層と修飾の階層」『文芸言語研究 言語篇』21 筑波大学文芸・
言語学系
- (1994) 「「格」と階層」『森野宗明教授退官記念論集』森野宗明教授退官記念論
集編集委員会・代表北原保雄 三省堂
- 山梨正明(1993) 「格の複合スキーマモデルー格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」『日本
語の格をめぐって』仁田義雄編 くろしお出版
- 山岡政紀(1995) 「従属節のモダリティ」『複文の研究(下)』仁田義雄編 くろしお出版
- W・M・ヤコブソン(1990)「条件文における「関連性」について」『日本語学』4
- 吉田茂晃(1989) 「シテイル形式の意味分化の原理」『日本語学』6
- F・ワイスマン(1977)『言語哲学の原理』(フェリス・ロボと楠瀬淳三訳)大修館書店
- 渡辺洋子(1992) 「現代語助詞論攷ー「から」と「ので」はどう違うか」日本語学論説資料
- 和気愛仁(1995) 「「に」の機能」筑波大学 文芸・言語研究科平成7年度修士論文 未刊
-
- 呂叔湘(1952) 『中国文法要略』商務印書館
- 黎錦熙(1957) 『新著国語文法』商務印書館
- 黎錦熙和劉世儒(1985) 『中国現代文法』商務印書館
- 王維賢(1994) 『現代漢語・複句新解』華東師範大學出版社

用例出典一覧表：

松本清張『けもののみち』1972文芸春秋 西村京太郎『特急「富士」に乗っていない女』平
成3年角川文庫 夏目漱石『文鳥・夢十夜』平成8年44刷り新潮文庫 門田泰明『背徳の
舞台』1988徳間書店 清水一郎『女教師』昭和55年角川文庫 栗木薫『家』平成5年角川
文庫 勝目梓『不倫の報酬』1989講談社文庫 『情事の報酬』平成2年祥伝社 笹沢左保
『花嫁狂乱ー音なし源捕物帳(一)』昭和62年時代小説文庫 池波正太郎『殺しの掟』1985講
談社文庫 『秘伝の声』平成2年新潮文庫 シドニイ・シエルダン著中山和郎訳『明日があ
るなら』1990アカデミー出版サービス(株) 国語国立研究所『現代語の助詞・助動詞ー用
法と実例ー』1951 東京ニュース通信社『TV T a r o・Movie Guide』1997.1月～7月